静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第66集

石　成　遺　跡

平成5年度大津谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第66集

石　成　遺　跡

平成5年度大津谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

石成遺跡の発掘調査は、大津谷川河川改修事業に伴う事前調査として平成５年６月から平成６年３月まで実施した。これは当研究所にとって、島田市での初めての発掘調査となった。本遺跡は、従来からその存在を知られていた遺跡ではないが、今回の調査で新たな事実を明らかにすることができた。

大津谷川の流域には多くの遺跡が存在し、また古くから大津郷、大津御厨などの名で多くの文献上に現れており、往時から島田市域における先進地であった。しかし、古代から中世にかけての歴史の解明の資料にとぼしく、わずかに居倉遺跡・上反方遺跡などの調査例があるのみで、その様相は必ずしも明らかになってはいない。

今回の調査では、中世の屋敷地跡と考えられる遺構の検出や、地元産の陶器の他、広域流通を示す土器類、当時は高級品であった中国陶磁器などの出土により、当該地域における具体的な中世の歴史像を検討する資料を提供できたと考えている。

特に、文献上に伊勢神宮領として現れる大津御厨との関連を示唆する遺物の出土は、実態の不明な点が多い中世荘園の姿を考える上で重要な手掛かりでもある。

しかしながら、今回の発掘調査は河川の改修箇所に限って行われた調査であり、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。今後、この地域での調査の進展が大いに期待されるところである。

最後に今回の調査に深いご理解とご協力をいただいた、静岡県島田土木事務所、静岡県教育委員会、島田市教育委員会、及び地元の関係者の皆様に厚く感謝申し上げたい。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　**斎藤　忠**

例　　言

1　本書は、島田市落合地先に所在する石成遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成５年度大津谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、静岡県島田土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに島田市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、現地調査を平成５年５月１日から平成６年３月31日まで、整理作業を平成６年４月１日から９月30日まで実施した。

3　調査体制は、次のとおりである。
平成５年度
所長　斎藤忠、常務理事　鈴木勲、調査研究部長　植松章八、調査研究三課長　佐野五十三
調査研究員　中鉢賢治、山本真央、鈴木正悟
平成６年度
所長　斎藤忠、常務理事　鈴木勲、調査研究部長　小﨑章男、調査研究三課長　渡瀬治
調査研究員　中鉢賢治、川本忍

4　本書は、調査に当たった職員が分担して執筆した。執筆分担は、次のとおりである。
第Ⅰ章第１節・第Ⅲ章・第Ⅳ章第１・２・３・４節・第Ⅴ章……中鉢賢治
第Ⅰ章第２・３節・第Ⅱ章・第Ⅳ章第４節（銭貨）……川本　忍
第４章第３節……山本真央

5　発掘調査にあたりプラント・オパール分析及び木製品の樹種同定を古環境研究所に委託し、その結果は付編として掲載した。

6　遺物写真撮影は楠華堂（楠本真紀子）に依頼した。

7　平成５年度に調査概報を発刊している。調査概報と本書に記述の差がある場合、本書の記述をもって正式な報告とする。

8　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。

9　発掘調査資料はすべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

10　調査および報告書の作成については以下の方々にお世話になった。記して感謝申し上げたい。
佐藤弘幸　柴垣勇夫　澁谷昌彦　篠ヶ谷路人　嶋野雄康　中野晴久　藤澤良祐
山本義孝　湯之上隆

目　　次

序
例言
目次

第 I 章　調査の経過 …… 1
　第 1 節　調査に至る経過 …… 1
　第 2 節　調査の方法 …… 1
　第 3 節　調査の経過 …… 3

第 II 章　位置と環境 …… 6

第 III 章　基本土層と遺構 …… 10
　第 1 節　基本土層 …… 10
　第 2 節　上層の調査 …… 13
　第 3 節　下層の調査 …… 29

第 IV 章　遺物 …… 32
　第 1 節　土器 …… 32
　第 2 節　木製品 …… 35
　第 3 節　石製品 …… 37
　第 4 節　金属製品・土製品 …… 38

第 V 章　まとめ …… 61

引用・参考文献 …… 64

付編 1　石成遺跡におけるプラント・オパール分析　古環境研究所 …… 65

付編 2　石成遺跡出土木製品の樹種同定　古環境研究所 …… 71

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 …… 2
第 2 図　グリッド配置図 …… 3
第 3 図　周辺遺跡分布図 …… 8
第 4 図　土層柱状図 …… 10
第 5 図　遺構全体図 …… 11・12
第 6 図　土坑ＳＦ101実測図 …… 14
第 7 図　集石土坑ＳＸ102実測図 …… 15
第 8 図　集石土坑ＳＸ301・402・403実測図 …… 16
第 9 図　溝状遺構ＳＤ302実測図 …… 17
第 10 図　掘立柱建物跡ＳＨ201・202実測図 …… 18
第 11 図　掘立柱建物跡ＳＨ203実測図 …… 19
第 12 図　井戸状遺構ＳＥ101・102・103・104実測図 …… 20
第 13 図　土坑ＳＦ105・109・203実測図 …… 21
第 14 図　土坑ＳＦ106・107・108・201・202実測図 …… 22
第 15 図　溝状遺構ＳＤ101・103実測図 …… 23
第 16 図　溝状遺構ＳＤ104・105実測図 …… 24
第 17 図　溝状遺構ＳＤ106・109実測図 …… 25
第 18 図　溝状遺構ＳＤ107・110・111・112・113・114実測図 …… 26
第 19 図　溝状遺構ＳＤ201・202・203・204実測図 …… 27
第 20 図　溝状遺構ＳＤ205実測図 …… 28
第 21 図　杭列概念図 …… 29
第 22 図　下層土層柱状図及び水田範囲想定図 …… 30
第 23 図　出土土器実測図（１） …… 39
第 24 図　出土土器実測図（２） …… 40
第 25 図　出土土器実測図（３） …… 41
第 26 図　出土土器実測図（４） …… 42
第 27 図　出土土器実測図（５） …… 43
第 28 図　出土土器実測図（６） …… 44
第 29 図　出土土器実測図（７） …… 45
第 30 図　出土土器実測図（８） …… 46
第 31 図　出土木製品実測図（１） …… 47
第 32 図　出土木製品実測図（２） …… 48
第 33 図　出土木製品実測図（３） …… 49
第 34 図　出土木製品実測図（４） …… 50
第 35 図　出土石製品実測図（１） …… 51
第 36 図　出土石製品実測図（２） …… 52
第 37 図　出土銭貨拓影 …… 52
第 38 図　土錘・陶錘実測図 …… 52

挿表目次

表　1　作業工程表 …… 5
表　2　周辺遺跡地名表 …… 9
表　3　出土土器計測表（1） …… 53
表　4　出土土器計測表（2） …… 54
表　5　出土土器計測表（3） …… 55
表　6　出土土器計測表（4） …… 56
表　7　出土土器計測表（5） …… 57
表　8　曲物計測表 …… 58
表　9　挽物計測表 …… 58
表　10　木製品計測表 …… 58
表　11　砥石計測表 …… 59
表　12　銭貨計測表 …… 59
表　13　土錘・陶錘計測表 …… 59

図版目次

図版1　遺跡周辺環境（空中写真）
図版2　1　遺跡遠景（西から）　2　調査前状況（南から）
図版3　1　ＳＦ101（南から）　2　ＳＦ101内遺物出土状況（西から）
図版4　1　ＳＸ102（南から）　2　ＳＸ102完掘状況（南から）
図版5　1　１区遺構全景（南から）　2　ＳＤ104（西から）
図版6　1　ＳＤ105（南から）　2　ＳＥ101（南から）
図版7　1　ＳＥ102（西から）　2　ＳＦ105遺物出土状況
図版8　1　１区柱穴群（西から）　2　１区ＳＰ06
3　１区ＳＰ03　4　１区ＳＰ55
5　１区ＳＰ42
図版9　1　２区遺構全景（南から）　2　２区杭列全景（北から）
図版10　1　２区杭列（南西から）　2　ＳＤ205（東から）
図版11　1　ＳＨ201・202（南東から）　2　ＳＨ203（西から）
図版12　1　３・４区遺構全景（南から）　2　４区遺構全景（南から）
図版13　1　ＳＸ402・403（南から）　2　ＳＸ402完掘状況（西から）
図版14　1　ＳＤ302（西から）　2　ＳＤ302内土器出土状況
3　ＳＤ302内曲物出土状況　4　ＳＤ302内木製品出土状況
5　旧河道内折敷出土状況
図版15　出土土器（1）

図版16　出土土器（2）
図版17　出土土器（3）
図版18　出土土器（4）
図版19　出土土器（5）
図版20　出土土器（6）
図版21　出土土器（7）
図版22　出土土器（8）
図版23　出土土器（9）
図版24　出土木製品（1）
図版25　出土木製品（2）
図版26　出土木製品（3）
図版27　出土木製品（4）
図版28　出土石製品（1）
図版29　出土石製品（2）　鉄鏃　陶錘・土錘

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

一級河川大津谷川の河川改修工事は昭和36年から総延長3.1kmの計画で毎年取り組まれている。本遺跡は1989年刊行の『静岡県文化財地図・地名表』に未掲載の全く知られていない遺跡であった。しかし平成5年度の工事予定箇所付近から遺物が採集されていることから、その扱いについて、静岡県教育委員会文化課（以下文化課）と島田土木事務所とが協議を重ねた結果、まず遺跡の性格・範囲を知るために事前調査を行い、その後平面調査に移ることで合意した。当初、文化課は発掘主体者として島田市教育委員会を予定していたが、他の発掘調査の関係から対応が不可能であったため、文化課が試掘調査にあたることとなった。平成4年11月から12月までに学校前橋から堂前橋までの新堤構築箇所約220mの範囲で9箇所の試掘坑による事前調査を実施し、大手ノ木橋以南に平安時代末から鎌倉時代にかけての包含層が存在すること、包含層の下に堆積する砂礫層の下にも水田と考えられる土壌が存在することが確認された。この結果を受けて、文化課の指導のもとに当研究所が受託することとなり、本調査に向けて調整・協議が行われた。平成5年4月30日に調査委託契約が締結され、平成5年5月1日から諸準備・調査に着手した。

第2節　調査の方法

今回の発掘調査では、平成5年度内に竣工予定の堤防工事との調整が課題となった。そのため工事との関係上、調査区を4分割し、新堤部分の南を1区、北を2区、現堤部分の南を3区、北を4区とした。また工事を含めた安全対策として、新堤構築箇所の東端に鋼矢板を打設し、堤防工事終了後、3・4区東端に移設し調査を行う工法を採用した。

調査は1区から開始し、調査終了後は直ちに島田土木事務所に順次引継ぎ、堤防工事に着手することとした。従って調査順序としては、1区→2区→3区→4区となる予定であったが、例年にない天候不順による遅れや、鋼矢板の移設に時間がかかったことから、3・4区は同時に調査を行った。

調査にあたり調査区全体に10m×10mのグリッドを設定した（第2図）。グリッド基軸線は、調査区センター方向として任意に定めたため、南北軸はN－11°44′44″－Wとなっている。また、グリッドは北西隅を起点に、北から南にA・B・C…のアルファベット、西から東へ1・2・3の数字を付した。この組み合わせによりグリッド杭の南東の面をA－1のように表記した。

表土の除去にはバックホウを用い、各遺構面は作業員の手作業で発掘し、土砂の運搬はベルトコンベアを使用した。

発掘調査は層位的に行い、各遺構検出面ごとに遺構、遺物出土状況の実測図作成と写真撮影を行った。遺構平面図・土層断面図は1：20を基本とし、必要に応じて一部1：10縮尺図を作成した。遺構平面図は、簡易遣り方測量を原則としたが、3・4区では調査期間短縮の必要からラジコンヘリを使用した空中写真測量を実施した。

出土遺物はグリッドごとに、層位別・遺構別に取り上げ、土器・木製品・石製品・金属製品等に分けて台帳に登録した。

写真撮影は、6×7判白黒と35mm（カラースライド・白黒・カラーネガ）の組み合わせで記録を行い、調査区全景および遺構は適宜高所作業車、ローリング・タワーを使用して撮影した。

第１図　石成遺跡周辺の地形
（明治24年発行陸地測量部地図を1/25,000に縮小）

また調査にあたっては、１・２区試掘坑からプラント・オパール分析のための試料採取を行い、その分析は65頁以降に掲載している。

第３節　調査の経過

調査は前述のとおり、堤防工事の施工部分から開始することとし、調査委託者である島田土木事務所との協議・発掘作業員の雇用・発掘資器材の準備・現地事務所の設置・法令に基づく諸手続き等の準備作業を５月から行った。

６月

17日から重機による１区・２区の表土除去を開始した。並行して資材の搬入、周辺の除草、安全柵の設置、電気施設の設置、グリッド杭の設置など、発掘区域の基本設定を行う。また表土除去の際、文化課が前年度に行った試掘坑のうち３箇所を重機により再掘削し、断面実測、写真撮影を行い、層序について検討するとともに、排水のための集水桝と水中ポンプの設置を行うとともに、プラント・オパール分析のために古環境研究所に委託して試掘坑から試料の採取を行った。21日にはベンチマークの移設を行う。

梅雨の時期と例年にない梅雨明け後の天候不順が重なった上に、河川に隣接しているため降雨後は湧水が多く調査区内は冠水状態となり、作業の進行が阻害され大幅に日程が遅れることとなった。また、降雨の度に土止めの補修や追加を余儀なくされ、本格的な調査着手まで予定以上の時間が必要となってしまった。

７月

前月に引き続き表土除去を行う。終了部分から、排水溝掘削に着手する。

８月

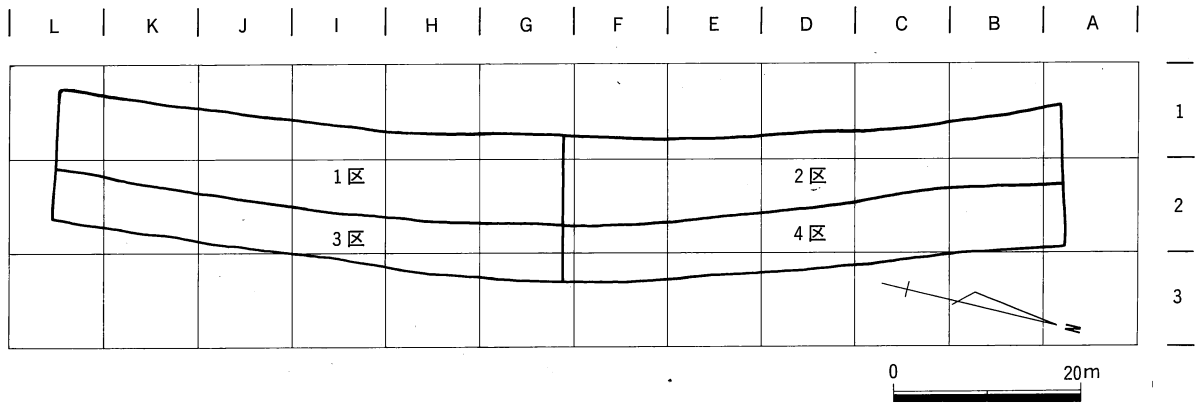
表土除去を継続し、13日で終了。２区部分に関しては表土除去が足りないと判断したため、２区調査開始時に再度行うこととした。17日までに排水溝の掘削を終え、18日から６層上面の調査に着手する。

９月

７層上面での調査に着手する。集石遺構、土坑、ピットなどを検出し、写真撮影、土層断面図の作成を行った。

10月

前月に引き続き、７層上面での遺構検出作業を行い、12日から平面実測図の作成に入り、22日までに



第２図　石成遺跡グリッド配置図

７層上面の調査を完了した。25日より７・８層の掘下げに着手した。

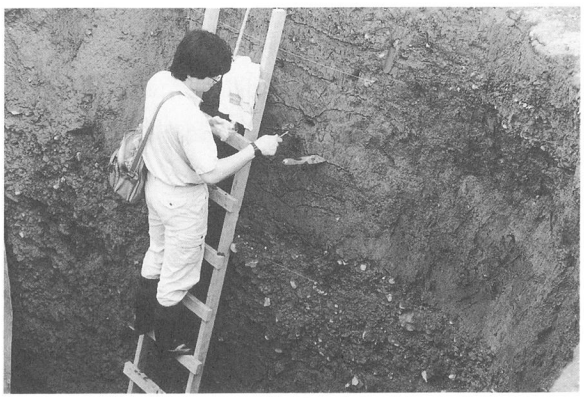
11月

９層上面での遺構検出作業に入る。９層では柱穴と溝状遺構が多く、北側では屋敷地を囲むような東西方向の溝、南側では北東から南西への不規則な方向の溝を検出した。柱穴は約130基を確認した。また、井戸（ＳＥ－101・102・103）も検出している。９層上面を精査した後、遺構の断面図作成と写真撮影を行い、23日に完掘した。24日に１区の全景写真の撮影を行い、25日までに遺構写真撮影を終了した。26日から平面実測に入るとともに、杭・柱根などの遺物の取り上げを行った。

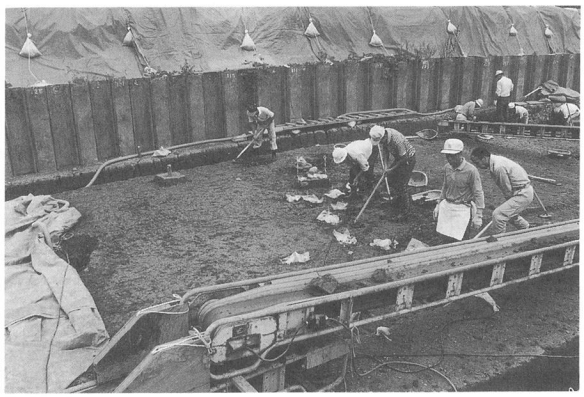
12月

先月に引き続き平面実測を行い、２日までに終了した。３日には９層より下層の状況を確認するため、調査区西側に重機でトレンチを開ける。攪拌痕跡のある粘土層の存在が確認できたが、１～1.5mの厚い礫層が堆積し、これが粘土層を浸蝕しており、遺構は確認されなかった。土層断面図を作成し写真撮影を行った後、６～８日まで埋め戻しを行い、１区の調査を終了した。

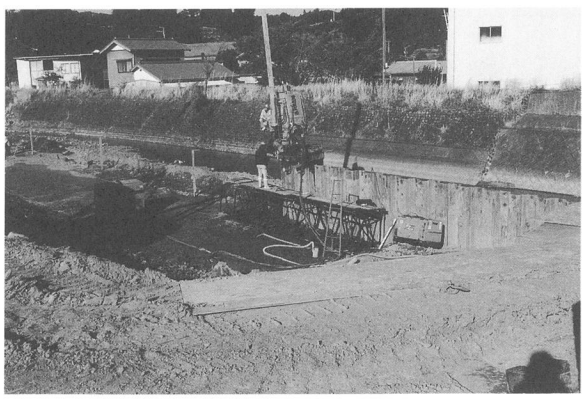
また３日から２区調査のための準備に着手し、発掘器材の移動、排土置場の整備を始めた。６日に表土除去を行い、終了後排水溝の掘削に取り掛かり、15日まで継続した。またグリッド杭の設置を行う。９日には表土除去の際、２区北半分に見られた砂礫層の範囲確認のため、調査区を南北に縦断するトレンチを入れた。１区で12層として確認された砂礫層が厚く堆積しており、これが南に向かって傾斜しながら沈み込む状態が確認された。この砂礫層の上面に調査対象である中世の遺構がのる堆積層は認められなかった。また排水溝掘削においても１区の７層に対応する堆積はみられなかったため、調査範囲を南側半分の９層に限定して調査することとした（Ｃ－１グリッドの南側半分以南）。これに伴い排土は当初は場外に仮置きする予定であったが、２区北側に仮置きすることに変更する。16日から９層の上面で



プラント・オパール採取状況



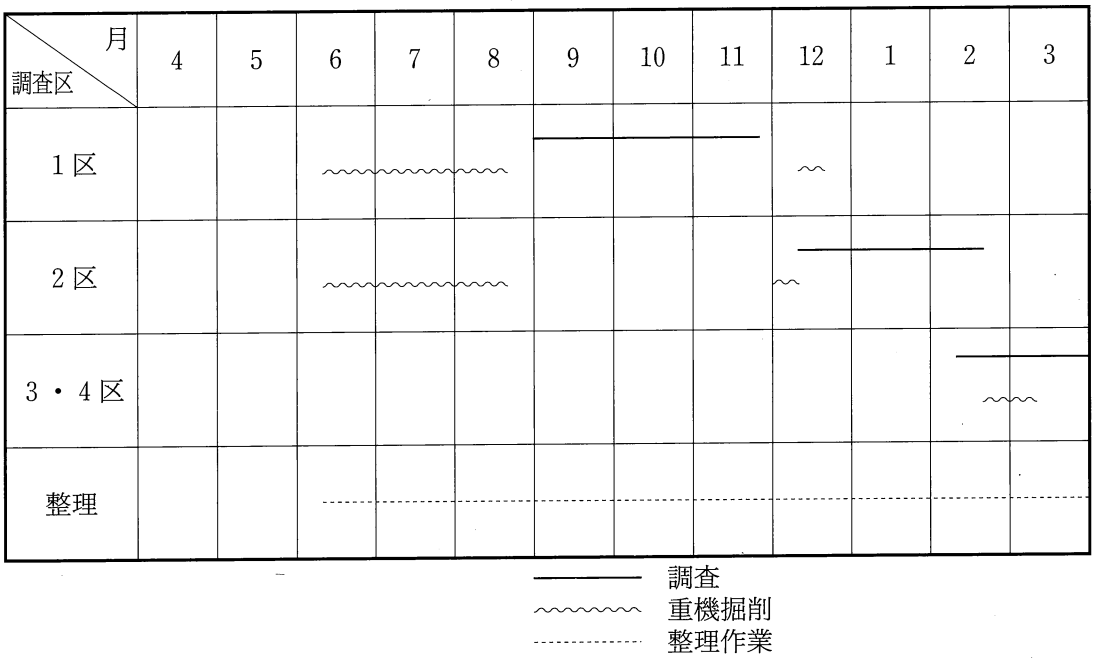
１区作業状況



鋼矢板打ち込み作業

３区作業状況

表１　作業工程表



の遺構検出に入った。24日まで現地作業を行うとともに、年末・年始の安全対策を施して、年内の調査を終了した。

１月

６日から２区の調査を再開し、13日までに完掘した。17日にはローリング・タワーを使用して２区の全景写真を撮影した。18・19日には遺構の部分撮影を行った。20日からは平面実測を開始するとともに遺物の取り上げ作業を行い、27日までに２区の調査を終了した。

２月

当初計画では３区・４区は分割して順次調査を実施する予定であったが、調査工程及び堤防工事との調整の都合から同時に調査することとなった。大津谷川と調査区を遮断するための鋼矢板の移設作業が、堤防工事の終了後に施工するため２月中旬までかかることが予想された。そこで移設工事前の７日から表土除去を開始し10日までに終了した。移設工事の際に危険が伴うため、作業員による遺構検出は22日からとし、調査区内の排水溝の掘削のみを先行させた。25日にグリッド杭の設置を行う。28日からは７層の調査に入った。しかし７層に対応する部分は、３区で一部見つかったものの旧河道により大半が削られており、９層を本格的な調査対象とした。

３月

９層上面での遺構検出を行う。９層を切る旧河道内から、集石土坑を検出した。10日から９層上面での遺構検出作業を行い、27日までに各遺構の土層断面図を作成し、完掘させた。28日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。29日に高所作業車を使用して３・４区の全景写真の撮影、30日に遺構の部分写真の撮影・遺物の取り上げを行い、現地調査を全て終了した。

第II章　位置と環境

島田市域の遺跡は『静岡県文化財地図II』によると約160か所が知られている。その分布は、大井川の扇状地として形成された、現在の市街地より北部の丘陵部を開析している小河川流域と大井川右岸の牧ノ原周辺に大別される。これは大井川が氾濫を繰り返しているためであり、遺跡は大井川氾濫原中よりも、周辺の丘陵部や支流が形成する谷部に散在する。

大井川に関する文献記事は古く、『日本書紀』仁徳天皇62年の条に大井川に大木が流れ着き、倭直吾子籠が派遣され、その大木で船を建造したとするものが最初である。この記事については書紀編纂時の影響があり、全て史実とは認められないとしても、古くから木材の産地として認識されていたと考えられる。平安前期に成立したとされる『日本霊異記』第39に、天平寶字２年（758年）のこととして、洪水で大井川に埋もれていた薬師仏が掘り出されたという説話があり、現在も大津谷川の谷の入り口にあたる野田に所在する鵜田寺の起源説話となっている。また、『続日本紀』光仁天皇、宝亀10年（779年）に大井川の氾濫の記事がみえる。さらに、10世紀から11世紀頃編纂されたと考えられる『類聚三代格』にも大井川の渡船を増加させる記事がある。このように大井川は、氾濫を繰り返し被害をもたらす河川であると共に、豊富な水量を持ち木材を多く産する地域として認識されていたと考えられる。

地質的にみると、大井川は当初は小笠地区に南流し広範囲に厚く土砂を堆積させている。15～20万年前から始まる隆起運動により流路を東に向け始め、従来の河床は隆起して牧之原台地となり、浸蝕された氾濫原が現在の志太平野となっていく。大津谷川は、この大井川に注ぐ支流であり、千葉山麓に源を発し、低丘陵を開析しつつ南流し、現在は伊太谷川と合流し、その後大井川へ合流している。

大津谷川流域からは、未だ旧石器時代の遺跡は発見されていないが、縄文時代からの遺跡が数多く存在し、現在に至るまで生活の場となっている。

縄文時代には、早期の押型紋土器を出土した山王前遺跡、土偶の頭部が出土した中期初頭の尾川平遺跡、祭祀的な性格を持つ竪穴住居が発掘された波田Ｄ－III遺跡、後期の土器片等が表採された広段遺跡、小型打製石斧が出土している城山遺跡等がある。これらの多くは丘陵部上に立地しており、大井川右岸の牧ノ原台地にある縄文遺跡も一定以上の標高に立地することから、縄文海進期には海岸線が深く進入していたと考えられている。

弥生時代は中期後半からの遺跡が多くなり、丘陵上に立地する後期の集落遺跡である山王前遺跡、後期の集落遺跡と推定される落合西遺跡、その連続する集落と推定される鳥羽美遺跡、尾根上に後期の住居跡10軒が発掘された田ノ谷遺跡等がある。この時期大津谷が大井川の氾濫原に合流する地点では、大井川の大量の堆積物により大津谷川の流路が閉塞状態になり、低湿地状に滞水する状態であったと推測されている。

古墳時代前期には、長方墳で割竹型木棺を持ち４世紀後半に位置付けられる城山１号墳が最初に築造される。ついで方墳で２つの埋葬主体を持ち４世紀末から５世紀初頭に位置付けられる鳥羽美古墳が築造される。集落遺跡では山王前遺跡、田ノ谷遺跡が弥生時代から引き続いている。

中期の古墳は現在のところ確認されていないが、後期には横穴式石室を持つ群集墳が大津谷川を見下ろす東西の丘陵上に形成されている。

右岸では、竪穴式石室の伝統をひく横穴式石室を有する鵜田１号墳が、６世紀前半に築造され、これに続く鵜田２号墳は、６世紀後半の築造と考えられている。田ノ谷古墳は石室内に追葬があり築造年代は確定しないが、７世紀前葉の遺物が中心とされる。

左岸では、馬具や太刀などを副葬する横穴式石室の波田１号墳が６世紀後半に築造される。駒形１号

墳は方墳で大津地区で唯一石棺を持つ横穴式石室であり、これも6世紀後半の築造とされる。駒形2号墳も方墳で、多数の土器を副葬品に有し、7世紀初頭から末までの数回の追葬が認められる。二俣1号墳は7世紀前葉に築造され、二俣2号墳は6世紀後半の築造で7世紀前葉に追葬が行われたとされる。

大津谷の古墳で最奥部に位置する山王前古墳は、7世紀初頭の築造の後、7世紀中葉と後葉に追葬が行われている。この他未発掘の古墳が多くあり、今後発見される古墳もあると思われる。また、この時期の集落跡も確認されておらず、今後の調査を待つところである。

奈良時代以降では明らかにされている遺跡は多くはないが、島田市教育委員会が発掘した居倉遺跡、当研究所が調査した矢崎遺跡と上反方遺跡がある。

居倉遺跡は石成遺跡の南方約0.5kmに所在し、平安時代、鎌倉時代の旗指古窯製品の集積拠点的な性格を持つ遺跡とされる。大量の墨書土器、陶硯、題籤、「大津」と墨書された木簡などが出土し、役所的な性格も推定されている。矢崎遺跡は石成遺跡の北方約0.5kmに所在し、鎌倉時代と考えられる水田跡が検出されている。上反方遺跡は石成遺跡の北方約1.7kmに所在し、平成6年度に発掘調査が行われ、中近世の水田が検出されている。

この他に窯跡として菅ケ谷A・B窯跡、菰ケ谷窯跡、田ノ谷窯跡等の古窯が知られる。菅ケ谷A・B窯跡では採集遺物から、平安時代後半から鎌倉時代にかけての窯跡と考えられている。菰ケ谷窯跡は平安後期の陶器を焼いた窯跡とされるが詳細は明らかでなく、また田ノ谷窯跡は国道1号線バイパス工事により消滅したため、内容は明らかではない。

大津谷川の西、約1.5kmには10世紀の第II四半期から操業を始める旗指古窯跡がある。その製品は居倉遺跡に集積されたと推定され、また北方約4.3kmにある千葉山の智満寺遺跡と千葉龍王壇遺跡などの周辺地域から出土するほか、県東部や関東からも出土し、その流通について注目されている。

さて大津地域が文字資料に現れる最も古い例は、最近平城京跡から出土した「(表) 大津里戸矢田マ志我麻呂堅魚　(裏) 員十六連」と記される木簡(『平城宮木簡概報』24－二条大路木簡2-24) であろう。この大津地域は承平年間 (931～937) 成立の和名類聚抄に記す、志太郡内の八郷 (大長・大津・葦原・余能・刑部・英原・夜梨・大野) の内の大津郷に該当すると考えられている。

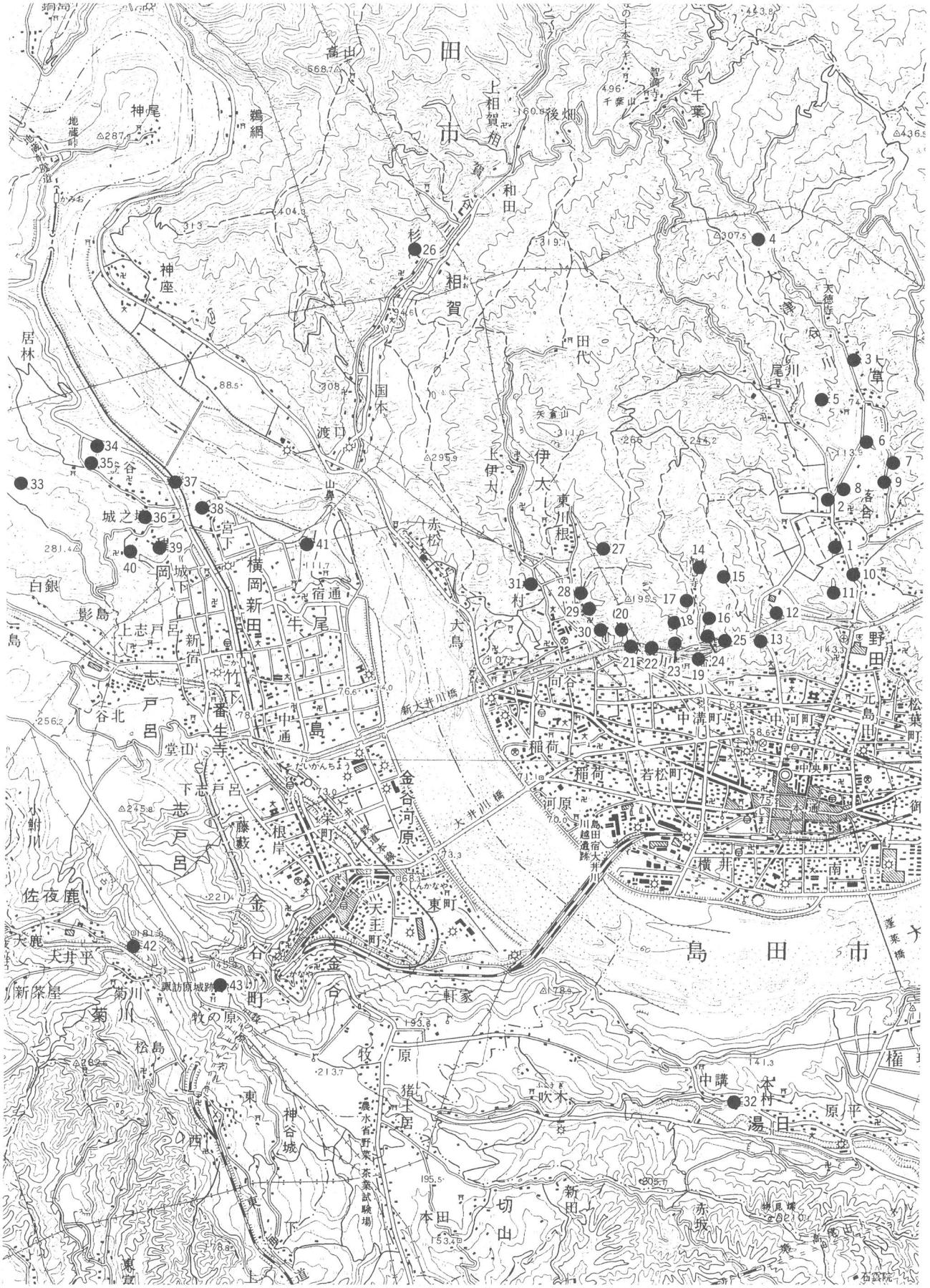
大津郷には、伊勢神宮領として平安時代末には大津御厨が成立していたと考えられているが、『平安遺文』所収の官宣旨 (4849号　陽明文庫蔵「兵範記」仁平4年夏裏文書) によると、「(前略) 前々司之時下　宣旨、令停止彼国所在神領七个所之刻、至于大津・小杉二个所者、依為旧立不致停止也 (後略)」とされており、時期は不明であるが荘園整理令に伴う動きの中で出された宣旨と考えられ、この時点では他の御厨に比べ古くからあった御厨と認識されていたと思われる。

源氏政権の成立期には、甲斐源氏武田太郎信義の三男である板垣三郎兼信が地頭としてこの大津御厨に設置されていたが、『吾妻鏡』にそれを改廃した記事がある。同じ『吾妻鏡』の文治5年 (1189) 5月22日の源頼朝の書状によれば、大津御厨の領家は太皇大后 (先々代の天皇の皇后) 宮領となっており、いつの時点か不明であるが、寄進などによる領有関係の移動があったと考えられる。建久三年 (1192) の「伊勢大神宮神領注文写」(『神宮雑書』鎌倉遺文614) には、大津御厨の給主として故一条大納言家子息という名が見える。

鎌倉時代の伊勢神宮領を記した『神鳳鈔』には、大津御厨は180町、大津新御厨が200町5反180歩と記されており、さらに拡大していると考えられる。

南北朝期には、北朝系で遠江守護である今川氏が駿河守護を兼任することとなった際、南朝系の勢力の根強い駿河を制圧するために、大津谷川流域にあった大津城を攻略している。

以後、大津郷は伊勢神宮の支配を離れ、駿河国守護今川氏の支配下に入り「大津庄」と呼ばれ、後に駿河の国人三浦氏の所領となる。


田市
高山
神尾
鵜網
上相賀
後畑
千葉
和田
相賀
神座
居林
田代
尾川
大津谷川
国本
渡口
伊太
上伊太
東川根
赤松
大鳥
横岡新田
宿通
牛尾
白銀
影島
上志戸呂
新宿
竹下
番生寺
志戸呂
谷北
堂山
中通
島
新大井川橋
大井川橋
向谷
稲荷
中溝町
中河町
若松町
中央町
河原
横井
南
野田
元島田
松葉町
金谷河原
栄町
根岸
藤藪
下志戸呂
佐夜鹿
大鹿
大井平
新茶屋
菊川
松島
金谷町
金谷
天王町
東町
軒家
牧原
猪土居
吹木
中講
本村
湯日
原平
神谷城
農水省野菜・茶業試験場
本田
切山
新田
赤坂
島田市
蓬莱橋
石雲院

第３図　周辺遺跡分布図

この他に、天文５年（1536）４月17日以降に書かれた今川義元判物については、「大津郷花蔵の石成名を今川氏輝の霊供田として慶寿寺に新たに寄進する」と解読する説と、「石成名」を「不成名」と解読する説があるが、いずれにしてもこの地域と今川家との関係は注目される。

大津谷川の上流部には標高496mの千葉山があり、その山頂には神護景雲年中（767-769）の創建の伝えのある智満寺があり、天台宗の山岳仏教の霊験所として栄え、鎌倉時代からは源頼朝と関係を持ち武家冥加の道場として、江戸時代には諸人利益の寺として栄えている。

智満寺に残る『御願寺　駿河国智満寺　記録写』には「天照太神宮往古ヨリ奉勧請、毎月法楽荘厳備へ祭玉フナリ。」との記載があり、伊勢神宮の御厨としての大津郷との関連が注目される。大津郷はこの智満寺と今川氏ゆかりの慶寿寺に至る街道筋としても、早くから開発が行われてきた地域と言えよう。

表２　周辺遺跡地名表

	遺　跡　名	時　　代	種　　別	遺構・遺物	備　　考
1	石成遺跡	古代・中世	集落		平成５年調査
2	矢崎遺跡	古代・中世	水田		平成５年調査
3	上反方遺跡	古代・中世	集落・水田		平成３、４、６年調査
4	大津山遺跡	古代・中世	散布地	陶質土器	
5	大津城	中世	城館	物見跡・自然堀	
6	仲山経塚	中世	経塚	陶質土器	
7	菅ケ谷Ａ地点遺跡	古代・中世	古窯	須恵器	
8	落合遺跡	中世	集落		
9	菅ケ谷Ｂ地点古窯	古代・中世	古窯	須恵器	
10	居倉遺跡	古代・近世	集落	陶磁器・陶質土器・貨幣・鉄鏃	昭和59、60調査
11	野田城	中世	城跡	堀・曲輪跡	
12	田ノ谷遺跡	縄文・弥生・古墳・中世	集落	縄文土器・弥生土器・須恵器・山茶碗	一部残、昭和50、57調査
13	菰ケ谷古窯	古代	古窯		
14	静居寺裏古窯	古代	古窯	陶質土器	
15	大観堂遺跡	近世	散布地		
16	静居寺前Ａ地点古窯	古代・中世	古窯		
17	静居寺前Ｃ地点古窯	古代・中世	古窯		
18	静居寺前Ｄ地点古窯	古代・中世	古窯		
19	旗指遺跡	縄文・古墳・古代・中世	集落・古窯	竪穴住居・縄文土器・弥生土器	一部残・昭和48、49、60、61調査
20	旗指１地点古窯	縄文・古代・中世	散布地・古窯	縄文土器・石鏃・須恵器・石匙	消滅、61～63年調査
21	旗指２地点古窯	縄文・古代	古窯	縄文土器・陶質土器・窯道具	消滅、47～48調査
22	旗指４地点古窯	縄文・古代	散布地・古窯	縄文土器・石鏃・陶器・工房跡	一部残、昭和49、60調査
23	旗指６地点古窯	古代	古窯	陶器・工房跡・住居跡	
24	旗指７地点古窯	古代	古窯		
25	旗指８地点古窯	古代	古窯	陶器	一部残、昭和48調査
26	相賀古窯	古代・中世	古窯	須恵器	
27	東川根Ⅰ古窯	中世	古窯		
28	東川根Ⅱ古窯	中世	古窯		
29	東川根Ⅲ古窯	中世	古窯		
30	伊太口古窯	古代・中世	古窯		
31	中村地蔵前古窯	古代・中世	古窯		
32	丸山古窯	古代	古窯	山茶碗・山皿	
33	三ツ沢古窯	室町	古窯	窖窯・陶器・窯道具	昭和63調査
34	きつね沢古窯	平安・鎌倉	古窯	窖窯・陶質土器	
35	ほろん沢古窯	平安・鎌倉	古窯	陶質土器	
36	釜谷西古窯	平安	古窯		
37	すやん沢古窯	平安・鎌倉	古窯	窖窯・灰原・陶質土器	一部残・昭和42年調査
38	宮の段遺跡	縄文・弥生・中世	散布地	弥生土器・打製石斧・磨製石斧	
39	志戸呂城	中世	城館	土塁	
40	観勝寺遺跡	中世	散布地	陶器	
41	駿河山経塚	中世	経塚	香鉢	
42	宗行郷塚	中世	墓地	方形石組・陶器・古銭	
43	諏訪原城	中世	城館	堀・土塁・丸馬出し・井戸	国指定

『静岡県文化財地図Ⅰ』（1987）他より作成

第Ⅲ章　基本土層と遺構

第１節　基本土層

石成遺跡の基本土層は文化課による試掘坑を再掘削した地点および、１・２区西壁の土層断面および東西南北の排水溝を対象として検討した。土層は河川流域での南北に細長い調査区のため、全域を通じて認められた土層は一部だけであった。そこで調査区のほぼ中央にあり、最も堆積が安定していると考えられた№２試掘坑を標準として１～24層に分層し、他地点との対応関係を導き出すことによって、７層・９層で遺構検出作業を行った。

土層は基本的に上流から下流に向かって緩やかに傾斜しながら厚く堆積する傾向が窺える。礫層（12層）によって堆積が分断されているため、礫層を挟んで上層・下層に分けて呼称した。上層では礫層を基盤として成立した自然堤防上に安定的に堆積したシルト層及び粘土層上に集落が形成されており、下層では後背湿地に形成された水田と考えられる。以下、基本層序について説明するが、水田の可能性が考えられる12層より下の層序については第４節で再度記述したい。

１層　褐色土　厚さ約10cmを計測する盛り土で小礫の混入が多く認められる。

２層　灰色粘土　盛り土で、下方はやや粘性が低く炭化物が含まれる。

３層　明褐灰色粘土　若干の砂・礫・炭化物を含む。下位はわずかだが砂が多い。北には堆積が認められず、南に傾斜しながら、厚く堆積している。

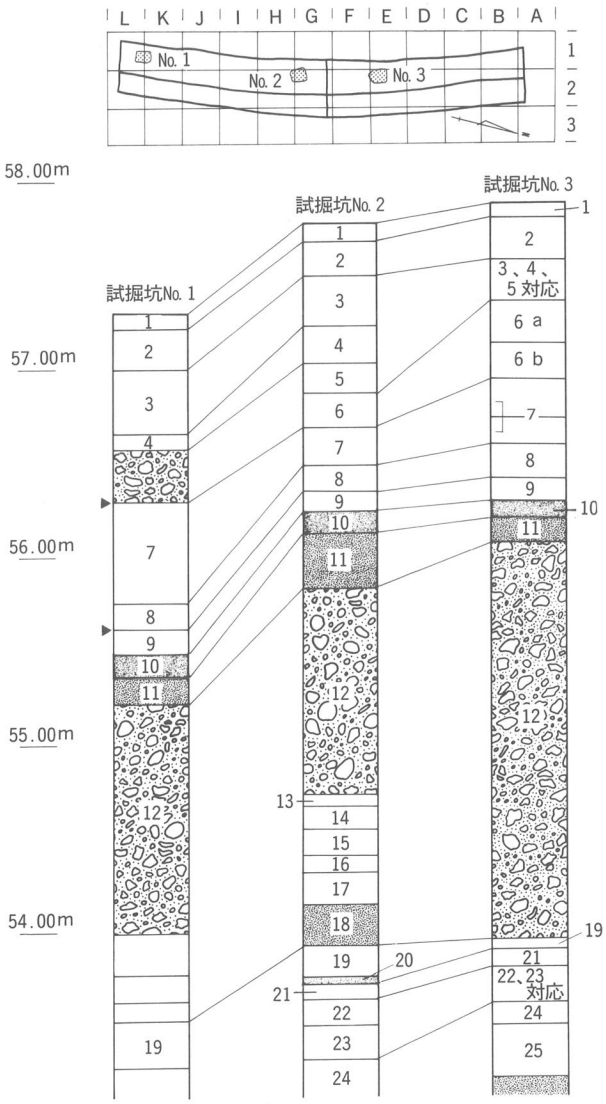
４層　黄褐色土　非常にしまりのある土で、混入物はほとんど認められない。№２試掘坑付近で顕著に認められたが、南側での堆積は薄い。ここまでを重機による掘削対象とした。

５層　灰褐色粘土　粘性の強い土で、わずかに砂の混入がある。№２試掘坑以北で認められたが、№１では砂礫層となっている。遺物包含層。

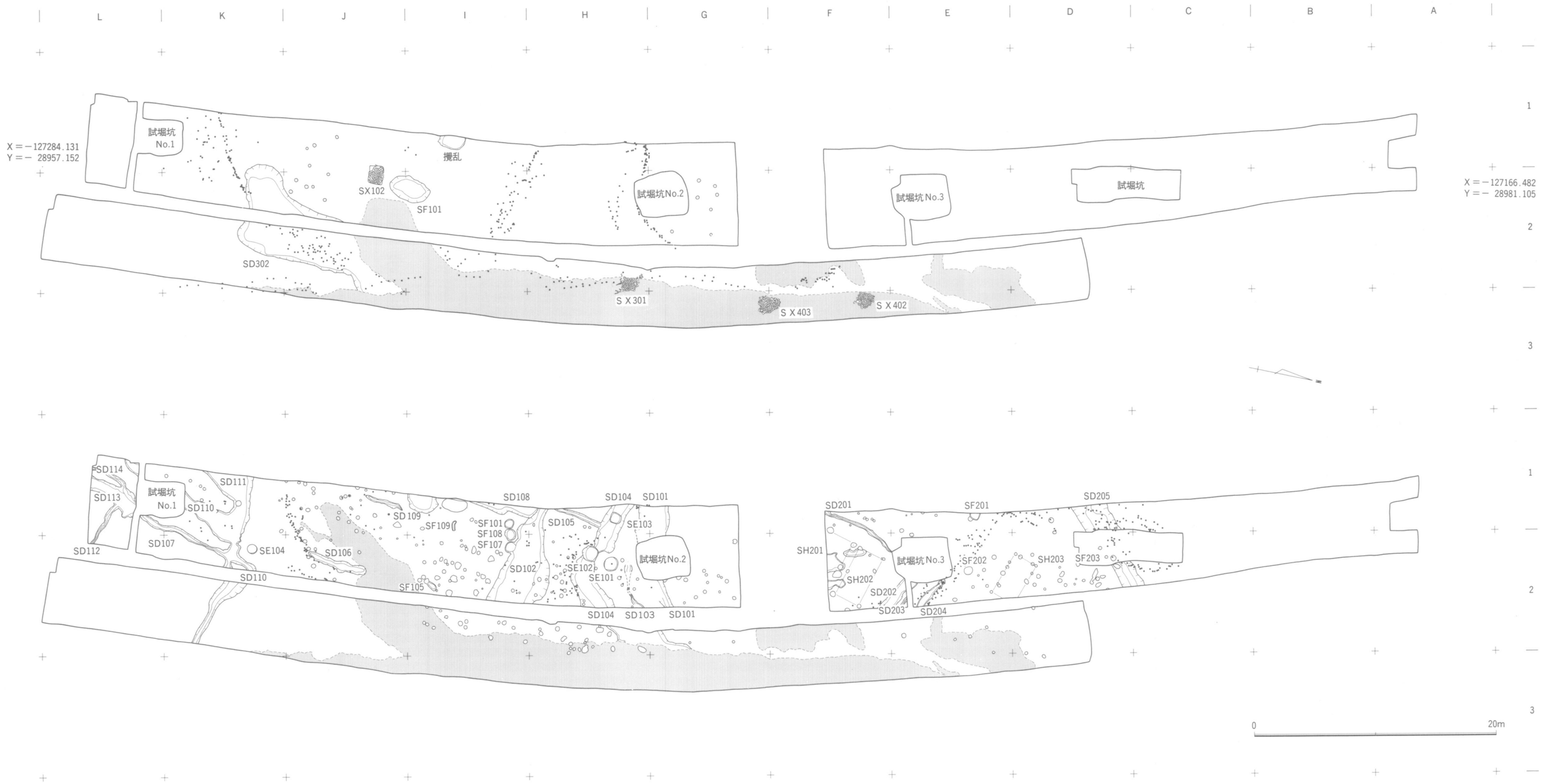
６層　褐灰色砂混じり粘土　５層と類似しているが、色調がやや暗く、砂の混入が多い。遺物包含層。

７層　暗灰色砂混じり粘土　砂の混入が多いが、良くしまった土である。南に向かって傾斜し、厚く堆積する。調査区北側は砂礫の混入の多い暗灰色シルトである。第１遺構面。

８層　暗灰褐色粘土　調査区全域に安定的に堆



第４図　土層柱状図


L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
X＝－127284.131
Y＝－ 28957.152
X＝－127166.482
Y＝－ 28981.105
試堀坑
No.1
撹乱
SX102
SF101
試堀坑No.2
試堀坑No.3
試堀坑
SD302
S X 301
S X 403
S X 402
SD114
SD113
SD111
SD110
SD112
SD107
SE104
SD106
SD109
SF109
SF101
SF108
SF107
SD108
SD105
SD102
SE102
SE101
SD104
SD101
SE103
SF105
SD103
SD201
SF201
SD205
SH201
SH202
SD202
SD203
SD204
SF202
SH203
SF203
0
20m

第５図　遺構全体図

積している。粘性が強く、部分的に植物遺体が含まれる。遺物包含層。

9層　緑灰色シルト　部分的に砂が混入している。ほぼ同じ厚さで堆積しているが、調査区中央部分にやや礫の混入が多い。第2遺構面。

10層　細砂

11層　粗砂

12層　礫　拳大の礫が最も多い。厚さは地点によって異なるが、薄い部分で約90cm、北側では2mを越える。上層の基盤層。

13層　黒色粘土　粘性が非常に強い。下層の土がわずかに混入する。

14層　緑灰色粘土　黒色粘土をマーブル状に含む。

15層　明灰色粘土　粘性が強い、黒色粘土をわずかに含む。

16層　暗灰色砂混じり粘土　砂及び黒色粘土の攪拌が認められる。

17層　黒色粘土　下位は砂を含む。

18層　粗砂　調査区中央部分でのみ確認。

19層　暗灰色砂混じり粘土　ラミナが発達しており、砂・腐植物の水平堆積が中位に認められる。

20層　粗砂　非常に薄く、調査区中央付近でのみ確認。

21層　褐色腐植土　下位には砂が含まれる。非常に薄い堆積。中央から北に広がる。

22層　黒色粘土　炭化物・腐植物を含む。

23層　暗灰色粘土　ラミナが発達しており、中位に腐植物の水平堆積が認められる。

24層　暗灰褐色砂混じり粘土　23層に類似しており、やや色調が暗い。ラミナが発達。

第2節　上層の調査

1　第1遺構面

第1遺構面は7層上面で検出した面である。7層の暗灰色砂混じり粘土は1区中央から北に顕著に認められる土で、2・4区では砂礫混じりの灰褐色土、南側では緑灰色粘土に変化している。また3・4区東側は旧河道により浸食されている。遺構は土坑、集石土坑、溝状遺構、杭列、ピットだが、主に1・3区と旧河道内で検出されている。

土坑

ＳＦ101　（第6図　図版3）

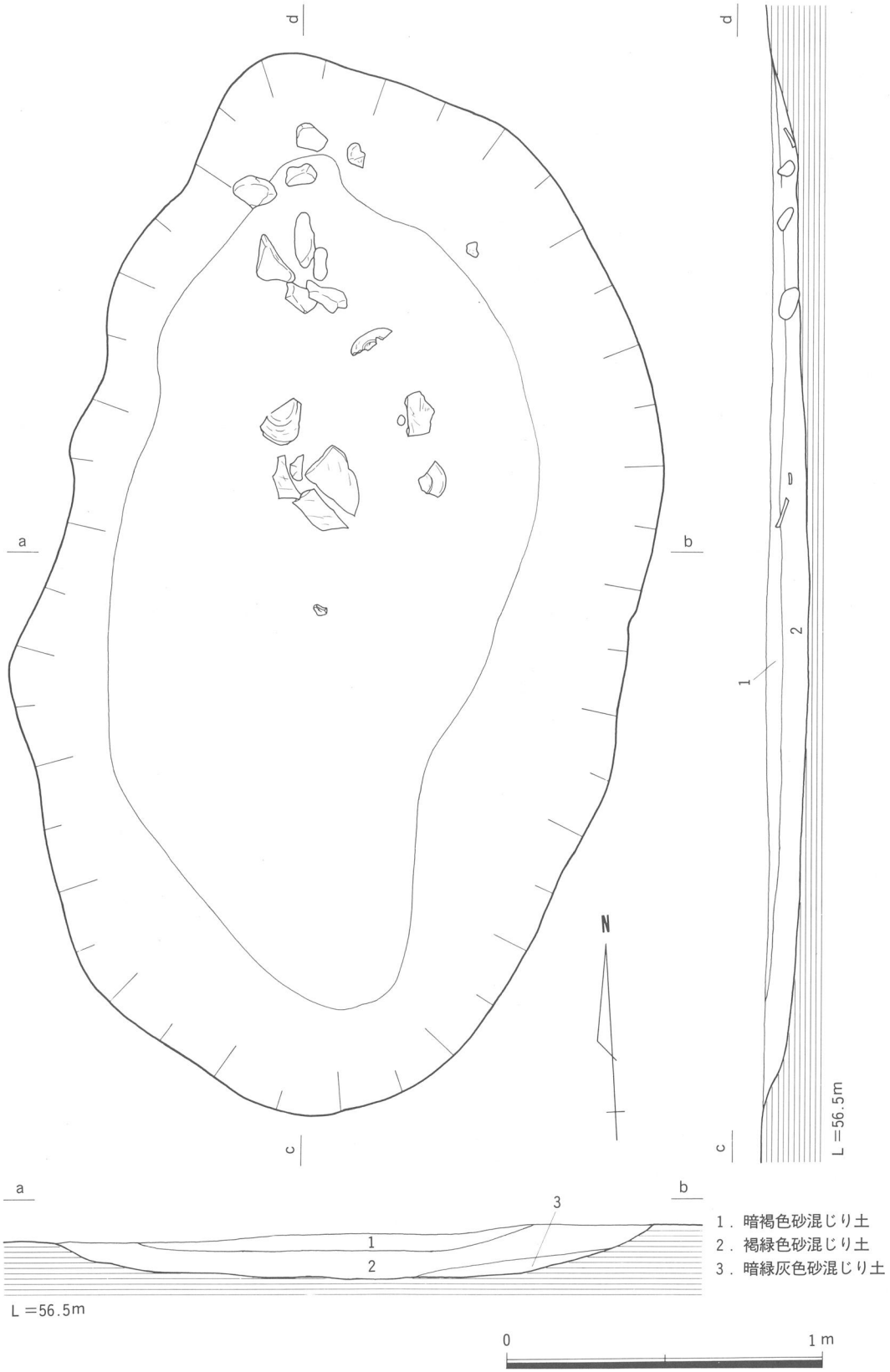
1区のほぼ中央Ｉ・Ｊ－2グリッドに位置する。南北軸3.4m、東西軸1.8m、深さ15cmの南北に長い不整楕円形を呈する。中央底部はほぼ平坦であるが、緩やかな落ち込み方である。覆土は炭化物を含む褐緑色砂混じり粘土が堆積している。遺物は東遠江産の山茶碗、常滑産の甕、古瀬戸の卸皿などが、中央から北側部分かけて、底部直上ないしは中層から出土している。時期は出土した山茶碗から13世紀後半と位置付けられよう。

集石土坑

ＳＸ102（第7図　図版4）

Ｋ－1・2グリッドに位置するもので、南北1.5m、東西1.3mの範囲の中に大小様々な河原石が粗雑に積まれている。集石内部の土は灰褐色砂混じり土である。下部の土坑は南北軸1.5m、東西軸1.3m、深さ約20cmを計測する方形のもので、北東側がやや深く掘り込まれている。覆土は炭化物を多く含む灰褐色

砂質粘土である。遺物は全て集石内からの出土である。東遠系の山茶碗が出土しているが、その形態から13世紀後半に位置付けた。



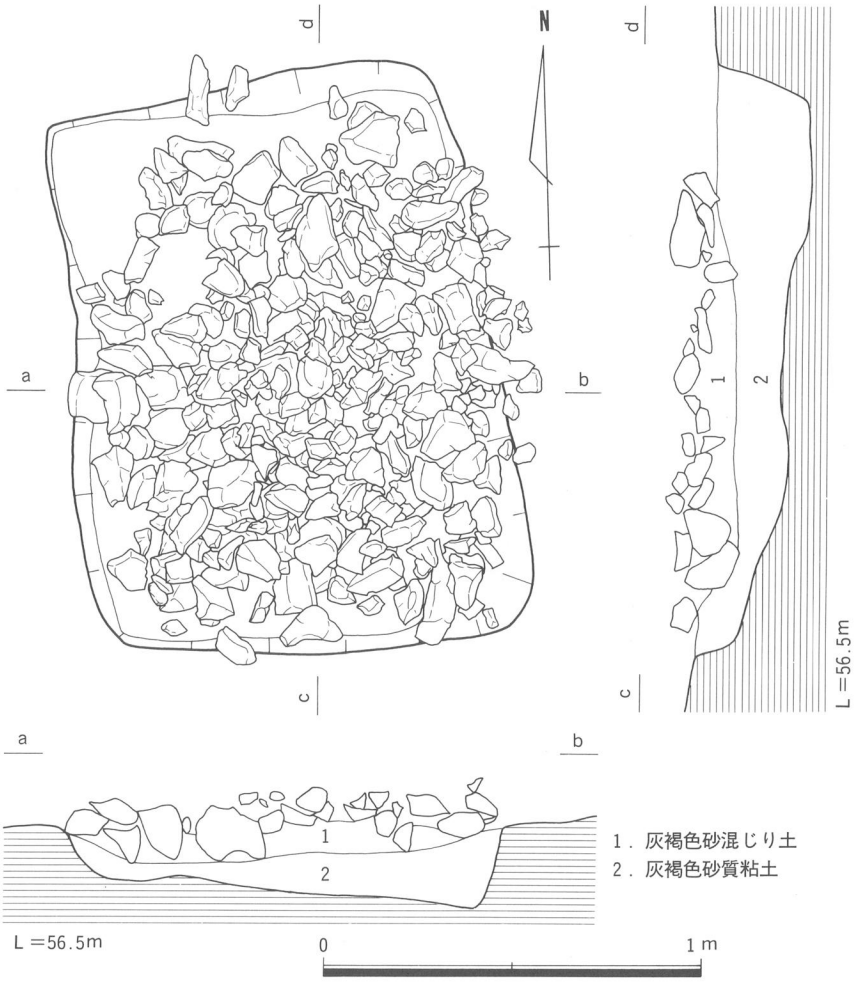
第６図　土坑ＳＦ101実測図

ＳＸ301（第８図）

旧河道内Ｉ－３グリッドに位置する。土坑は南北1.4m、東西1.5m、深さ約20～25cmを計測するやや三角形に近い円形をなしている。礫は約５～20cmほどのものであるが、北東方向に崩れており、その範囲は南北2.1cm、東西1.8mに及んでいる。底部には加工されていない自然木が２本おかれていた。遺物の出土は全くなかった。

ＳＸ402（第８図　図版13－１・２）

Ｆ－３グリッドから検出された。長軸2.2m、短軸1.5m、深さ45cm程の楕円形を呈しており、垂直に近い掘形をもつ。礫は約５～30cm程の大きさのもので、崩れた様子はなくほぼ中央に集中している。また土坑中央からやや南にはほぼ東西方向に長さ約70～90cm、幅約６～7.5cmほどの５本の杭が打ち込まれていた。覆土は２層に分かれ、上層に礫が集中している。上層は非常に粘性の強い灰色粘土、下層は暗灰色粘土である。



第７図　集石土坑ＳＸ102実測図

ＳＸ403（第８図　図版13－１）

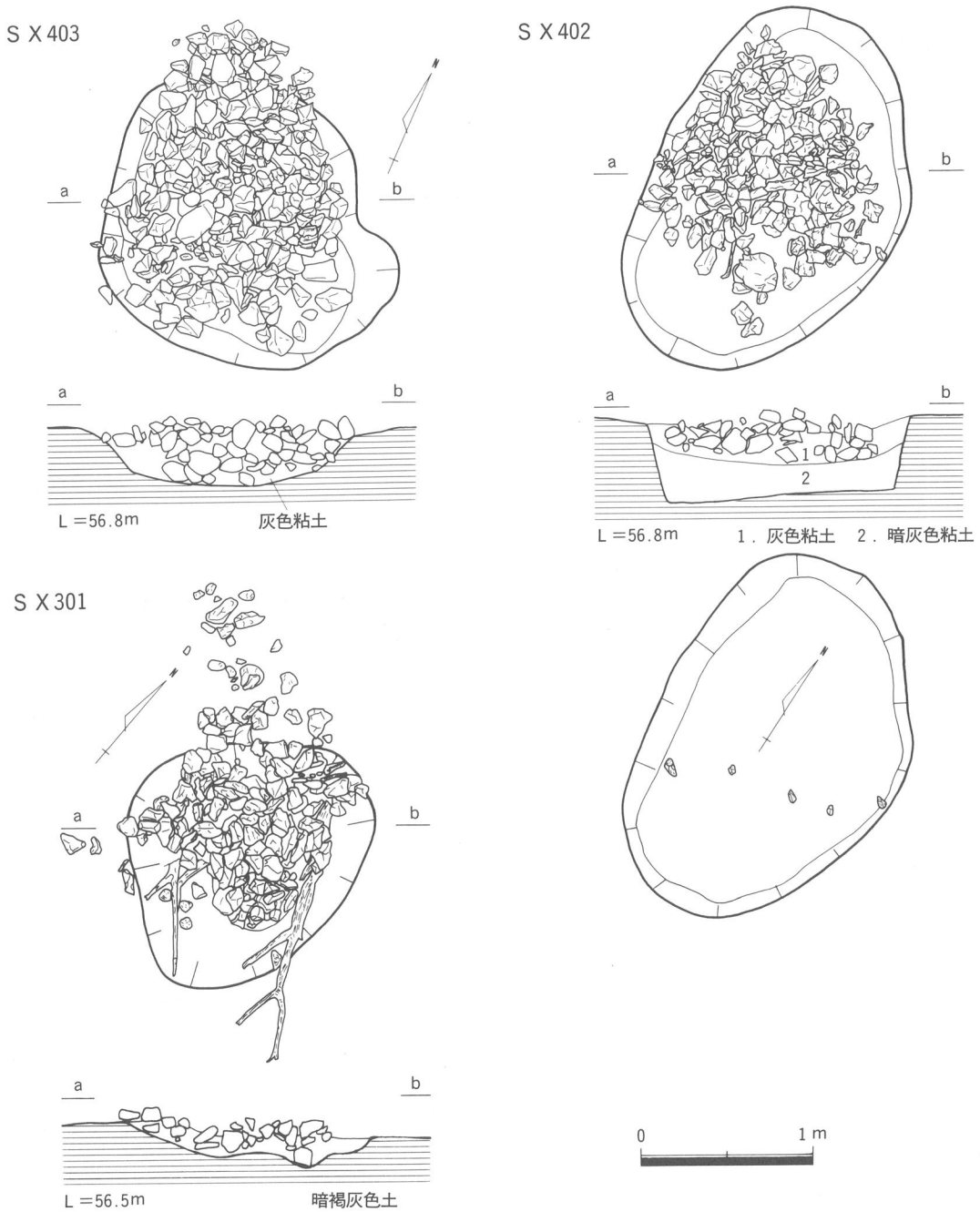
Ｆ－３グリッドに位置する。長軸1.8m、短軸1.6mの不整楕円形のものである。礫は５～30cm程の大きさであるが、若干の崩れがあるようで北側が広がっている。深さは約35cm程を計測するが、礫は底部まで詰まっている状態であった。覆土は非常に粘性の強い灰色粘土である。

さて、旧河道内に形成されているＳＸ301・402・403の３つの集石土坑の性格であるが、河川の水制に関するものか、河川漁労に関するものとして考えた。前者については捨石に類するものや、ＳＸ402・403など丁寧に穴を掘り込んでいるものもあり、木製の枠を有した沈枠など、また後者については簗漁における堤などの誘導部の施設ないしは、川の淵に作られていない点で問題はあるが、穴を掘って玉石を入れている点などかま漁法（大友　1985）に類似するものを考えたが、類例が乏しく判断できなかった。時間的な位置づけであるが、７層を切って形成された河道内に作られていることから、時期的になＳＦ101やＳＸ102よりも時期的に下るものと考えられるが、出土遺物が稀薄なため特定することはできなかった。

溝状遺構

ＳＤ302（第９図　図版14）

１区から３区にかけて南北方向に伸びるが、検出した石の密集度からＮ－20°－Ｅの方向と考えられる。検出長約9.5m，幅約３～５ｍ、深さ10～30cmを計測するが、北側部分は旧河道によって切られ、南側は幅が広がり緩やかに終息している。覆土は暗褐色粘土である。２～20cm程の礫が多く見つかっているが、中位まで溝が埋まった後に投棄されたと考えられる状況である。特に３区の部分では木片も多く、曲物などの木製品も出土している。山茶碗・陶器破片が少量ではあるが出土している。山茶碗から13世紀後半の年代が与えられよう。



第８図　集石土坑ＳＸ301・402・403実測図

第９図　溝状遺構ＳＤ302実測図

2　第２遺構面

第２遺構面は９層上面で検出した面である。９層の緑灰色シルトは１区の南側部分で緑灰色粘質土に変化するものの、ほぼ遺跡全体に堆積している安定した層である。しかし、２・４区の北側及び３・４区の東側は旧河道に切られており、遺構の広がりを把握することはできなかった。遺構は掘立柱建物跡、井戸、土坑、ピットなどである。

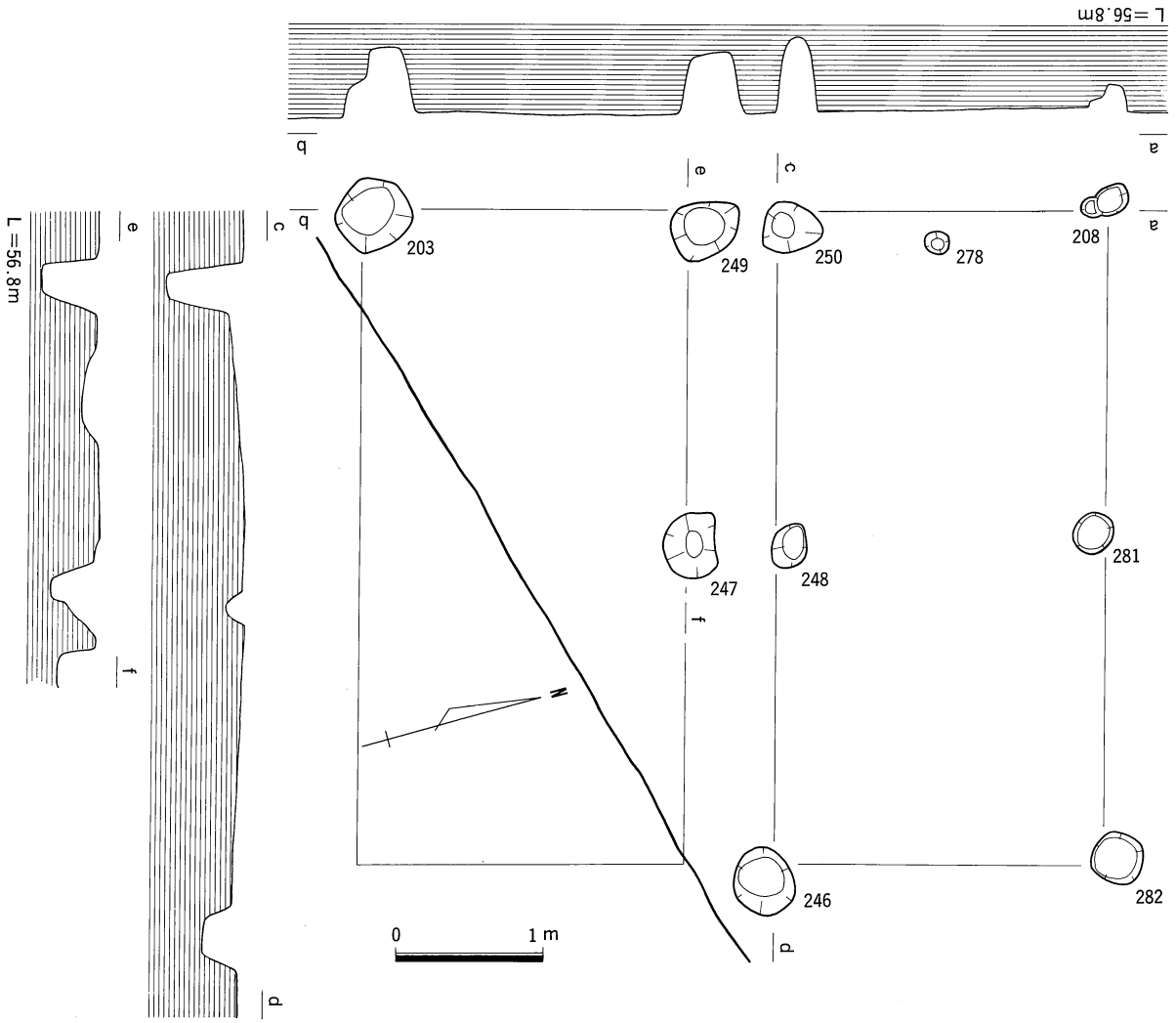
掘立柱建物跡

ＳＨ201・202（第10図　図版11－１）

Ｆ－１・２グリッドで２棟近接して検出した。２棟の最も狭いピットの間隔は20cmにも満たないため、拡張などによる建て替えなど１棟として考えることも可能かもしれない。

ＳＨ201は一部調査区外にかかっているため、３つのピットを検出しただけであるが、梁行１間・桁行２間の東西棟の建物と判断した。梁行2.2m・桁行4.2m、桁行方向はＮ－73°－Ｗである。柱穴は不整の円形ないしは楕円形で、径42～50cm、深さ35～40cmを計測する。覆土は灰褐色粘土である。

ＳＨ202も梁行１間・桁行２間の東西棟の建物である。梁行2.2m・桁行4.2m、桁行方向はＮ－73°－Ｗである。ピットは径24～48cm、深さ16～54cmとばらつきがあるため構造上やや疑問が残る。また柱穴250

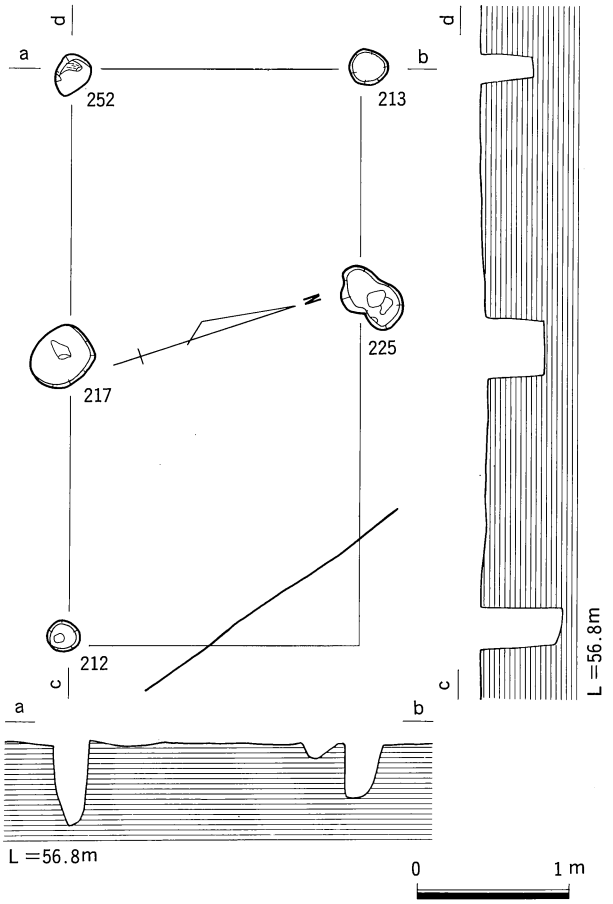


第10図　掘立柱建物跡ＳＨ201・202実測図

と208のほぼ中間の内側に径18cmほどのピット278がある。扉の存在などを想定できるかもしれない。覆土は灰褐色粘土であるが、遺物の出土は全くなかった。

ＳＨ203（第11図　図版11－２）

Ｄ・Ｅ－２グリッドに位置する。一部調査区外となったが、他の建物の在り方から梁行１間・桁行２間の東西棟の建物と判断した。梁行2.2m・桁行4.2m、桁行方向はＮ－73°－Ｗである。柱穴は円形もしくは不整楕円形を呈し、径26～60cm、深さ42～68cmとばらつきがある。柱穴212・217・225からは根固め石が、柱穴252からは木片が出土している。時期を特定できる遺物の出土はなかったが、規模および方向からＳＨ201・202と同時期と考えられよう。



第11図　掘立柱建物跡ＳＨ203実測図

井戸状遺構

すべて素掘りの浅いものであるため、井戸とすることに躊躇はあったが、後述する土坑に比べて深く、10・11層といった砂層にまで及んでいる点や、調査中にも湧水が認められた点から一応井戸として考えた。

ＳＥ101（第12図　図版６－２）

Ｈ－２グリッド内、ＳＤ104の北側50cmに位置する素掘りのものである。長径1.25m、短径1.16m、検出面からの深さ約40cmを計測する。平面形はややいびつな円形であり、垂直に掘り込んでいる。覆土は４層に分かれるが、粗砂を多く含む暗灰色～灰色の粘質土、下位は粘土混じりの砂である。灰釉陶器・山茶碗の小片を出土しており、11世紀後半から13世紀代という幅を持っている。

ＳＥ102（第12図　図版７－１）

ＳＤ104のほぼ中央に位置する。長径1.37m、短径1.23mで南側がわずかに張り出す。ほぼ垂直に掘り込んでいるが、南側部分はテラス状に段をなしている。覆土は３層に分かれている。平面的にはＳＤ104の後に形成されたと考えられるが、ほぼ同時期のものであり、ＳＤ104に水を張るための湧水施設と思われる。山茶碗の小片を出土している。

ＳＥ103（第12図）

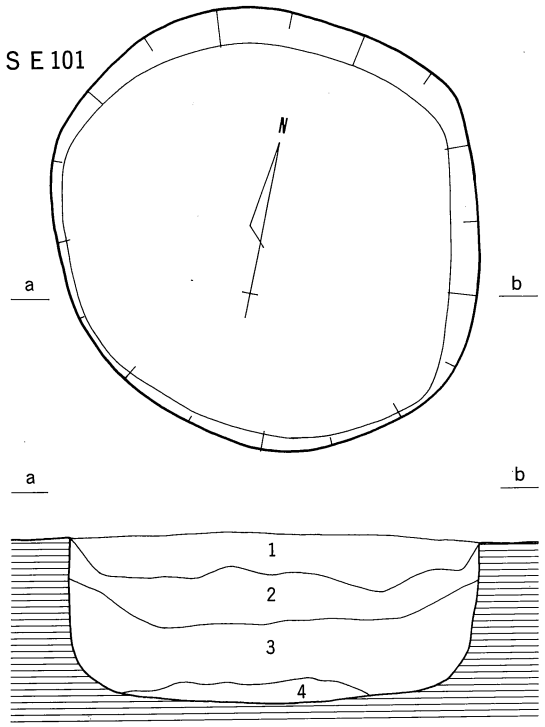
ＳＤ104内で検出した隅丸方形のものである。径約90cm、深さ約45cmを計測する。覆土は３層に分かれる。ＳＥ102同様湧水のために用いられたものであろう。遺物は認められなかった。

ＳＥ104（第12図）

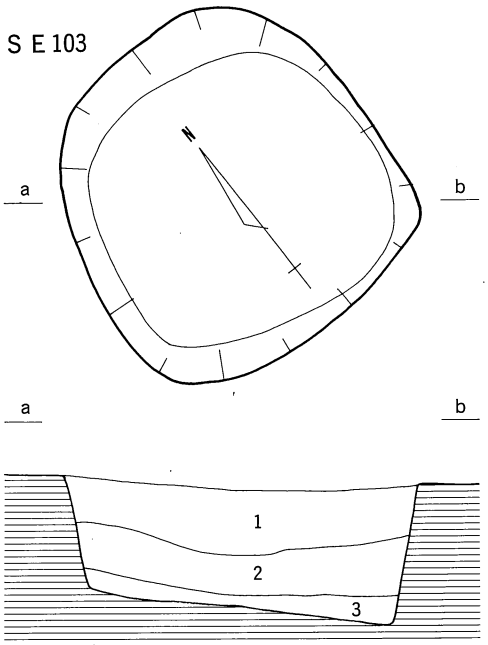
Ｋ－２グリッドに位置している。径80cm、深さ約36cmを計測する。ほぼ垂直に掘り込んだものである。覆土は４層に分かれている。山茶碗の小片を出土しているが時期の特定はできなかった。

土坑

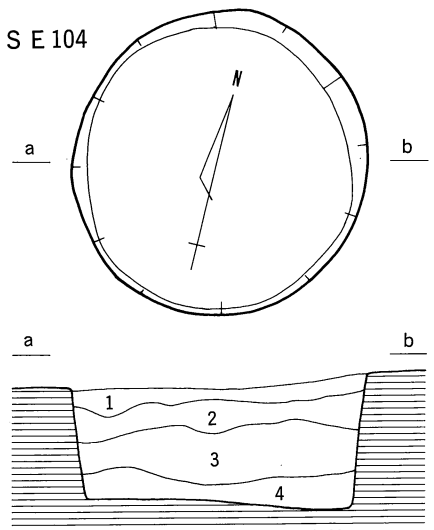
ＳＦ105（第13図　図版７－２）



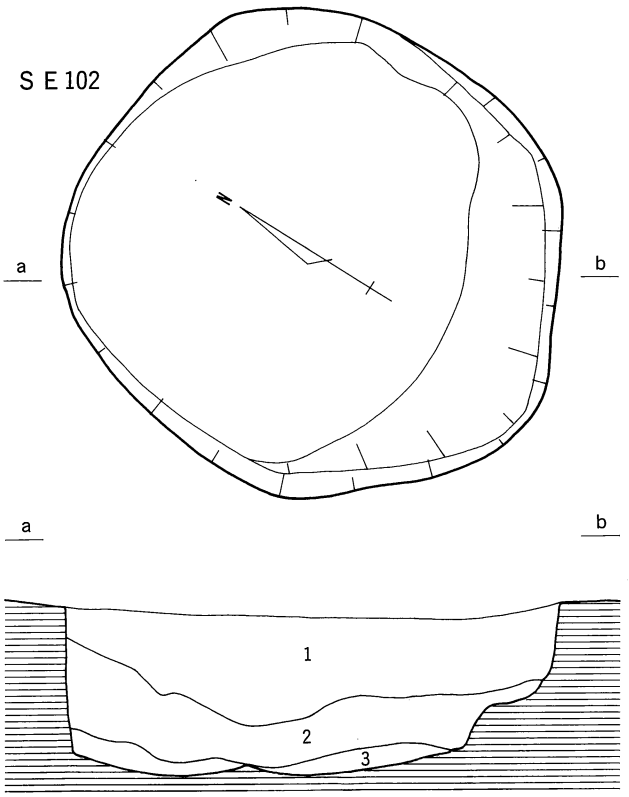
1．灰色砂混じり粘土
2．暗灰色砂混じり粘土
3．灰色砂礫混じり粘土
4．灰色粘土混じり砂



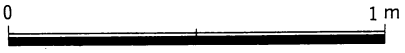
1．灰色砂混じり粘土
2．暗灰色砂混じり粘土
3．灰色粘土混じり砂



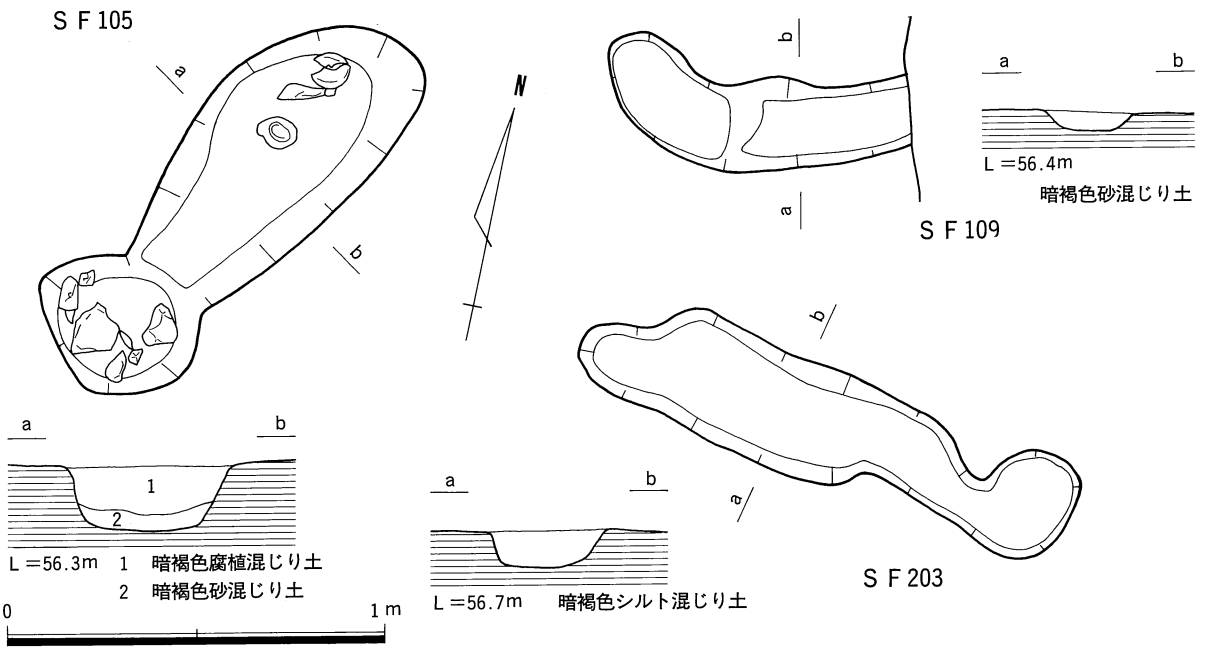
1．暗緑灰色粘土
2．灰色砂混じり粘土
3．暗灰色砂混じり粘土
4．暗灰色砂



1　灰色砂混じり粘土
2　暗灰色砂混じり粘土
3　灰色粘土混じり砂



第12図　井戸状遺構ＳＥ101・102・103・104実測図



第13図　土坑ＳＦ105・109・203実測図

Ｉ－２グリッドで検出した土坑である。円形と細長い楕円形を組み合わせたような形態である。長さ1.25m、幅47cm、深さ17cmを計測する。覆土は２層に分かれるが、上層は腐植土が多量に混入した粘土であり、他の遺構に比べ特徴的であった。南側の円形の部分には５～15cm程の礫がまとまって出土している。遺物は北側から漆小皿２点が出土している。

ＳＦ106・107・108（第14図）

Ｉ－１・２グリッドで検出した円形の土坑で東西に３つが並んでいる。ＳＦ106は西に位置するもので、長径85cm、短径76cm、深さ13cmである。ＳＦ107は東にあるものだが、北側をＳＤ102によって切られている。残存部分の径１m、深さ22cmを計測する。この２つは垂直に近い掘形をなし、底部も平坦である。ＳＦ108は中央に位置するが、東側が張り出す不整形なものである。長径１m、短径90cm、深さ11cmである。緩やかに掘り込まれるが、底部は平坦である。３つの土坑とも覆土は３層に分けられる。最下層は粘性の強い暗褐色粘土が堆積し、上位と中位の２層は砂の混入が多い粘土である。遺物の出土は全く認められず、時期の特定はできないが、覆土の関係から３つの土坑に時間差はないと考えられる。

ＳＦ109（第13図）

Ｊ－１グリッドに位置する浅い土坑で、東側は調査区内に入れたサブトレンチによって切ってしまったため、全容は不明である。残存長79cm、幅25cm、深さ約５cmである。覆土は暗褐色砂混じり粘土で、遺物の出土は認められなかった。

ＳＦ201（第14図）

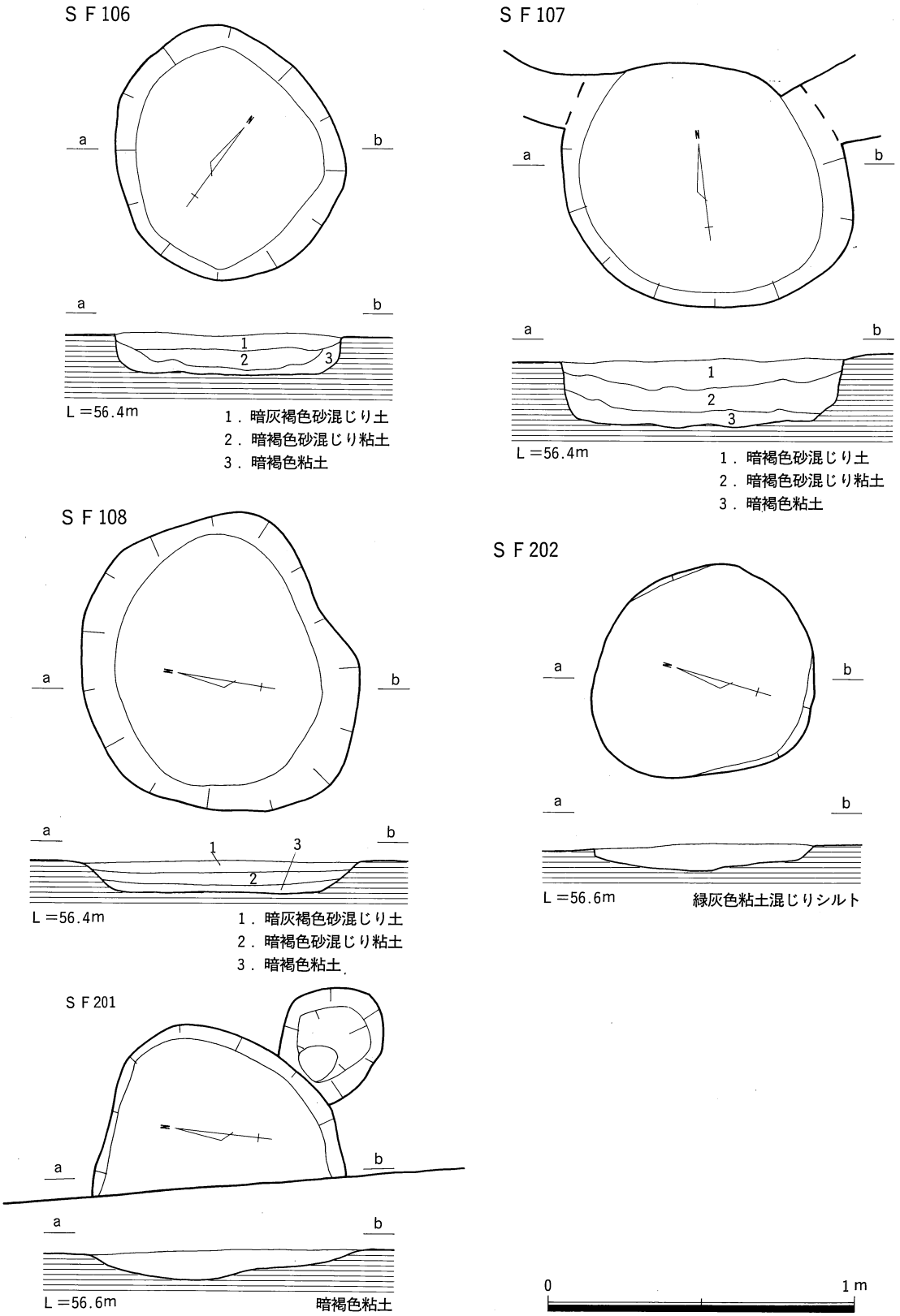
Ｅ－１グリッドから検出した円形と考えられる土坑であるが、西側は調査区外となっている。ＳＰ267を切って作られている。南北の検出長83cm、東西検出長55cm、深さ約10cmである。覆土は暗褐色粘土で、遺物の出土はなかった。

ＳＦ202（第14図）

Ｅ－２に位置する土坑である。平面形態はやや歪んだ円形であり、径約75cm、深さ８cm程である。覆土は緑灰色粘土混じりシルトであり、他の土坑とはやや様相を異にしている。

ＳＦ203（第13図）

Ｄ－２グリッドから検出した不整形の細長い土坑で、長さ1.4m、幅31cm、深さ10cmを計測する。覆土



第14図　土坑ＳＦ106・107・108・201・202実測図

は灰釉碗、山茶碗、土師器の小破片が出土している。

溝状遺構

ＳＤ101（第15図）

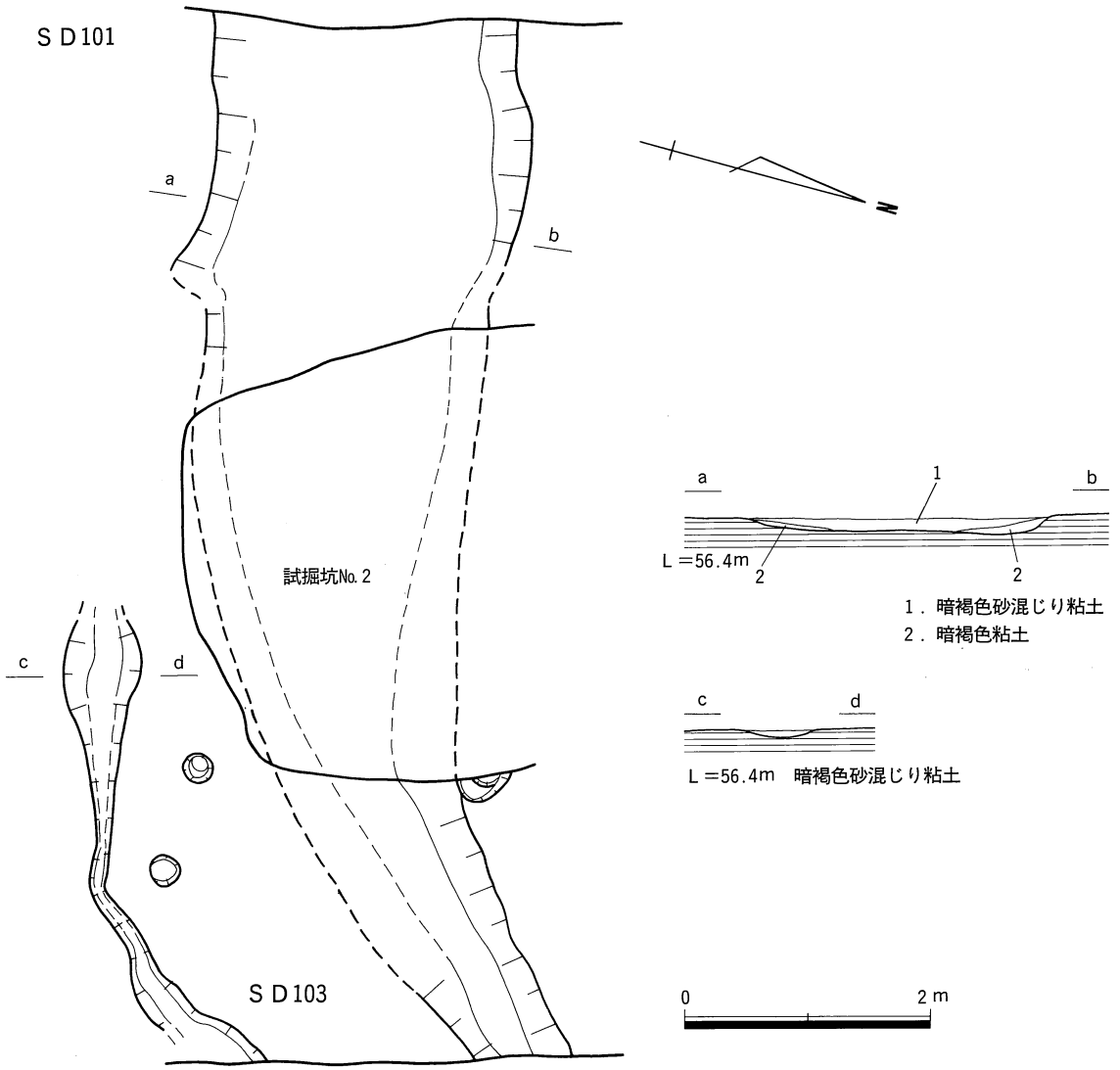
Ｇ・Ｈグリッドの境を北方向に緩やかに湾曲しながら東西にのびる溝状遺構である。検出長約8.5m、幅は試掘坑№.２を境に東西で相違があり、西側で約1.2m、東側で約60cmである。この周辺は洪水の痕跡と考えられる小礫の堆積が著しかったため、平面プランの確認が困難であり、本来の形態は異なっていたかもしれない。覆土は３層に分けられる。遺物は灰釉陶器・山茶碗・土師器などを出土しており、11世紀から13世紀という時期幅がある。

ＳＤ103（第15図）

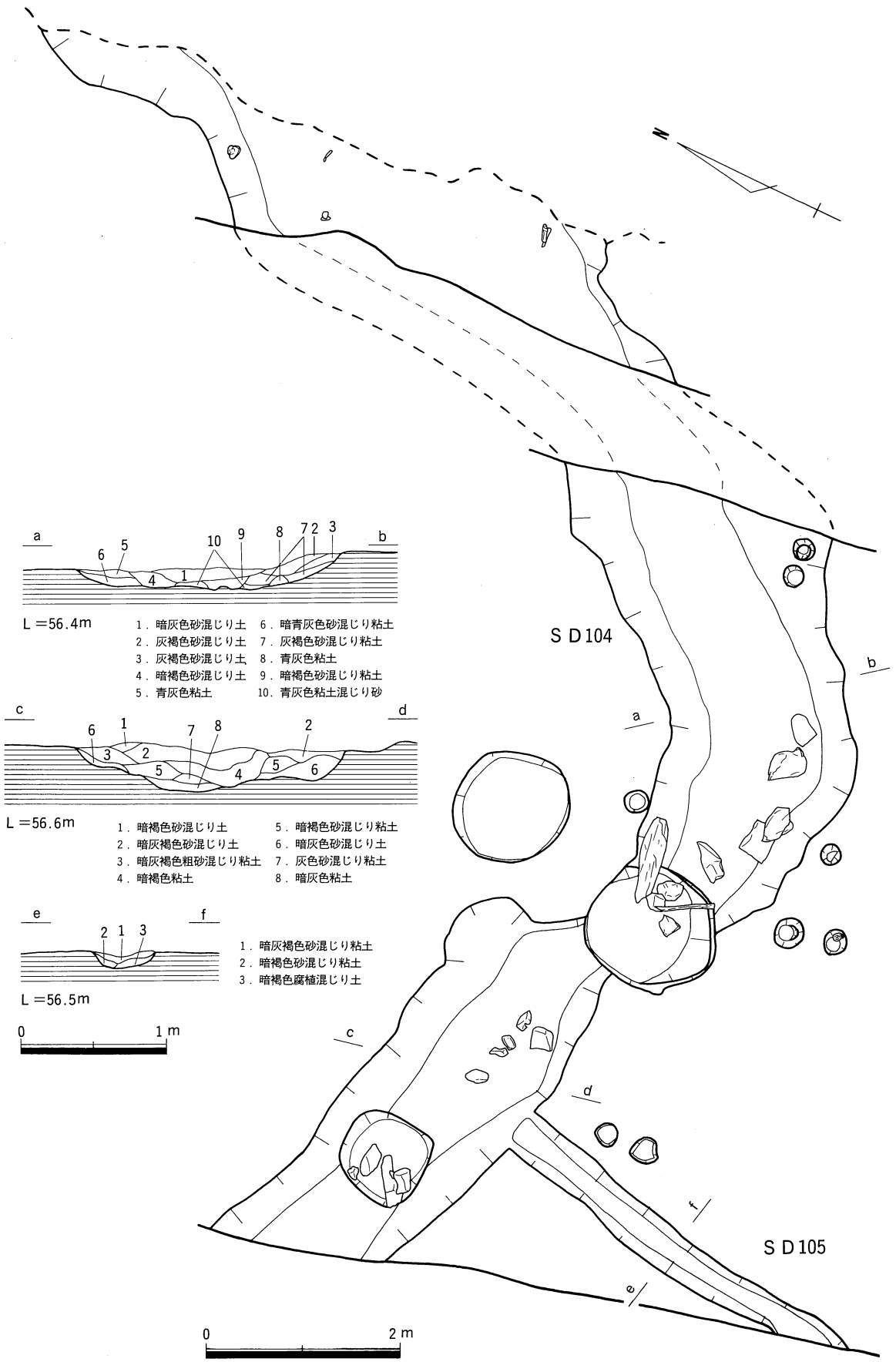
ＳＤ101の南側に位置するものだが、痕跡が確認できただけである。最大幅約65cmを計測する。遺物の出土はなかった。

ＳＤ104（第16図　図版５－２）

Ｈ－１・２グリッドで検出した溝状遺構である。東西方向に延びるが、Ｈ－２グリッドで向きを変え



第15図　溝状遺構ＳＤ101・103実測図



第16図　溝状遺構ＳＤ104・105実測図

ており、３区で旧河道によって切られていたため方向は不確定だが、約20°ほど東に振れながら北方向に延びている。幅は約80cm～2.2m、深さは平均で23cmを計測するが、残存部分から３m以上の幅を持つ箇所もあったと想定できる。断面は緩やかな立上がりである。15～40cmの礫が底部から５～20cmほど浮いた状況で検出されているが、先述したＳＥ102とＳＥ103の付近に多い。覆土は場所により８～10に分層できるが、基本的には砂混じりの灰褐色粘土が主体となっているが、底部付近の粘土には植物遺体が多く含まれていた。遺物は灰釉陶器・山茶碗のほか、瀬戸産の卸皿などが出土しており、11世紀後半から13世紀の時期幅を持っている。

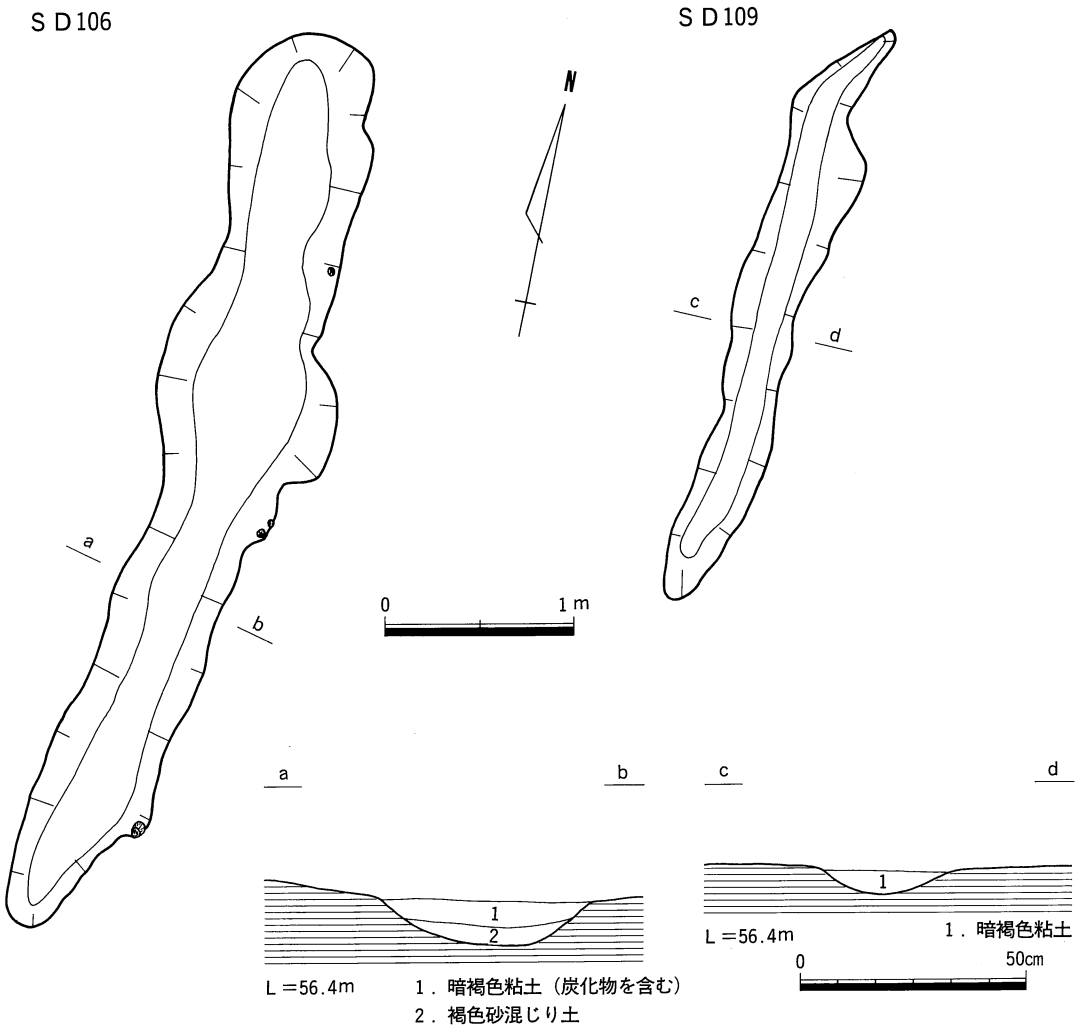
ＳＤ105（第16図　図版６－１）

Ｈ－１グリッドで検出したＮ－９°－Ｅの方向で南北に延びる溝状遺構である。Ｈ－１グリッドでＳＤ104に交わっている。検出長4.2m、幅約40cm、最も深い部分で約10cmである。ＳＤ104に流れ込むように掘られたと考えられる。遺物の出土は認められなかった。

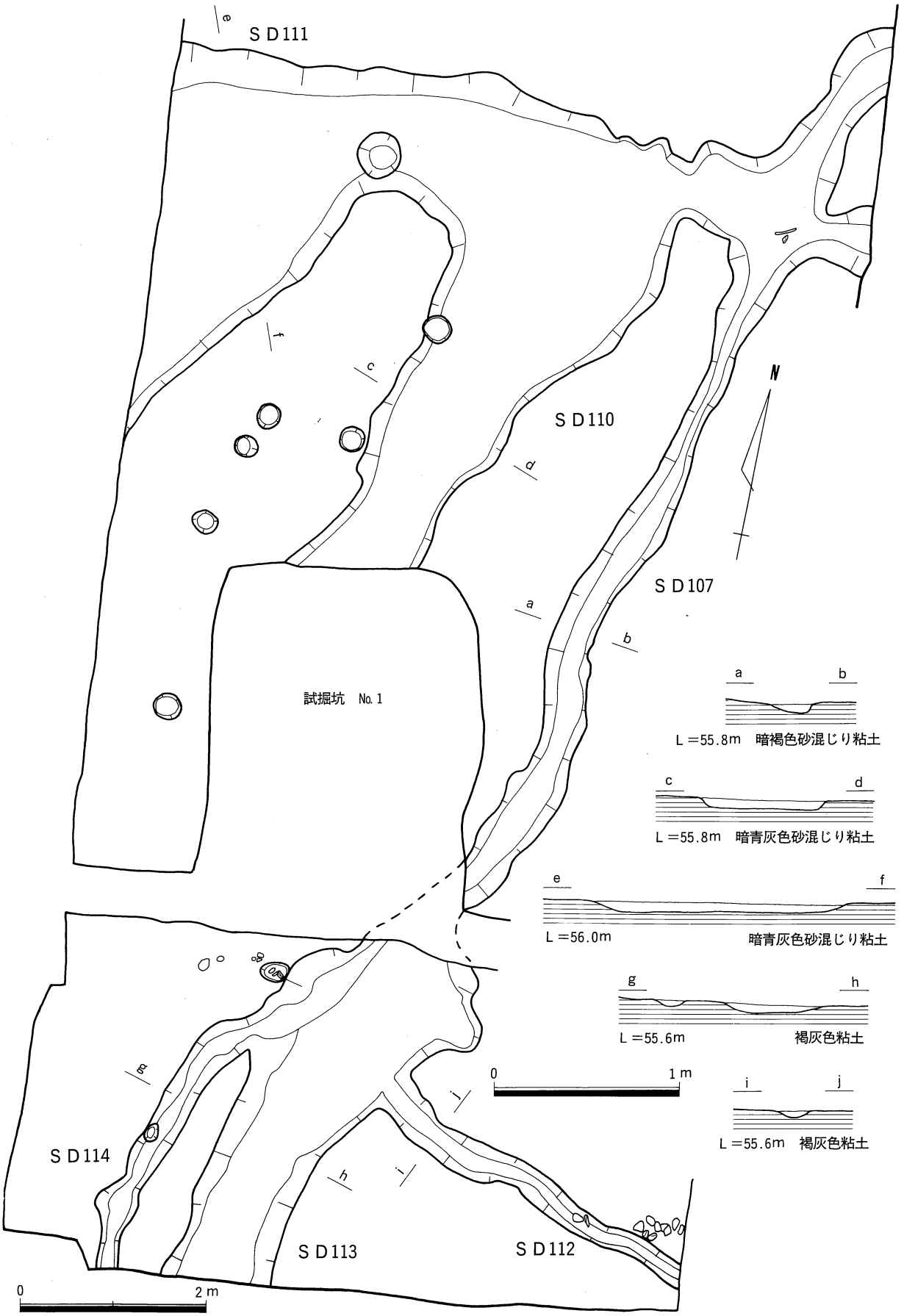
ＳＤ106（第17図）

Ｊ－２グリッドから検出した溝状遺構でほぼ真北に延びており、中央やや北寄りで張り出している。長さ５m、最大幅１m、深さ約12cmを計測する。覆土は２層に分かれるが、上層の暗褐色粘土は非常に多くの炭化物を含んでいた。遺物は東遠江系の山茶碗・小碗が出土している。

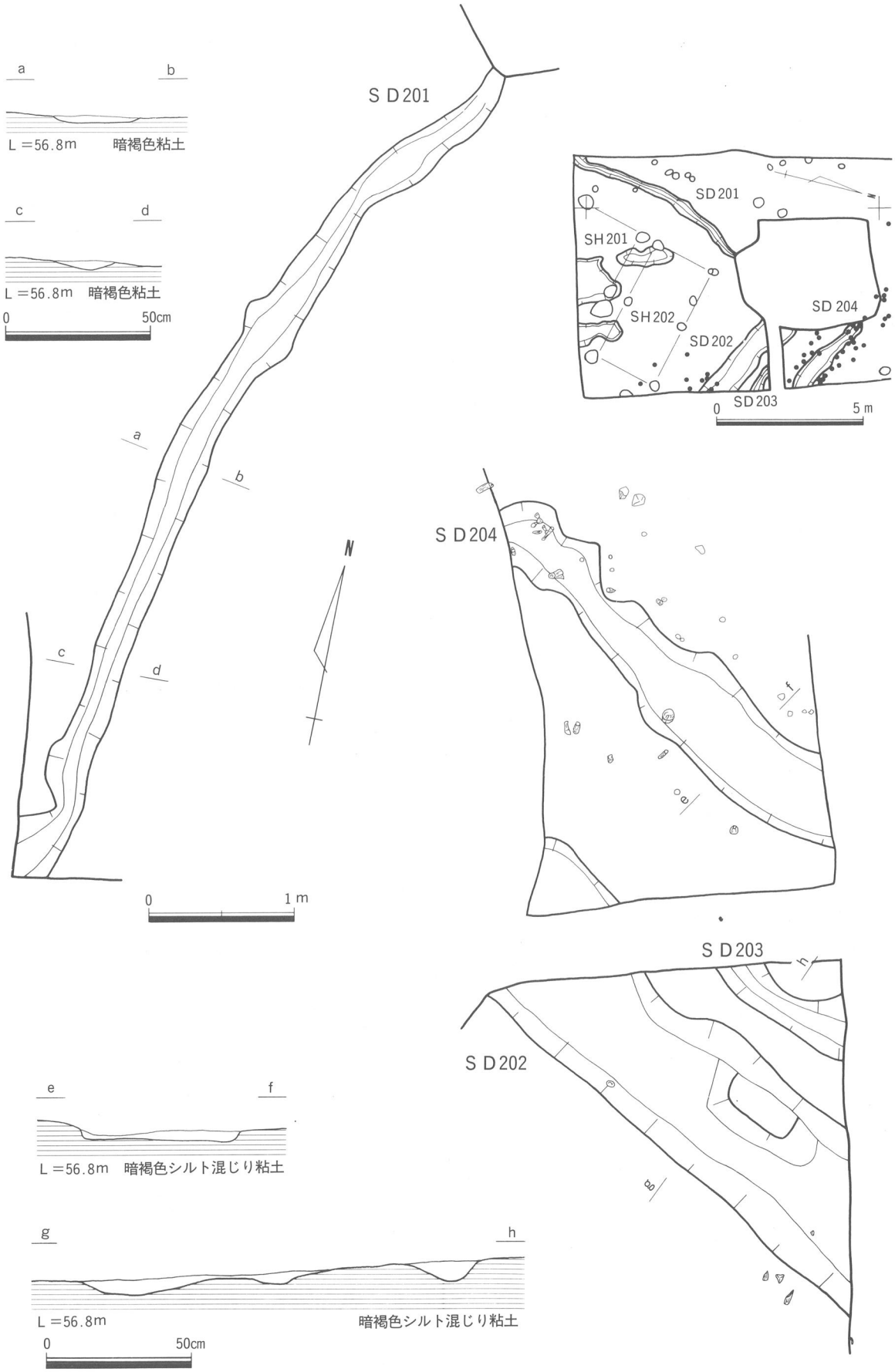
ＳＤ109（第17図）



第17図　遺状遺構ＳＤ106・109実測図



第18図　溝状遺構ＳＤ107・110・111・112・113・114実測図

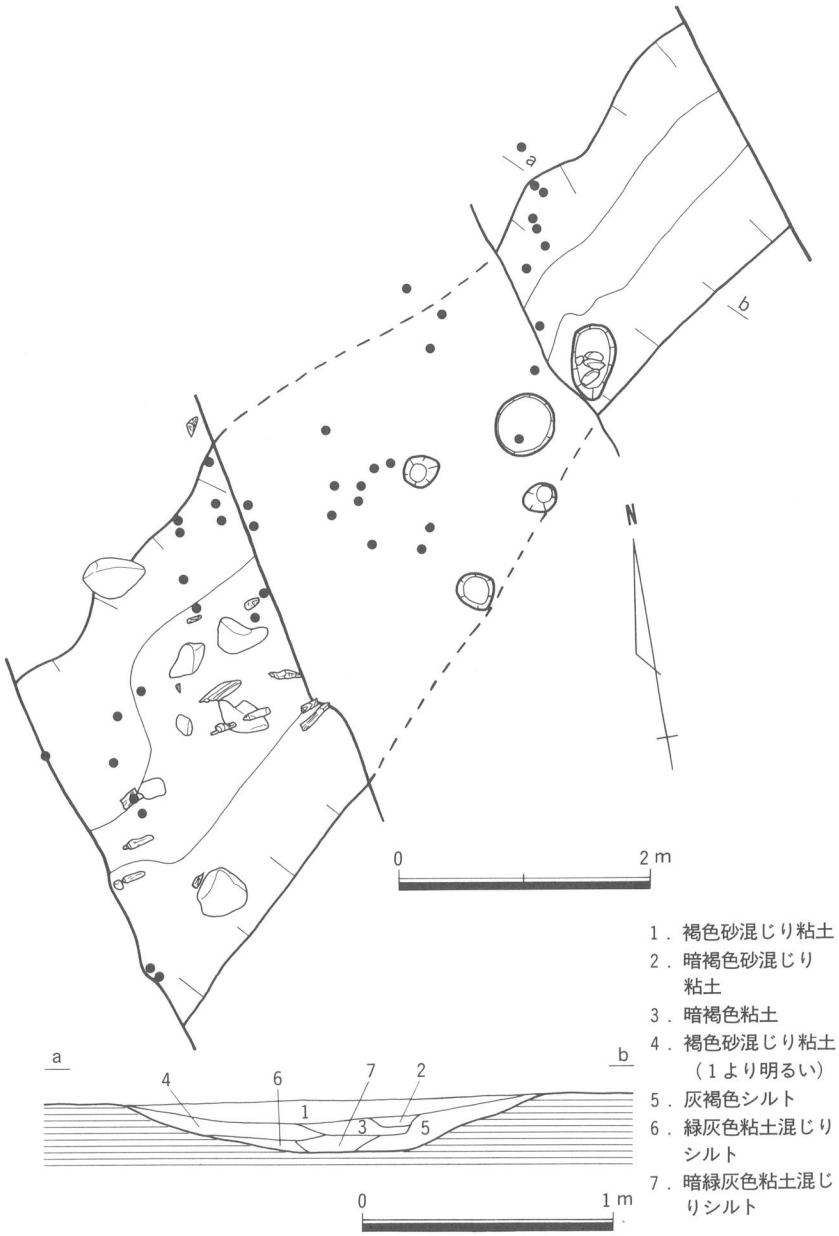


第19図　溝状遺構ＳＤ201・202・203・204実測図

Ｊ－１グリッドに位置する細長い溝状遺構で、ＳＤ106同様ほぼ真北に延びている。全長3.3m、最大幅46cm、深さ７cmを計測する。覆土は暗褐色粘土で、内部から小皿、土師器を出土している。13世紀後半代に位置付けられよう。

ＳＤ107・110・111・112・113・114（第18図）

これらの６本の溝状遺構は遺跡の南端部分から検出された溝である。いずれも非常に浅いもので、南北方向に延びるＳＤ107・110・113・114と東西方向のＳＤ111・112とに分かれる。ＳＤ107はやや蛇行しながら延びているが、北側で調査区外となり、南側はＳＤ112・113・114と交差している。検出長12.5m、幅約45cm、深さ４cmを計測する。山茶碗・小碗・伊勢型鍋を出土している。ＳＤ110はＳＤ111と交差しており、北側に向かって幅が広くなっている。南側は試掘坑によって切られ、それより南側では検出することができなかった。検出長4.6m、幅は最も広い部分で2.2m、深さ６cmである。山茶碗の小片を出土している。ＳＤ113は検出長3.0m、幅1.1m、深さ約５cmである。ＳＤ114はやや西に湾曲しており、検出長1.6m、幅18cm、深さ約５cmである。ＳＤ111は東西方向と考えたが、調査区西側で大きく南側に幅を広げており、それがＳＤ107やＳＤ110の方向に類似していることから別な溝がもう１本存在しているのかもしれない。検出長7.7m、深さ約６cmである。小皿・土師器を出土している。ＳＤ112は検出長3.4m、幅約35m、深さ６cmを計測する。これらの溝は覆土の類似性から同時期のものと考えられ、出土遺物から12～13世紀代に比定されよう。



第20図　溝状遺構ＳＤ205実測図

ＳＤ201・202・203・204（第19図）

Ｅ・Ｆ－１・２グリッドで検出した溝状遺構である。ＳＤ201は南側を排水溝、北側を試掘坑によって切られているため、検出長は約6.4mである。幅約30cm、深さ約15cmを計測する。東側にやや緩やかなカーブを描きながら南北にのびており、掘立柱建物跡ＳＨ201・202の梁行方向にほぼ一致している。ＳＤ202～204はＮ－118°－Ｅの方向でのびる溝状遺構である。ＳＤ202・203は試掘坑№３、ＳＤ203は排水溝によって切られており、それより西側では検出する事ができなかった。ＳＤ202は検出長約3.4m、幅約１

m、深さ約10cm程の浅い溝である。一部土坑状の極めて浅い掘り込みが認められた。ＳＤ203は検出長約1.1m、幅25cm程の溝である。ＳＤ203は検出長3.3m、幅約60cm、深さ16cm程を計測する。これら４本の溝はいずれも遺物の出土がないため、時期差を見出し難く、特にＳＤ202～204の３本は方向も類似している。この内ＳＤ201と202はその位置から掘立柱建物跡ＳＨ201・202に関連する区画ないしは排水の機能を有した溝と想定できるかもしれない。またＳＤ204は杭列に方向が一致していることからそれとの関連を考えたい。

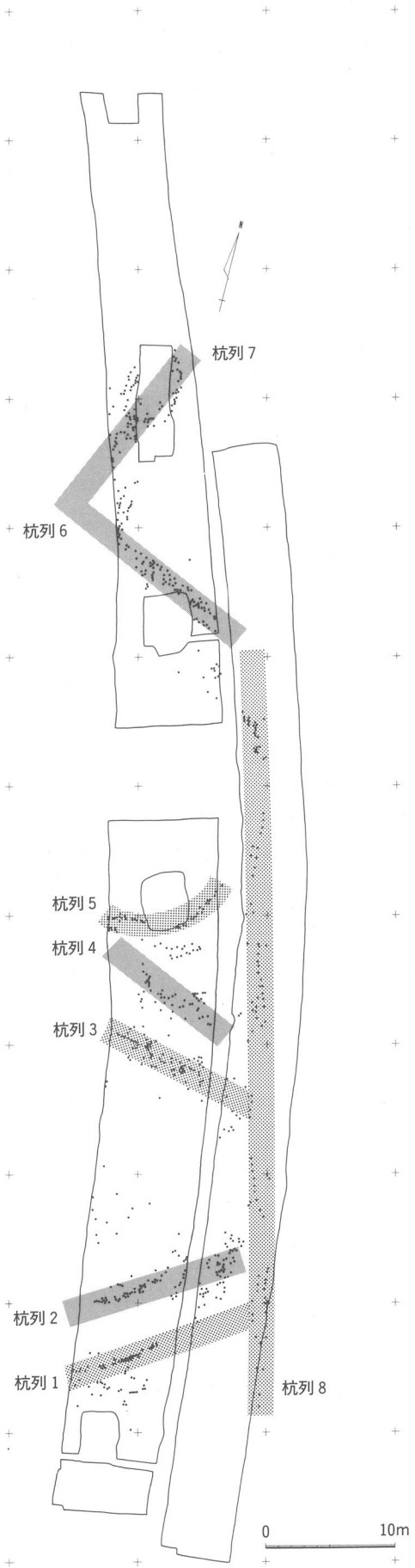
ＳＤ205（第20図　図版10－２）

Ｄ－１・２グリッドで検出した溝状遺構である。検出長8.3m、最大幅2.6m、深さ約60cmを計測する。底部は船底状の箇所と平坦な箇所とがあり、前者は緩やかな立上がりをしているのに対し、後者の北側部分での立上がりは非常に急である。覆土は砂混じりの暗褐色粘土が主体であるが、特に中位で粘性が強い。遺物は灰釉碗・山茶碗・小碗のほか、鉄鏃１点を出土している。出土遺物から11～12世紀代という時期幅を持つと考えられる。

杭列（第21図　図版９－２・10－１）

調査区により遺構面の数が異なるため、時期を確定することが困難であった。杭の並びの状況から８本として認定した。基本的には７層で検出したもの、９層で検出したものの２時期に分けることができそうである。７層の杭列は３・４区で検出した南北方向のものと１区での３本である。９層で検出したものは１・２区での各２本である。

９層の２区で検出した杭列７はＮ－24°－Ｅの方向を持ち、Ｄ－１グリッドで杭列６と交差している。また１区で検出した杭列４も杭列６とほぼ平行にのびている。杭列２・４・６とともに３・４区では７層を切る形で検出した旧河道よりも東では検出されていないが、杭列の残存状況から、さらに東側にのびて方形の区画が行われていたと考えられる。杭列７がＳＤ205を切って形成されていることから、９層で検出した遺構群が廃絶された後に水田として造営されたものと考えたい。さらにこれらは掘立柱建物跡の方向に類似していることから、集落形成時の区



第21図　杭列概念図

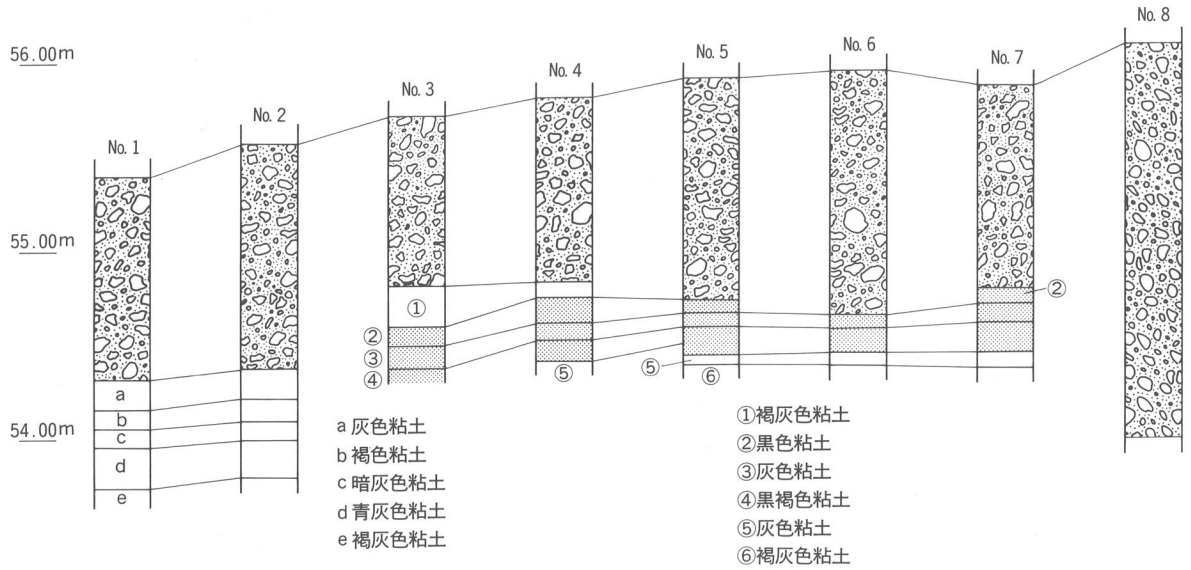
画が踏襲されていたと考えても良いのかもしれない。

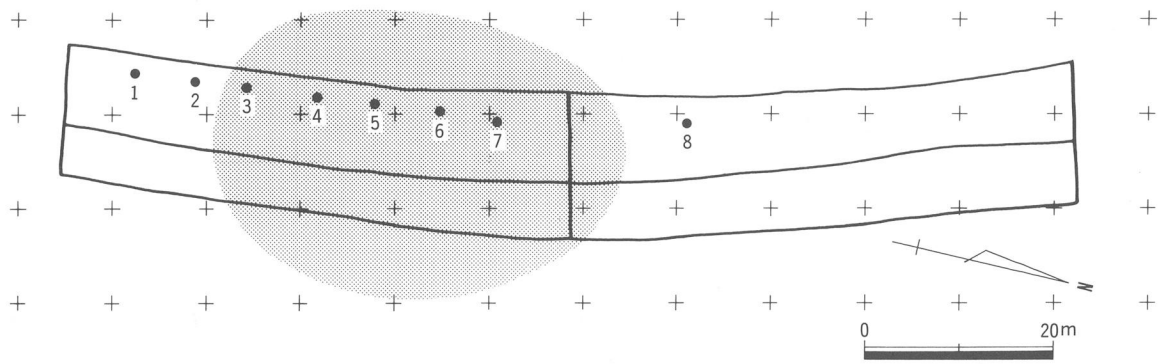
7層で検出した杭列については南北方向の杭列8を護岸用の杭として捉えることができる。杭列8を最東端として、西側に水田が広がっていたと考えられる。時期としては特定はできないが、SD302内にも杭が打たれていることから、後出すると考えられる。

第3節　下層の調査

文化課の試掘では、礫層下に堆積している粘土層に水田耕作土の可能性があることが報告されており、当初、下層も調査の対象とすることで計画を進めた。しかし、礫層の厚さが1～2mほどあり、崩落の危険性が非常に高いことから安全性を確保するのが困難であることや、試掘坑内での土層観察において遺構・遺物を確認することができなかったことから、全面的な調査は断念せざるを得なかった。そこで、プラント・オパール分析と土層断面の観察により、水田耕作土の広がりを把握することにした。

6月に採取したプラント・オパール分析の結果から、試掘坑№3の下層土からはイネのプラント・オパールがカウントされていない点、また土層断面の観察により自然堆積層であることを確認できた点か





第22図　下層土層柱状図及び水田範囲想定図

ら、調査対象を１区に絞った。１区の調査終了後に、調査区西端に重機で幅約１mのトレンチを入れ、約５～７mの間隔で、土層断面を作成した。なお、第22図に地点を示したが、この内、№7・8はそれぞれ、試掘坑№2・3に対応する。

調査の結果、№1・2と№3～7（8）の２つのまとまりを見いだすことができた。これらは第１節で記述した基本土層に対応関係を求めることができ、№1・2地点は試掘坑№1、№3～7地点は試掘坑№2に対応する。№1・2地点のa～cはこの地点のみの堆積であるが、dは19層、eは22層に対応する。いずれも自然堆積と考えられる。№3～7地点だが、②は13層、③は14層、④は15層、⑤は16層、⑥は17層にそれぞれ対応する。①は礫層の薄い№3・4地点でのみ認められた植物遺体を多く含む土で、明瞭な攪拌などはなかった。②・③・④に関しては、第１節で説明したように下層の土の混在や、攪拌された状況が認められた。またプラント・オパールの分析結果も試掘坑№2の13・14・15層で、それぞれ、4,000、9,200、9,400個/gをカウントしており、土層の観察結果と一致している。13層のカウント数が少ない点や攪拌が顕著ではない点から疑問視されるが、③、④は明らかに水田耕作土と考えて良く、２ないし３面の水田が推測される。

これら下層の土は礫層の堆積状況の度合いによって、その残存が左右されている。すなわち、№8（試掘坑№3）地点においては、礫層が２m以上も堆積しており、№7地点以南における自然堆積層が残っているのみであり、水田耕作土は完全に削平されてしまっていると考えられる。しかし、№1・2地点においては礫層下の土層のレベルからは水田耕作土が残存していても良いと考えられたが、全く異なる自然堆積層であった。このことから下層の水田は№3地点から北側に広がっていたことが予想されるが、№8地点での削平から、水田耕作土の広がりを第22図のように推定した。時期に関しては遺物の出土が全くなかったことから確定はできなかった。

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

石成遺跡から出土した土器は灰釉陶器・山茶碗などの陶器類のほか、土師器、青磁・白磁などの磁器類がある。その大半は灰釉陶器・山茶碗など地元と考えられる窯で焼かれた陶器類である。ここでは最も出土量の多い灰釉陶器・山茶碗の碗・小碗・小皿をまず取り上げ、以下、陶器類、土師器、磁器の順に記述を進めていきたい。

灰釉陶器

碗（1～35）　全体の形状が判るものは2点のみである。口縁部が外反し、体部は緩やかに内湾するが、2・3のようにその度合いが小さいものもあり、ばらつきが認められる。また体部も深いタイプのもの（1～3・8）とやや浅いタイプのもの（4～7）とがある。底部については様々なバラエティーが認められる。1つは三日月高台が潰れた形態のもので9～12が該当するが、K－90段階でみられるものに比べ、作りが粗雑化している。4・13～32は三角形高台として分類したが、大きく外に開くもの(22・23)、接合部と端部とが垂直になるもの(30～32)などもある。さらに細くやや高い高台を持つもの(1・33～35）がある。

小碗（98～117）　三角形の高台を持ち、体部中位で屈曲するが、屈曲の度合いは異なり緩い稜となるだけのものもある。口縁部は外反するもの（98～105)、直線的に伸びるもの（106～116）に分けられ、輪花が付されるもの（109・116）もある。口径値は（8.4）～(11.3）cm、器高2.5～3.7cm、底径（4.4）～(6.4）cmとばらつきがある。117は無高台の小碗である。

山茶碗

碗　碗については法量および形態の変化から大きく5つに分類した。

1類（36・37）　出土数が少なく全体の形状が判るのは36のみである。体部は緩やかに内湾し、口縁部が外反するものである。高台は高く作りが丁寧な三角形を呈している。

2類（38～46）　口縁部は外反せず、直線的に開く。体部は内湾するもの（38・39・46・47）と直線的なもの（40～45）に分けられ、いくぶん後者のほうが体部が深い傾向がある。口径（15.7）～16.8cm、器高4.7～6.1cm、底径5.8～8.2cmを計測する。高台にはスノコ痕が付いているが、39のみ籾殻痕が認められた。

図中48～62は底部だけのものである。様々な形態が認められるが概ね三角形を呈している。高台の形態だけでは1・2類に分離することはできなかったが、以下に述べる3類の高台とは明らかに異なるため、1・2類に含めることとした。

3類（63～83）　口径（12.7）～(16.2）cm、器高3.5～5.5cm、底径（5.0）～7.8cmという範囲に収まるが、口径は概ね14cm前後から15cmが中心となり、小型化している。体部も浅くなっているため、顕著ではないが内湾するもの（62～68・72・73）と直線的なもの（67～71）に分けられる。高台は1・2類に比べ著しく粗雑化し、小さな三角形のものが貼り付けられ、簡単なナデ調整によって接合されている程度のものになっており、そのほとんどにスノコ痕が認められる。

4類（84～95）　口径（12.5）～13.2cm、器高3.5～(4.0）cm、底径（5.2）～6.2cmを計測する。口径値

の減少と高台の粗雑化が顕著である。体部はわずかに内湾する程度で、体部の調整も粗い。高台はほとんどが簡単に貼り付けただけで潰れている。スノコ痕が多いが、籾殻痕が付くものもある。

5類（96・97）　無高台の碗であるが、器高が低く皿に近い形態を呈している。底部が大きく緩やかに立ち上がり、口縁部がごくわずかに外傾している。胎土が精選されており、ナデ調整も丁寧な感じである。

小碗　高台付きの山皿を小碗として取り上げた。

1類（118～129）　口径が大きく、体部が深いものである。体部の屈曲は灰釉陶器に比べ弱くなっており、弱い稜をなすもの（119・120・125・128・129）や内湾するだけのもの（122・123・126・127）もある。口縁部は外反せず体部の屈曲から直線的に立ち上がる。口径8.4～(11.3)cm、器高2.4～3.3cm、底径3.6～(6.0)cmを計測する。

2類（130～137）　口径がやや大きく、体部が浅いものとして取り上げた。体部の屈曲はほとんど認められず、緩やかに内湾するものがほとんどである。高台部はやや低く粗雑である。口径8.7～(9.6)cm、器高2.3～2.6cm、底径4.0～(5.4)cmである。

3類(138～142)　口径の小さいもので、やや体部が深い印象を与える。口径(7.2)～8.0cm、器高2.3～2.9cm、底径3.0～(4.6)cmを計測する。

小皿　法量・形態から3つに分類した。

1類（143～156）　口径値・器高値ともに大きく、成型が丁寧なものである。体部は直線的に開くもの（143・144・148）も一部に在るが、多くはその度合いは異なるものの、ほとんど内湾するものである。また底部も突出しており、高台を意識して作られている印象がある。口径7.2～(10.1)cm、器高2.0～2.8cm、底径3.2～(5.9)cmを計測する。

2類（157～190）　口径がやや小さくなり、器高も低くなる。口径値は概ね7.5～8.0cmを中心とし、器高も2.0cmを切るものとなる。体部はほとんどが内湾するもので粗雑な作りになっている。

3類（191～201）　2類に比べさらに作りが粗雑になったものである。器高は1.5cm前後となり、器形全体が潰れた印象を与える。口径は7.9～6.4cmとややばらつく。

山茶碗については上記のように地元及びその周辺のものと考えられ、基本的には金谷古窯跡群（旗指古窯）の製品と考えられるものがほとんどである。金谷古窯跡群の資料については従来公表されたものが少なかったが、近年、松井一明氏によって編年案が公表されている(松井　1994)。氏は県内各地の山茶碗窯をⅠ～Ⅲ期に分類し、それぞれの併行関係を明らかにされている。金谷古窯跡群についてはⅡ期を（新）・（古）の2段階に、またⅢ期を1～3の小期で区切っている。ここでは石成遺跡から出土した山茶碗について、事実誤認はあると思われるが、松井編年に基づいて考えてみたい。

碗1類としたものは口縁部の外反など、あざみ沢窯出土のものに形態が類似していると考え、松井編年のⅠ期に当てた。2類については深い体部の湾曲を持つものをすやん沢窯の製品に類型を求め、松井編年のⅡ期に該当すると考えられるが、口縁部が大きく外反するものはなく、Ⅱ期（新）とするものかもしれない。ただし、2類の一部（43など）についてはⅢ期－1に下る可能性が高い。3類については口径値の縮小と高台の作りから、Ⅲ期－2に当てはめられよう。4類はさらに口径が縮小し、高台の作りも雑になっていることから、ほろん沢B地点として公表されたものに類似していると考え、Ⅲ期－3に該当させた。5類は胎土・焼成ともに4類と異なっており、他産地のものかもしれない。類例を検討したい。

次に小碗について考えたいが、小碗1類と2類の間には器高の低下とそれに伴う形態の変化を認めることができる。また3類とした口径8cm以下の明らかに小さいタイプもあり、口径の大小を時間的な形態変化と考えるべきか、同時期におけるバラエティーの1つとして捉えるべきか判断できなかった。た

だし、口径値の変化（縮小）を編年の基準とするならば、明らかにそこで、１時期下るものとして取り扱うべきであろう。ここでは一応１・２類ともにＩ期としておくが、碗に比して出土量が多いことを考えれば、１類と２類の間には時期差が存在しており、２類としたものはII期にまで下る可能性もあると考えておきたい。さらに３類としたものも、同様に考えることが可能であろう。小皿については３類に分類したが、１類としたものをさらに２分し、144・145などを古い段階として考え、それらをII期に、残りのものをIII期－１とすることができよう。２類は法量および形態からIII期－２、３類はIII期－３にそれぞれ該当させておきたい。

以上の検討から、いささか便宜的ではあるが、碗１類・小碗１・２類、碗２類・小碗（２・３類）・小皿１類、碗２類の一部・小皿１類（一部）、碗３類・小皿１類、碗４類・小皿３類の組み合わせとし、それぞれを12世紀前半、12世紀後半、13世紀前半、13世紀中葉、13世紀後半に比定しておきたい。

陶器類（202～239）

灰釉陶器（碗・小碗）・山茶碗以外の陶器類を取り上げたが、灰釉陶器から近世の施釉陶器までを含んでいる。

205は旗指産と考えられる長頸壺（広口壺）である。202～204・206～217・233～238は中世の陶器類である。202～204は鉢類で、202は片口鉢、203・204は大平鉢としておいた。206～208は小型の壺類であるが、このうち、206は肩が強く張るもので、口縁部を一部欠損しているが、片口状をなしている。209は甕の口縁部である。渥美産のものと考えられる。211～213は瀬戸産の卸皿である。211・212は玉縁状の口縁を有している。213は口端部を強くナデつけており、体部は下半で屈曲しており、時期的に211・212に後出するものである。214は瓶子の底部で、いわゆる締腰型とされるものであろう。215は肩部の破片がないため、形態を復元することはできなかったが、四耳壺の可能性が高いと考えられる。216・217は瓶子である。以上、211～217はすべて古瀬戸前期に含まれるものであろう。233～238は常滑産の甕である。中野晴久氏の編年（中野　1994）に当てはめれば、233・234は6a型式、236は6b型式、235を８型式、237を９型式とすることができようか。238・239はいずれも常滑産と考えられる平鉢である。

218～232は表土除去中もしくは排水溝掘削時に出土したもので、中世末から近世にかけての陶器類である。218～221は天目茶碗で、218は瀬戸美濃産、その他は志戸呂産である。222～228・232はすべて志戸呂産のもので、16世紀末から18世紀にかけての製品である。小皿には鉄釉および灰釉が用いられている。229は瀬戸・美濃産の擂鉢、230は古瀬戸後期の小皿、231は三ツ沢窯の平碗である。

土師器（240～251）

土師器の出土量は極めて少ない。240は試掘坑№２を再掘削した際に礫層中（12層）から出土したもので、古墳時代中期のものである。241の碗は灰釉陶器を模したと考えられるもので、口縁部は大きく外反している。242～246は皿類である。248～252は伊勢型鍋と呼ばれる器壁の薄い鍋であり、新田洋氏の編年（新田　1985）のうち５類に当てはまるものであろう。

瓦　器（247）

西日本で広く用いられた日常雑器であるが、静岡県内での出土例は極めて少ない。口径9.6cmの小型のものである。底部を欠いているが、体部は下半で屈曲し、直線的に立ち上がり、口縁部を内湾気味に収めている。体部外面のヘラミガキは省略され、口縁部にわずかに認められるだけである。内面のヘラミガキについてもやや粗雑な印象を受ける。外面にはヘラ工具による縦方向の押さえが認められる。

輸入陶磁器（253～273）

青磁・白磁・青白磁が出土している。森田勉・横田賢次郎氏による編年（森田・横田　1978）に基づいて報告したい。青磁は253～262で椀がほとんどを占めるが、254は杯、257は皿の可能性がある。253～255は体部に蓮弁文を持つもので、基本的には蓮弁に鎬を有するものである。椀Ⅰ－5類に含めることができようか。261・262は底部破片で、同類のものと考えられるが、内底に草花文が施されている。257は外面に櫛目を持ち、内面には体部上位に沈線が入る。青磁に関しては龍泉窯の製品が多いと考えられるが、257は同安窯の可能性が高い。白磁は263～273である。273の皿を除いてはすべて椀である。263～266は玉縁状口縁を持つものである。このうち265は器壁が薄く、玉縁も小さいことから、他のものに比べ先行するものと考えられ、265をⅢ類、263・265・266をⅣ類としておきたい。271も同様のタイプと考えられるが、Ⅳ－1類に含まれようか。267は口縁部を引き出したもの、268は体部が直線的に立ち上がるもので、これらはⅤ類としておきたい。269は口禿のもので、Ⅸ類に当たるであろう。270は口縁部を外方に引き出し、内面には圏線が認められる。Ⅵ類に含まれるものと考える。273は皿で、底部は平坦をなし、体部は直線的に立ち上がる。Ⅸ類に比定できるものである。青白磁は274の合子の蓋1点のみである。

墨書土器・線刻土器（275～291）

墨書土器はすべて山茶碗・小皿の底部に施されたものである。破片資料が多いことや墨痕が薄いことから判読し難いものが多い。釈文については静岡大学湯之上隆先生、県教委文化課佐藤正知氏に御教示願った。碗形態のものは275～287で、先述した山茶碗の分類の2類～4類に当てはまるが、3類が最も多い。275は内面を転用硯として用いている。小皿については全形が判る288・289は3類とすることができよう。291は内面に稚拙であるが、細い線と半截した棒状の工具による刺突で草木を表現しており、底部にも刺突が認められる。

第2節　木製品

今回の調査で木製遺物（以下木製品とする）として取り上げ・登録を行ったものの総点数は約760点である。7層・9層で検出した遺構および包含層からの出土で、その多くは杭ないしは木片である。ここでは杭を除き、用途が明確なもの、推定できるもの、遺構からの出土で加工痕が顕著なもののみを取り上げた。基本的には容器・食事具、建築材がその主なものである。なお、細かな分類については、『木器集成図録　近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所　1984）、『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994）を参考にした。用途・機能の不明なものについては、点数も少なく形態分類もしにくいため、その形状を観察するにとどめた。

容器

容器関係の木製品としては、曲物・挽物の総計16点が出土している。

曲物（1～5）

曲物とは薄板を円筒形に曲げて、両端の重ね合わせ部分を樺皮紐で綴じ合わせて側板とし、これに蓋板ないしは底板を結合した容器の総称である。平面形では、円形・楕円形・長方形などに分類されるが、出土した物は円形と長方形である。側板は薄く破損しやすいが、5点中2点は側板を備えている。

身と蓋の分類については、制作技法から円板を側板の内側にはめこみ、側板の上から木釘を打ち込んで結合した釘結合曲物を身とし、円板のうえにひとまわり小さい側板をあて、樺皮で結合した樺皮結合曲物を蓋とした。

長方形曲物（1・3）

長方形の底板に低い側板を結合したもので、いわゆる折敷とよばれるものである。1は一部欠損しているものの、残存状態は良い。底板の厚さは5㎜、側板は4㎜を測り、ともに柾目板を使用している。側板の重ね合わせ部分は、2カ所樺皮で綴じ合わされている。底板と側板も樺皮で綴じ合わされている。3も長方形曲物と考えているが、角がかなり大きく斜めに切り落とされているため一般的な形と異なっている。約1/3が残存しており、厚さ9㎜の柾目板で、綴じ孔と思われる小孔が2つ穿たれている。

円形曲物（2・4・5）

2は蓋で側板が内側に折れ曲がっているが、側板、底板ともにそろっている。樺皮紐と木釘の両方で結合する樺皮結合A（奈文研　1984）にあたる。4カ所に木釘の孔が、樺皮も1カ所残存しており底板と側板を結合させている。側板の内側にはケビキが見られる。4・5は底板であるが4には木釘の跡と思われる孔が側面に2カ所、5には刃物痕と思われる傷が認められる。

挽　物（6～16）

木材を割っておおよその形を整え、轆轤によって成形した容器で、椀と皿に分類される。出土したものは、すべて漆が塗布されており、漆椀、漆皿とした。漆椀と考えられるものは破片も含めて8点、漆皿は3点、総計11点の漆器が出土している。6～8は漆碗である。6は内外に黒漆が塗布されているが、剝離が激しく、ほとんど木地が見えている状態である。土圧のためか押しつぶされたように変形している。7も内外に黒漆が塗布されているがかなり剝離しており、外側にはロクロ目が見える。8は器の内側にはわずかに、外側には底部を中心に黒漆が塗布されているが、全体に色あせている。外側には、ロクロ目が見える。

9～11は漆皿である。9は口縁部を一部欠損しているが、完全に復元できる。全体に黒漆が塗布されており内側の底部分には赤色漆で一筆書きによる鳥と考えられる模様が描かれている。外側には、黒漆の上からロクロ目がわずかに認められる。10も9と同じＳＦ105より出土している。器の内外に黒漆が塗布されている。中心部分は欠損しており、残存部分にも細かなヒビが入っている。内側の底部には、わずかに赤色漆の模様の跡が窺える。外側には、漆の上からロクロ目が認められる。11は器の内外に黒漆の地に赤色漆で鶴と思われる鳥が描かれている。鎌倉期あたりから、スタンプの使用がみられること、同じ様な絵柄が並んでいることから、スタンプを使用した可能性が高い。

12～16は漆椀で復元ができなかったものである。12は全体に黒漆を塗布した鉢状の器と思われる。小片が14点あったが、この3点以外はうまく接合できない。内側に、菊の花と思われる模様が、赤色漆で描かれている。13・14には、内外に黒漆が塗布され、外側に赤色漆で模様が描かれている。15・16は、ともにＳＰ233から出土したものである。復元はできなかったが、内外に黒漆が塗布され厚さも同じであるため1個体になる可能性をもつ。

食事具

箸状木製品（17～22）

食事具としては、箸のみを6点出土している。箸の属性として「神の呪を達成する」祭器としての役割があるという見方が提起されており、祭祀具として報告されている例も多い。三島大社では箸を使った神事が現在でも行われている。また近くを流れる御殿川の河川改修に伴う発掘調査では大量の箸が出土していることからも祭祀具としての性格を有することも事実である（静岡県埋蔵文化財調査研究所1993）。しかし、石成遺跡においてはまとまった出土ではないことや、遺跡の性格からも食事具としての箸と考えられるが、欠損品が多く、形状から箸と断定しがたいものもあるため、ここでは箸状木製品として報告する。17・18は完形品である。18は他のものに比べ断面が偏平で緩やかに反っている。19は先

端のみ欠損しているが約20cm程になると思われる。1カ所折損している。20は上部に焼け跡がみられる。21・22は、約1/2が残存していると思われる。22は残存部の中央で折れ曲がっている。

用途不明品（23～25）

他の部材と組合わさることなく、単独の形態を整えているものだが、いまのところその用途を決定しえないものである。23は先端を斜めに削り、逆の端は切り込みを入れ首のような部分を作り出している板状の製品である。祭祀具とも考えられるが、形状が明確に分類できないため、用途不明品とした。24は両端に加工痕が見られる棒状の製品で、側面の一部が炭化している。単独で使われたとは考えにくいため、何らかの部材か二次加工を受け転用された可能性がある。25は一方の端に造り出し部分をもつ板状の製品である。もう一端は欠損している。

建築材（26～41）

建築材は、すべて柱根であるがここでは16点を報告する。今回の調査で、堀立柱建物跡が2棟検出されているが、その遺構に伴う柱根は検出されなかった。出土した柱根は、その木取りの仕方、底部の加工の方法から3種類に分類した。26～35は芯持ちの丸太材で底部が平らに加工されているもの。36・37・39は芯持ちの丸太材で底部をとがらせるように2方向を加工しているものである。38・40・41は芯持ち丸太材以外のもので、38は角材、40・41は断面形が楔形を呈するみかん割材である。使用された材は、クリ4点（26・28・31・37）、ツブラジイ3点（30・38・39）、スダジイ3点（33・36・40）、タブノキ（27）、クスノキ（29）、シオジ（32）、カツラ（34）、サカキ（35）、ヒノキ（41）、各1点である。

第3節　石製品

1　砥石（第35図1～14）

石成遺跡で出土した砥石は総数14点である。基本的には運搬・携帯が可能なものである。形態・法量から①柱状ないしは板状の小型品、②柱状の大型品の2種に大別した。

①に含まれるのは1～12である。使用による欠損・摩耗により、原型をとどめていないものがほとんどであるが、1～7までを板状、8～12までを柱状としてさらに分類した。1は薄い板状のもので、下半を欠損している。表面は良く使い込まれており、粗い刃痕も認められる。裏面は砥面の状況から使用頻度は低いと考えられ、途中から剝離している。4面使用である。2・3も薄い板状の製品で2面の使用である。下半を欠損しており、使用により中央に向かい表裏両面ともに薄くなっている。非常にきめが細かく、おそらく仕上げ用として用いられたものであろう。3は裏面の使用頻度が低い。4～6はさらに小型のものである。4は2面使用と思われるが、砥面の荒れがひどく使用痕跡は不明瞭である。土による汚染が著しい。5～7は1面使用のものだが、その内5・6は側面も欠損しており、形態は不明で、砥面がやや荒れている。6にはやや深い刃痕が残る。7は一部欠損しているが、使用した範囲が狭いものである。8は2面使用のもので、表面と右側面を使用している。上下ともに欠損しており、下端には棒状の製品を回転させて研磨したと考えられる穿孔が認められる。また上位先端近くは鈍いV字状の刻みが施されている。9は4面使用の製品で、上下の端部を欠損している。表面と側面の使用が特に著しく、中央に向かってくびれている。裏面は使用頻度が低く、粗い刃痕が認められる。10は3面使用と考えられるが、表裏面の使用が顕著であるのに対し、上端は十分に使用されないまま廃棄されたようである。11は柱状として分類したが、不整形のため本来の形態は不明である。3面使用であるが、表面・側面は使い込みが顕著であり、内湾している。表面と裏面には刃痕が認められるが、特に裏面の粗い刃

痕は顕著である。12は柱状を呈すと考えられるやや大型の製品である。６つの面を作り出し、全ての面を使用している。いずれも使い込みが著しく、中央に向かい大きくくびれて欠損している。上端部と左側面に刃痕が顕著に認められる。

②に属するのは13・14の２点であるが、いずれも表面１面のみを砥面として使用していることから置き砥石として使用されたと考えられる。13は使用範囲が狭く、表面の約半分のみである。裏面の凹凸が大きくやや安定性に欠けている。14は下端を欠損している。表面は平滑で、良く使い込まれており、細かな擦痕が認められる。

2　石鍋（第36図－１）

２区８層Ｆ－２グリッドから出土した滑石製の石鍋である。口径22.8cm、器高10.2cm、底径11.0cm、鍔径23.2cmを計測する。体部は平坦な底部から斜めに僅かに内傾しながら直線的に立上がり、口縁部直下には断面不正台形の鍔が巡らされる。体部下半には幅約４㎜ほどのノミ痕が３段にわたり明瞭に認められ、上半には細かい条線状の加工痕が付されている。内面は横方向に丁寧な研磨が施されており、内外面の調整の相違が窺われる。外面には煤が厚く付着している。木戸雅寿氏による分類III－ｃ類に該当すると考えられる（木戸　1993）。管見によれば、静岡県内では石成遺跡出土のものを含めて、浅羽町十二所遺跡（浅羽町教育委員会山本義孝氏のご厚意により実見）、富士川町浅間林遺跡（富士川町教育委員会　1991）の３例を数えるのみである。

3　石硯（第36図－２）

平面形態が台形を呈すると考えられる硯尻の破片だが、残存部分が少ないため、長方形の可能性もある。裏面は二次的に割ったと考えられ、側面の傾斜については判断できなかった。内面は入角形をなし、波文が線刻されている。水野和雄氏の分類（水野　1985）によるIIAc類ないしはIIBc類に相当するものと考えておきたい。石材は黒色粘板岩である。

4　碁石（第36図－３）

１区７層Ｈ－２グリッドから出土した黒色粘板岩製のものである。直径1.95cm、厚さ0.4cm、重さ６ｇを計測する。側面は垂直にノミで削り出した後、丁寧に磨かれており、擦痕が顕著に認められる。表裏面の端部は丁寧に面取りされており、指の当たりを良くしている。

5　置物（第36図－４）

２区８層Ｄ－２グリッドから出土した球状のもので、鉄岩石製である。底部に径1.6cm程の鈍い窪みが付けられている。全面平滑に磨かれており、観賞用として、置物に用いられたと考えられる。レジュームと呼ばれ、観賞用として古くから珍重されているとの御教示を静岡大学名誉教授伊藤通玄先生より受けた。

第４節　金属製品・土製品

1　銭貨（第37図）

石成遺跡からは、15枚の銭貨が出土した。出土位置は遺構からではなく、すべて包含層からである。１区Ｉ－１グリッド６層から２枚（14･15）が土器に近接して出土したが、これも遺構は認められない。出土銭はすべて渡来銭であり、年代は北宋時代が多い。銭種別では、開元通寶１枚、祥符通寶１枚、景

祐元寶１枚、皇宋通寶１枚、嘉祐元寶１枚、熙寧元寶５枚、元豊通寶１枚、元祐通寶３枚、元符通寶１枚の９種15枚であり、銭種は他遺跡の出土例と類似する。入田整三氏は、昭和５年に国内から出土した渡来銭を集計し、特に多い５銭種として、①元豊通寶②皇宋通寶③熙寧元寶④開元通寶⑤元祐通寶をあげている(入田1930)。また34万枚以上の備蓄銭が出土した函館志海苔館で多く出土した銭種も①皇宋通寶②元豊通寶③熙寧元寶④元祐通寶⑤開元通寶の順であり同様の傾向を示している（函館博物館1970)。足立順司氏は遠江から出土した埋蔵銭を分析しているが(足立1990)、ここでも皇宋通寶、元豊通寶、熙寧元寶、元祐通寶、開元通寶は順位の上下はあるものの、上位を占める。また、石成遺跡で出土した他の銭種も多数出土が報告されている。このことから、石成遺跡出土の銭貨は、中世日本で普遍的に流通していた銭種といえよう。

国内から多数出土する北宋銭は、北宋での鋳銭量が国内の流通量に反映していたとされる。また唐代の開元通寶を１枚含むが、国内の中世遺跡から多数出土しており、鋳銭量が多く、私鋳銭を含めて国内で長期間にわたり相当数流通した銭貨と考えられている（日比野1975)。国内の政権による銅銭鋳造は、いわゆる皇朝十二銭の後は天正15年(1587)の天正通宝までの間断絶するとされており、大陸から大量に貨幣を輸入して国内流通させていた。

銭貨は長期間に亘り広く使用されたので、出土貨幣の年代はその鋳造された上限を示すにすぎず、埋没した年代を示すものではない。しかし、ある目的をもって大量に地中に埋蔵された備蓄銭では、宋代の貨幣が大半を占めていても、宋代以降の貨幣も含む例があり、埋没当時に流通していた貨幣を反映すると考えられる。宋代以降の貨幣が石成遺跡から出土していないことは、遺跡の廃絶時期を推定する上で示唆的であるとも言えよう。

銭貨を選別する上で重要な私鋳銭（鐚銭）について、公鋳銭と私鋳銭との区別は、書体、鋳崩れ、鋳写しによる矮小化、偏平化等の特徴が指摘されているが、極めて判断が難しく断定できないものが多い。

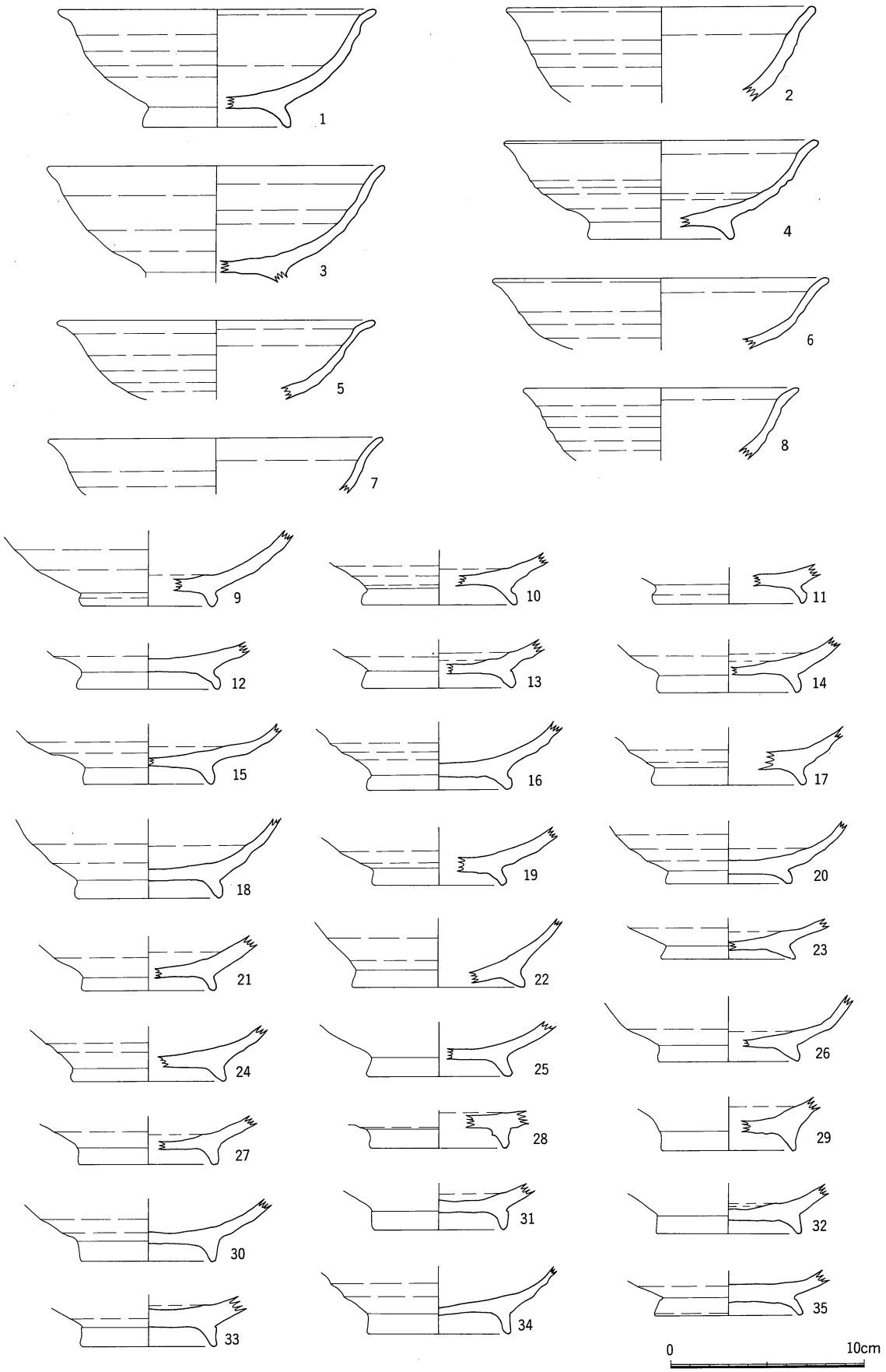
次にこれら銭貨の性格であるが、遺構に伴う出土ではないため明らかではない。１区Ｉ－１グリッド６層からまとまって出土した２枚（14・15）については、自然に埋没したというよりは、何等かの祭祀に伴い使用されたと考えられるが内容は不明である。古代から銭貨は、貨幣本来の機能だけでなく呪物としても使用されており、水霊祭祀、地鎮、葬送に伴う六道銭などが可能性として考えられる。

2　鉄鏃（第36図－５）

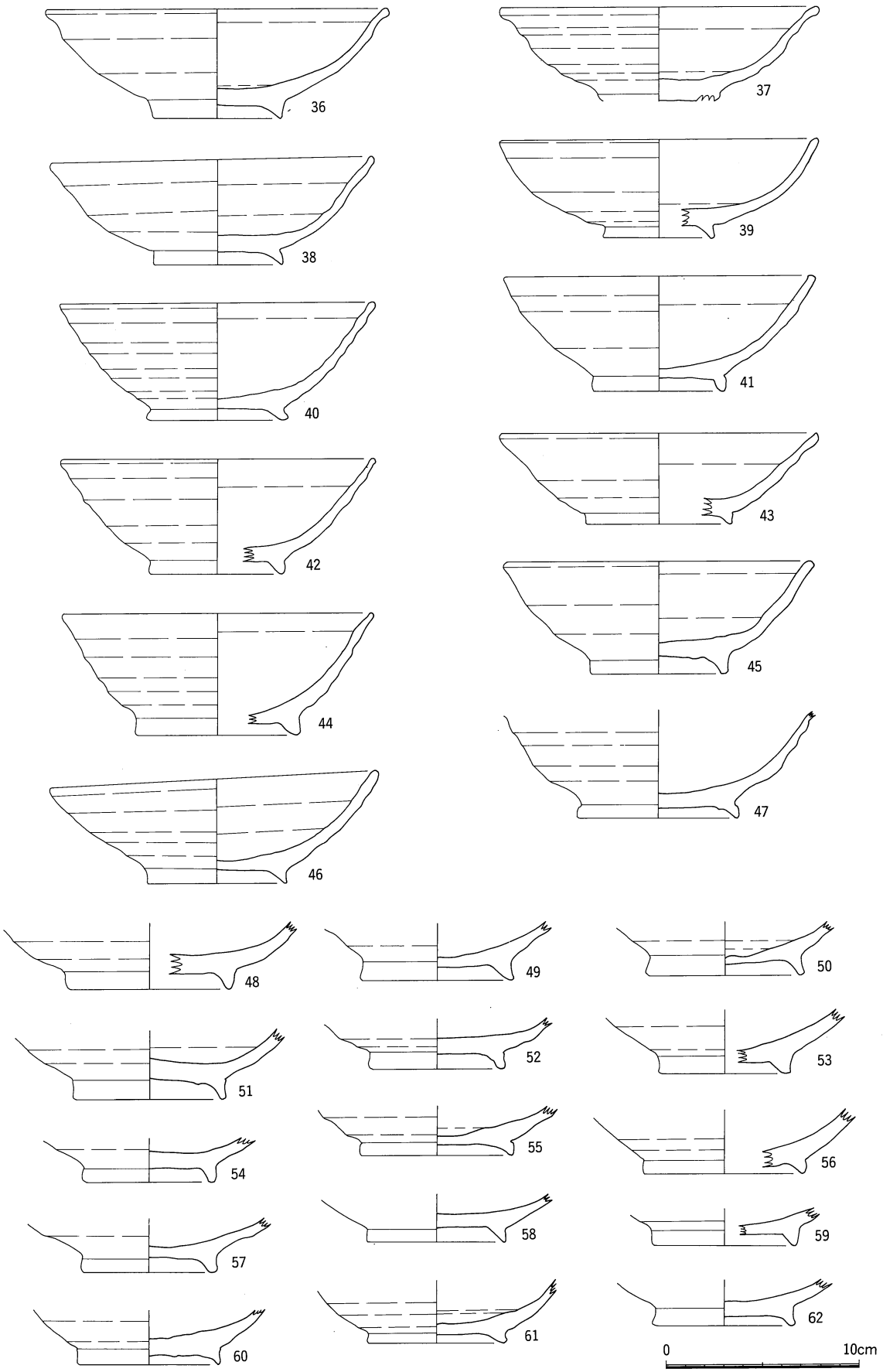
ＳＤ205から出土したもので、再大長12.5cm、最大幅1.6cm、最大厚0.8cmを計測する。先端部を欠損し、茎でわずかに曲がっている。いわゆる短頸式のうちの長三角形式で、腸抉のないタイプである。多摩川流域の鉄鏃を基にした飯塚武司氏の編年（飯塚　1991）によれば11世紀以降に発達するものである。

3　土製品（第38図）

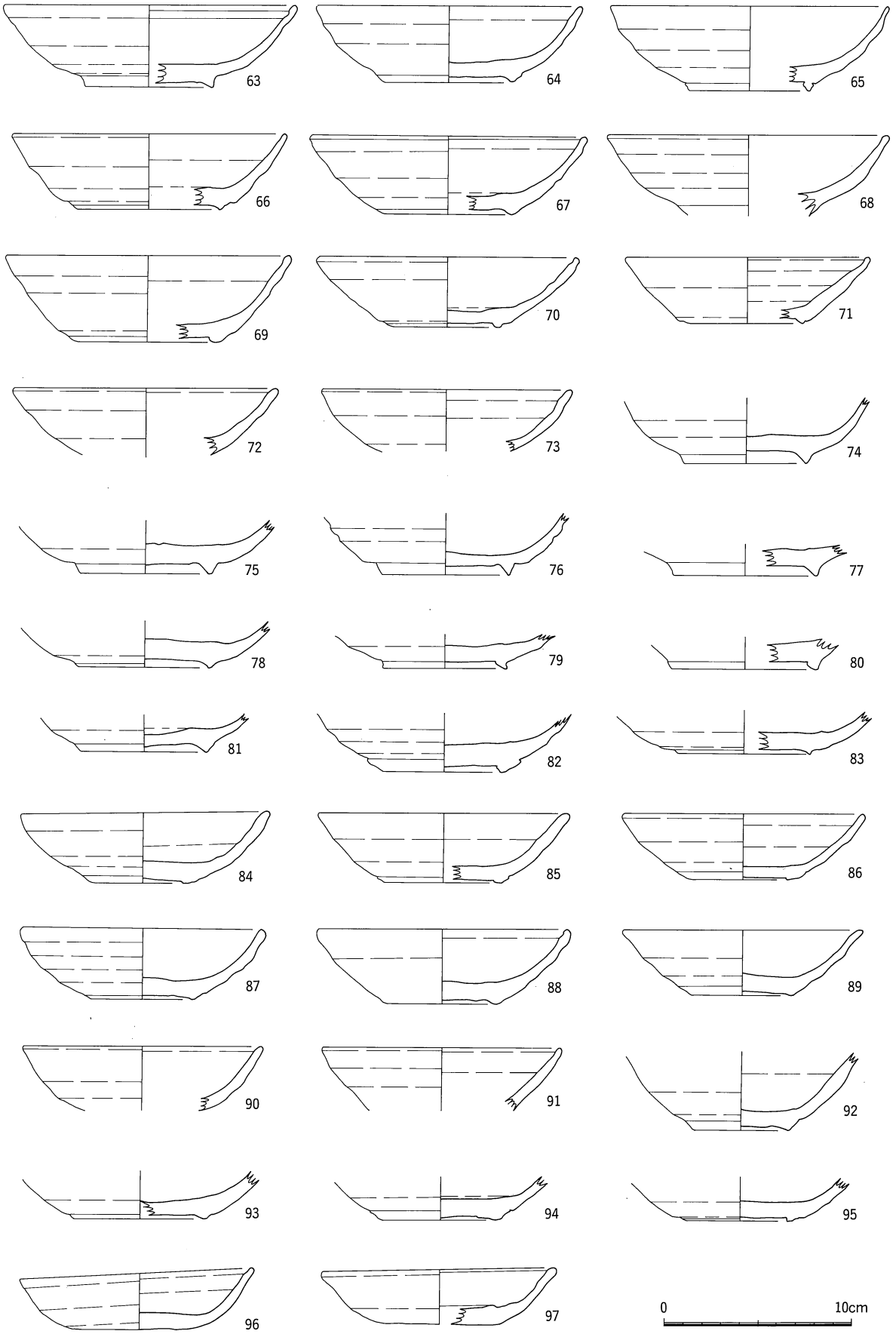
石成遺跡から出土した土製品は陶錘・土錘のみである。１～４が陶錘、５が土錘である。いずれも小型の紡錘形を呈した管状のものである。１は欠損しているが、他のものに比してやや大きく胴部の張が大きい。４はやや寸胴で、非常に堅く焼きしまっている。



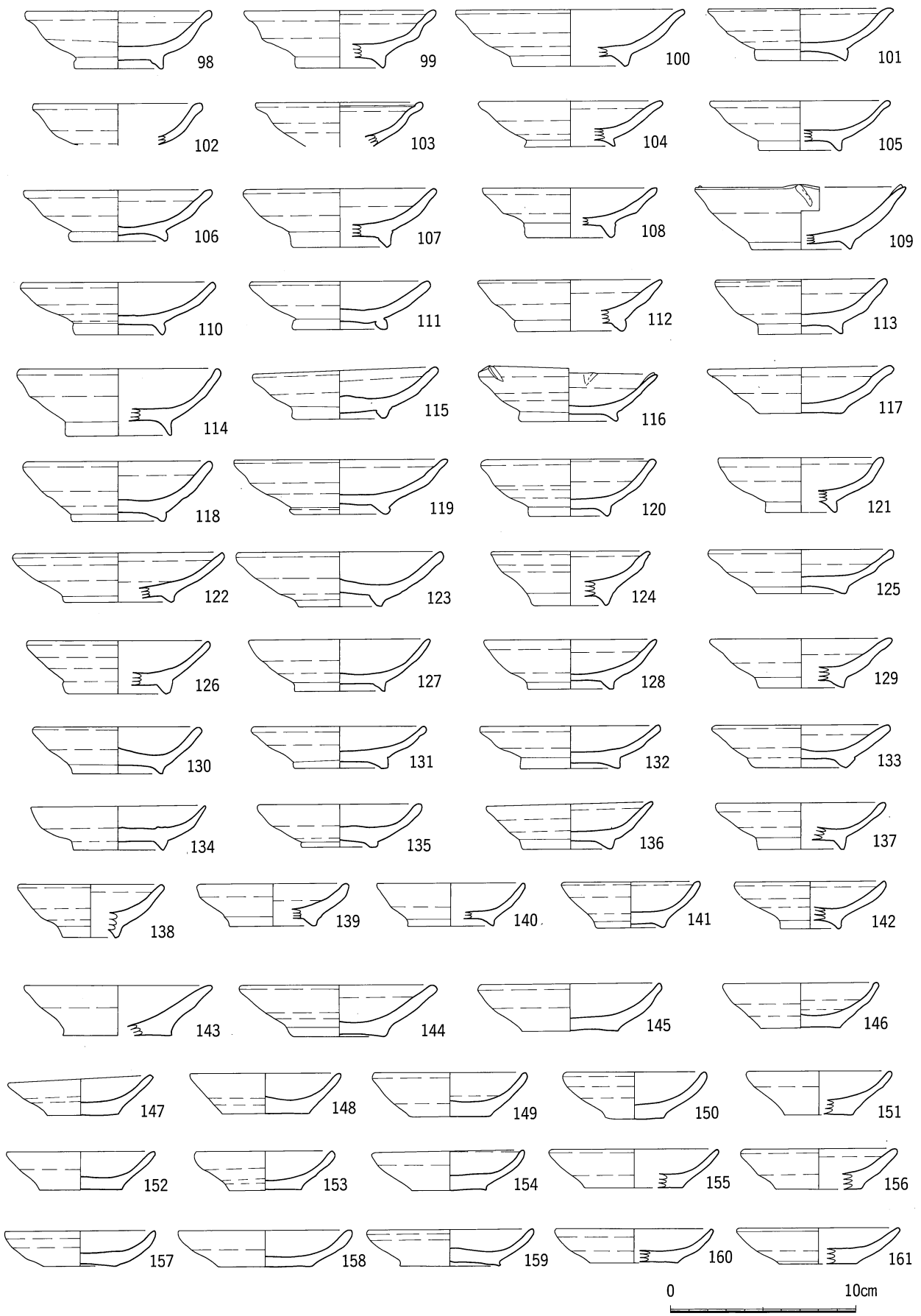
第23図　出土土器実測図(1)



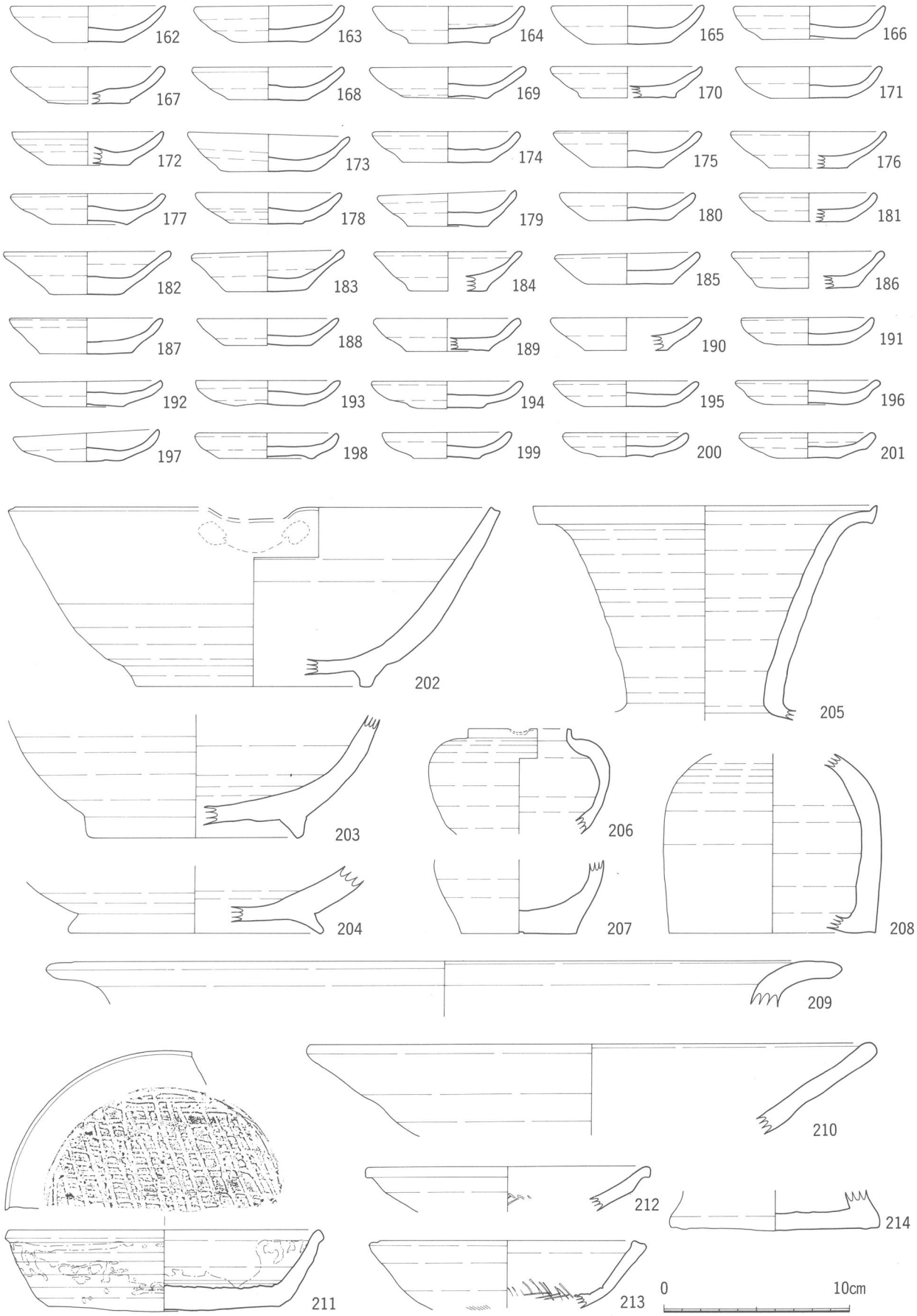
第24図　出土土器実測図(2)



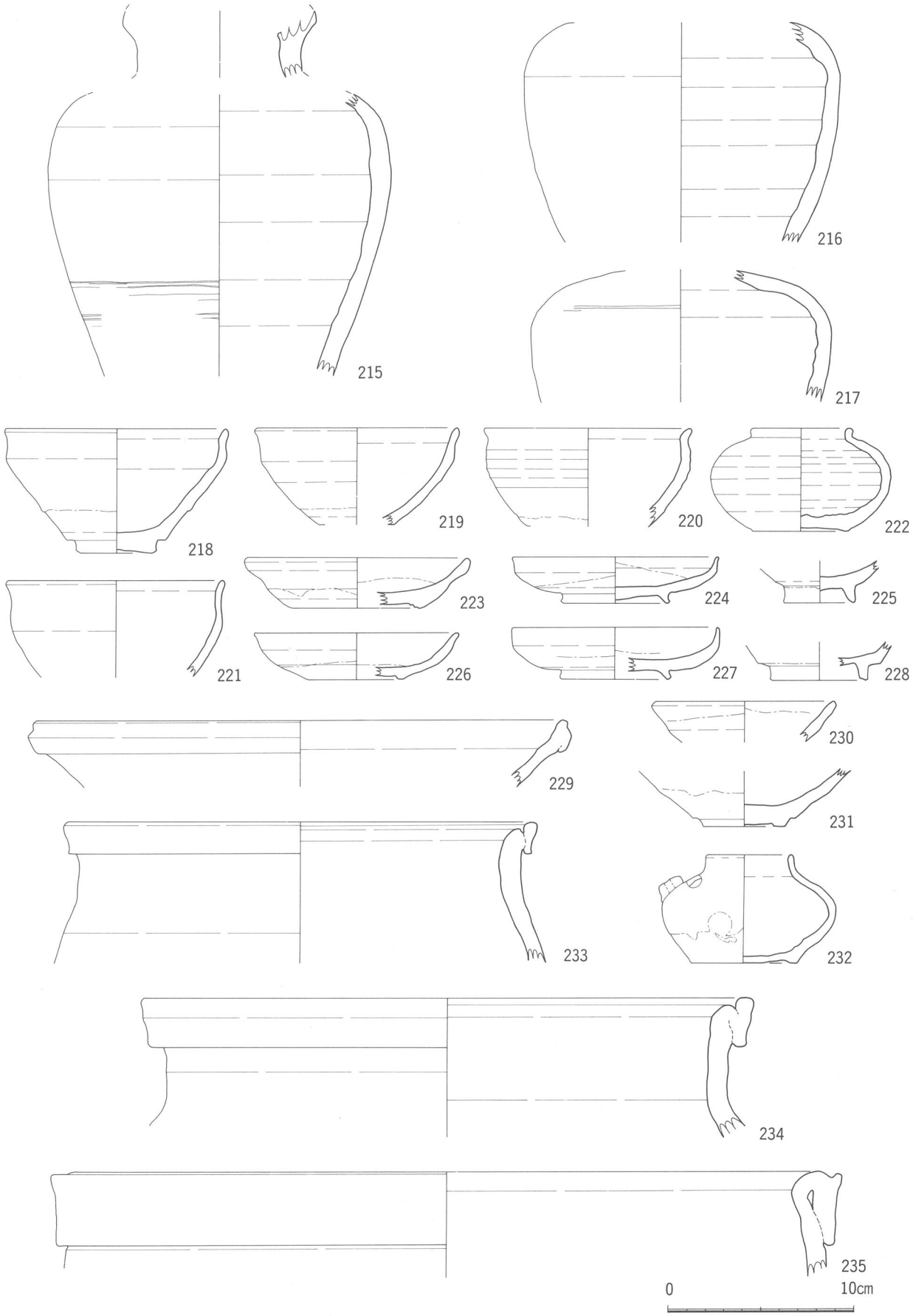
第25図　出土土器実測図(3)



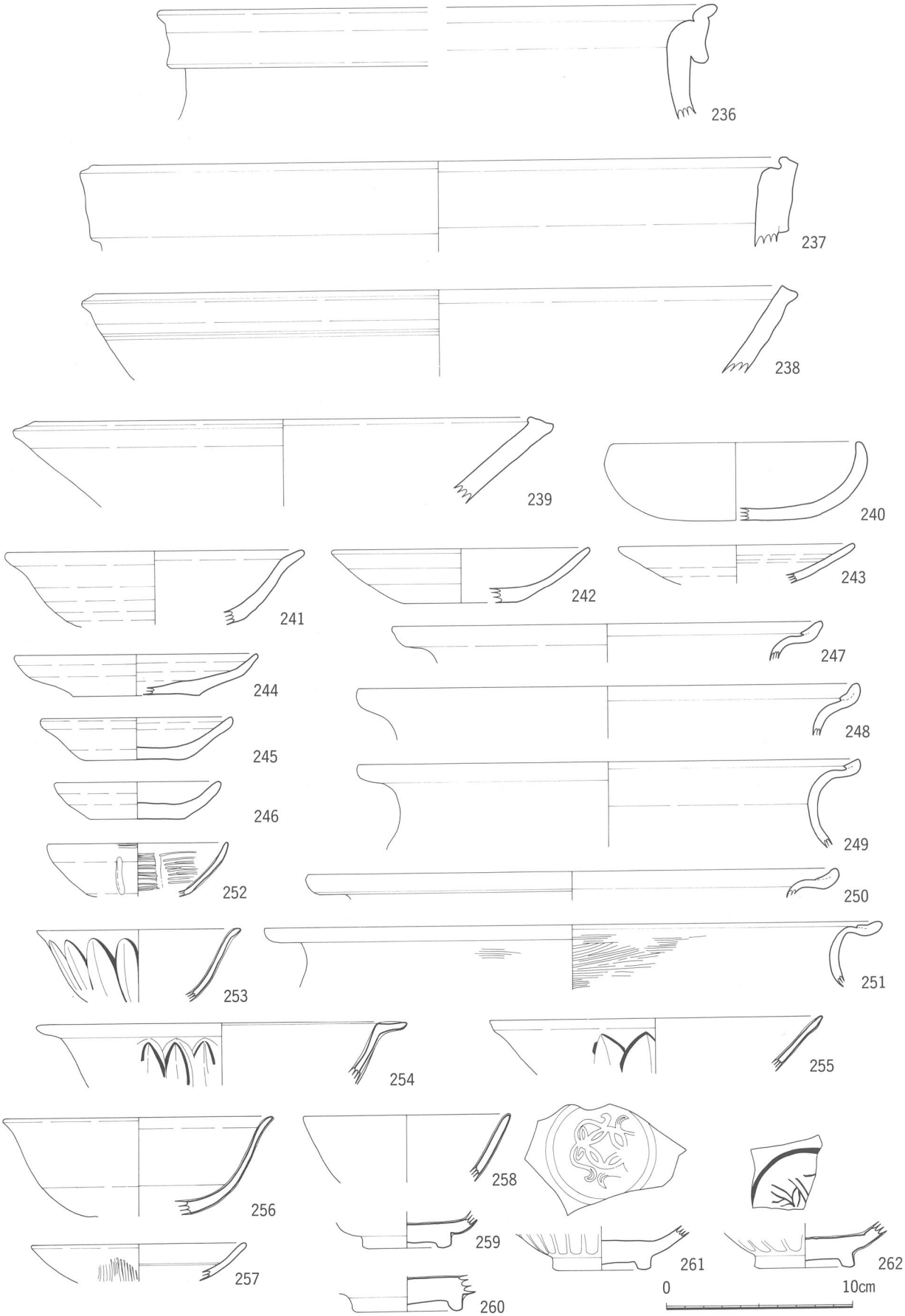
第26図　出土土器実測図(4)



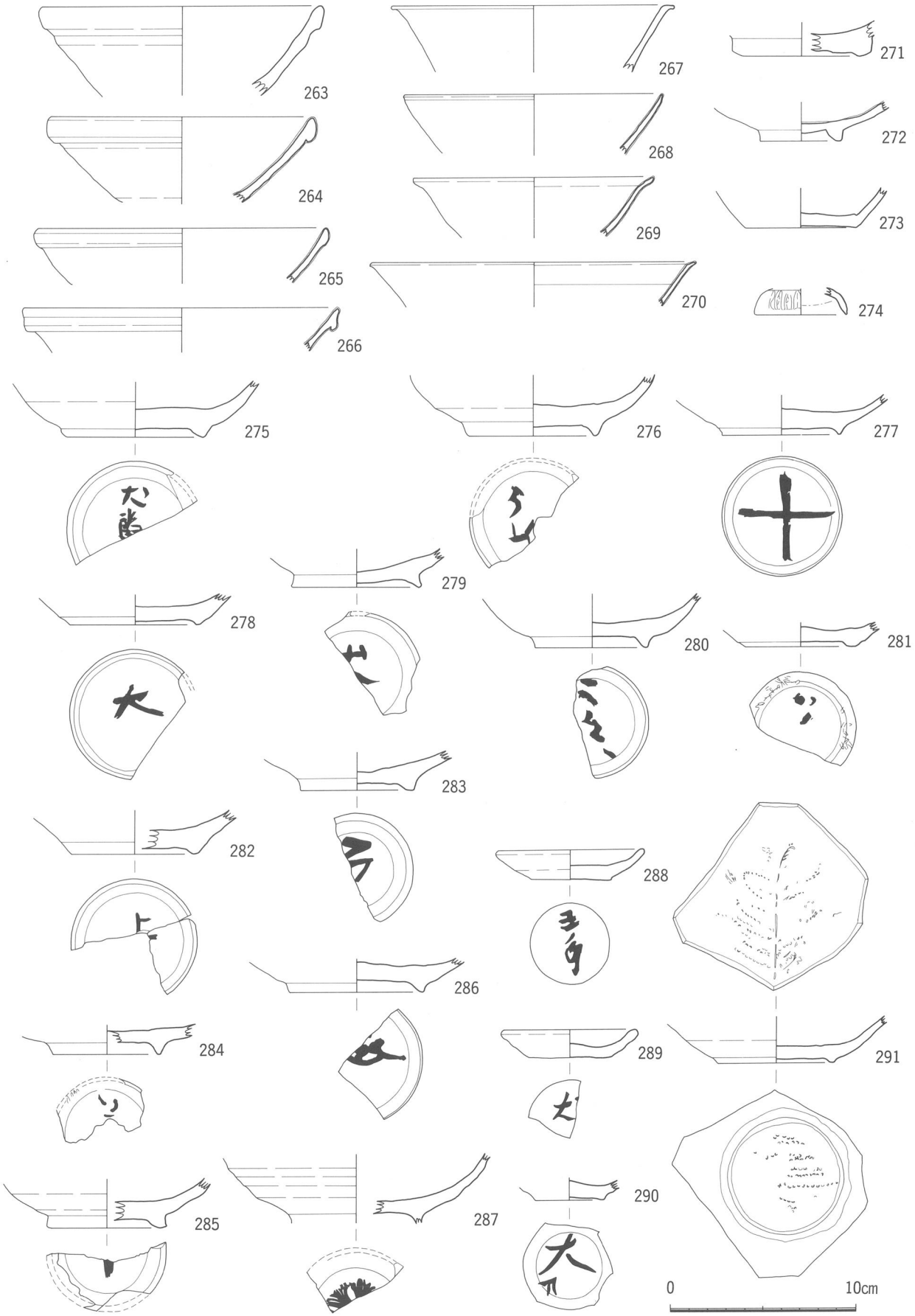
第27図　出土土器実測図(5)



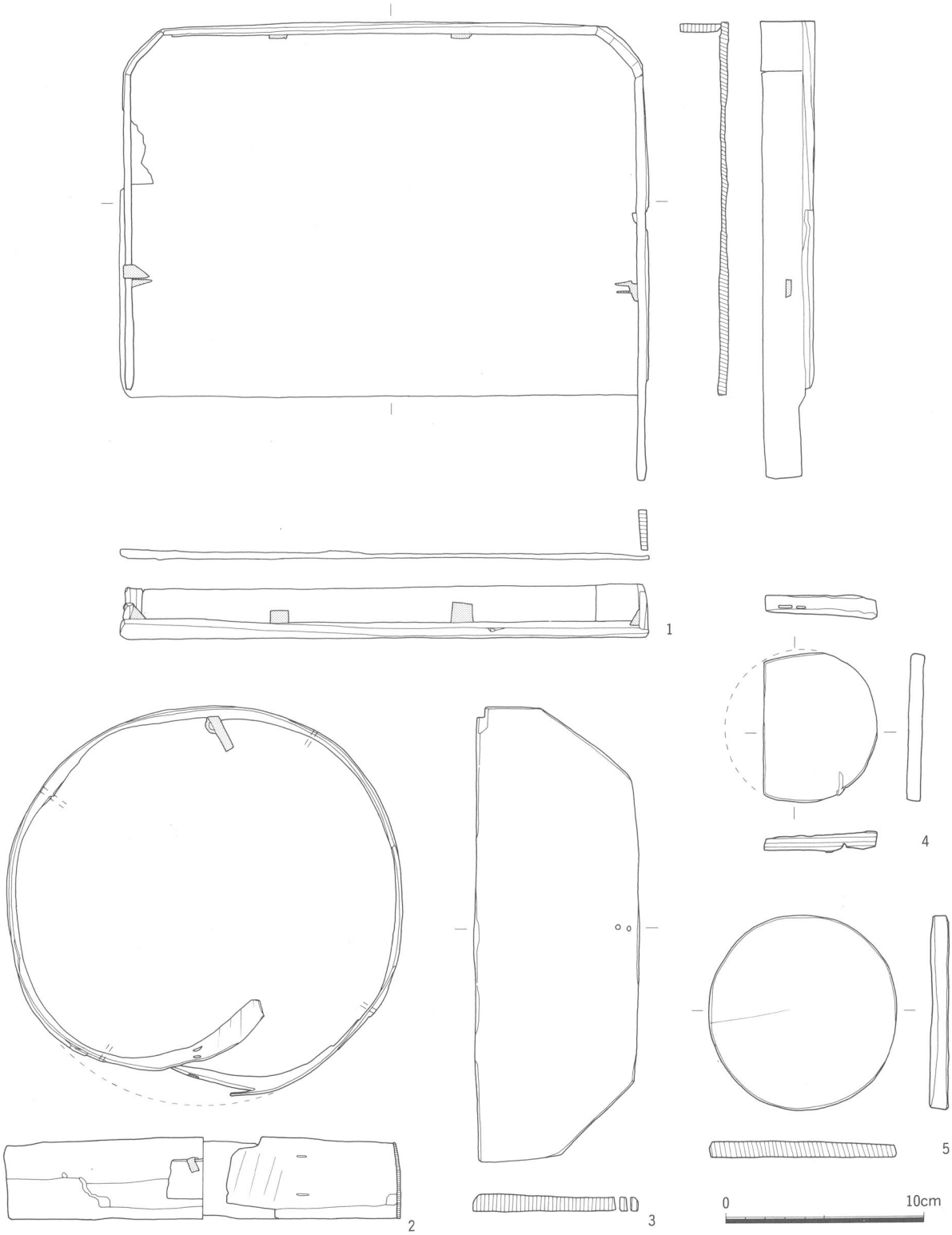
第28図　出土土器実測図(6)



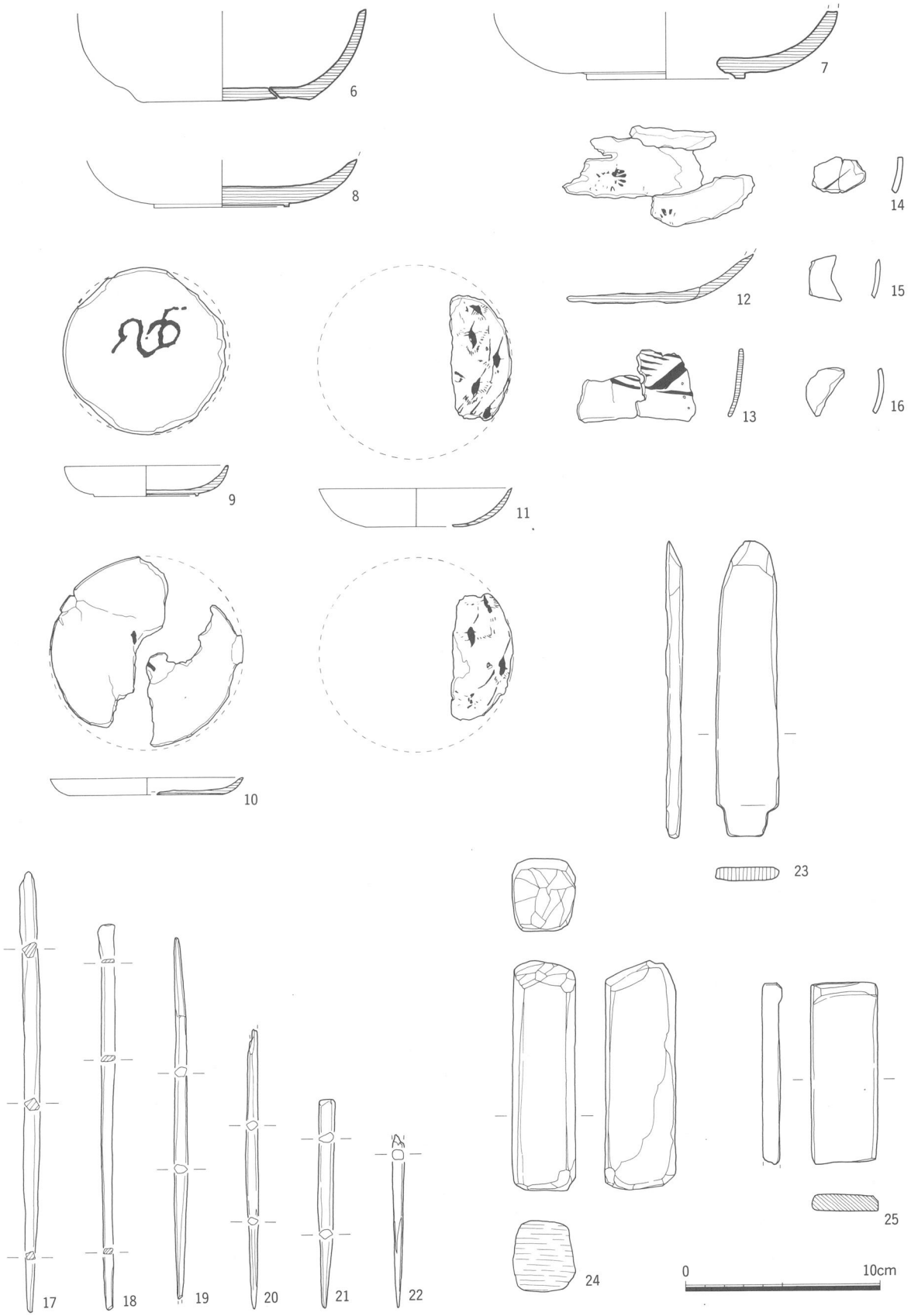
第29図　出土土器実測図(7)



第30図　出土土器実測図(8)



第31図　出土木製品実測図(1)

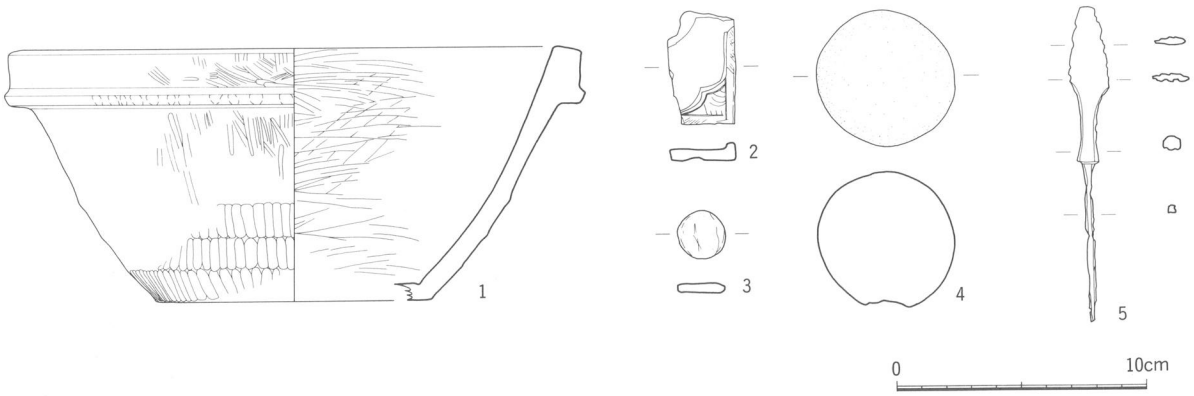


第32図　出土木製品実測図(2)

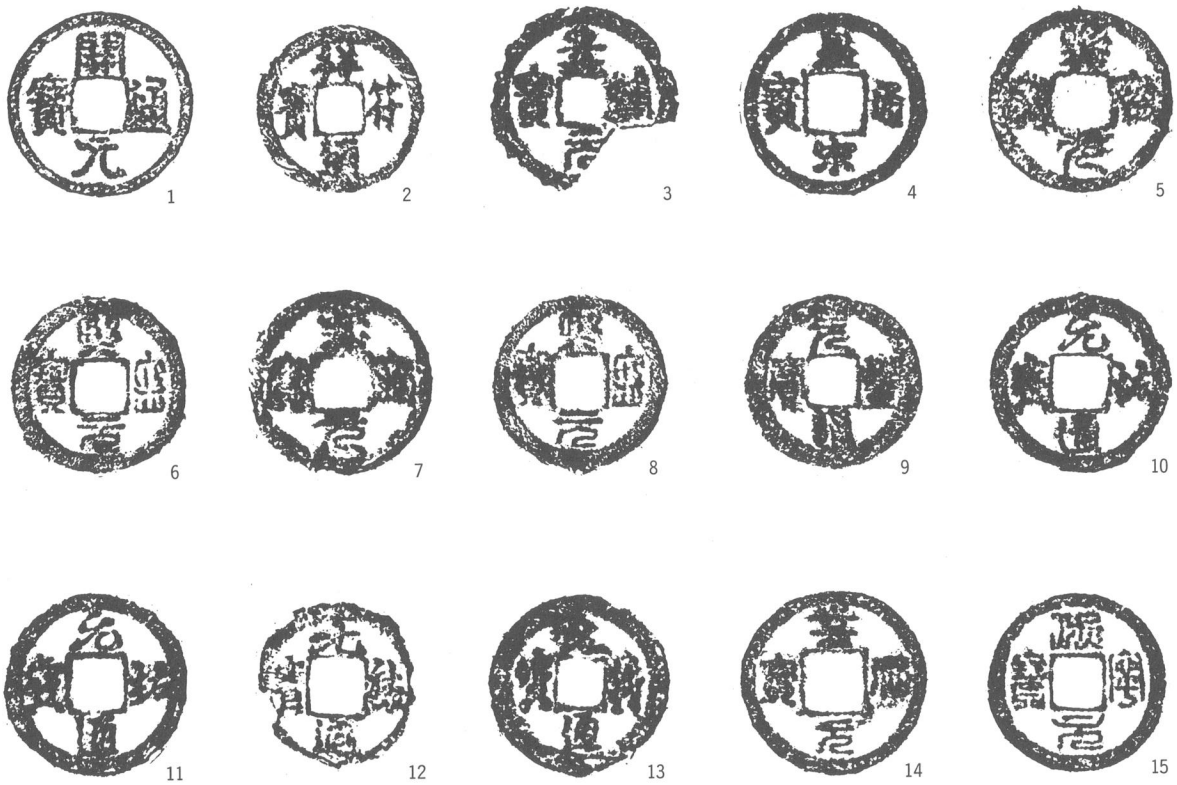
第33図　出土木製品実測図(3)

第34図　出土木製品実測図(4)

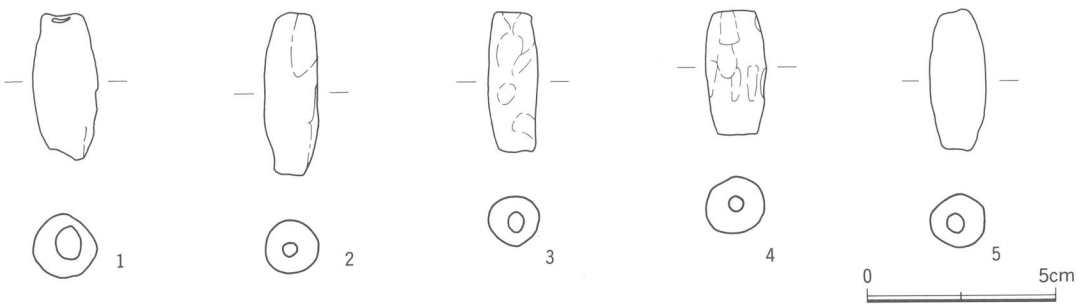
第35図　出土石製品実測図(1)



第36図　出土石製品・鉄鏃出測図



第37図　出土銭貨拓影



第38図　土錘・陶錘実測図

表3　出土土器計測表(1)

番号	出土位置・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残在	色調	特徴等	図版
1	SD205	灰釉陶器	碗	(16.2)	6.1	(7.6)	1/3	灰白色	口縁部外反。外面にスス付着	15
2	D-2・9層	灰釉陶器	碗	(15.7)			口縁部1/6	灰白色	口縁部外反。焼きぶくれ。	
3	SD205	灰釉陶器	碗	(17.2)			1/3・底部欠損	灰白色	口縁部外反小さい。内面にスス付着。	15
4	SD205	灰釉陶器	碗	(15.8)	5.1	(7.6)	1/4	灰白色	口縁部外反小さい。内外面にスス付着。	15
5	SD205	灰釉陶器	碗	(16.0)			口縁部1/8	灰色	口縁部外反。	
6	SD205	灰釉陶器	碗	(17.0)			口縁部1/8	灰色	口縁部外反小さい。外面にスス付着。	
7	SD102	灰釉陶器	碗	(17.0)			口縁部1/9	灰色	口縁部直下に緩い稜線。	
8	SP250	灰釉陶器	碗	(14.0)			口縁部～体部1/6	灰黄色	口縁部外反。ノタメ明瞭。	
9	D-2・9層	灰釉陶器	碗			(7.1)	底部1/4・体部1/8	灰色	内面に焼きぶくれ。	
10	SD205	灰釉陶器	碗			(8.0)	底部1/4	灰色	スノコ痕。内外面にスス付着。	
11	SD104	灰釉陶器	碗			(7.9)	底部1/4	灰白色	底部に吹き出し。	
12	E-2・9層	灰釉陶器	碗			7.4	底部一部欠損	灰色	高台内面にわずかに内湾。	
13	D-2・9層	灰釉陶器	碗			(7.9)	底部～体部1/2	灰白色	外面にスス付着	
14	E-1・8層	灰釉陶器	碗			(7.3)	底部1/2	灰色	外面にスス付着。内面吹き出し。	
15	SD205	灰釉陶器	碗			(6.8)	底部～体部1/4	灰白色	体部下半で屈曲。内面にスス付着。	
16	2区西側排水溝	灰釉陶器	碗			7.0	底部2/3	灰色	ノタメ明瞭。外面に吹き出し。	
17	E-1・8層	灰釉陶器	碗			(7.9)	底部1/4	灰色	ノタメ明瞭。焼成やや軟調。	
18	SP226	灰釉陶器	碗			(7.2)	底部1/2・体部1/4	灰色	内湾やや大きい。外面のナデ粗い。	
19	E-2・9層	灰釉陶器	碗			(6.9)	底部1/4	灰白色	スノコ痕。ノタメ明瞭。内面に吹き出し。	
20	SD205	灰釉陶器	碗			(6.5)	底部1/2	灰白色	外面にスス付着。外面に吹き出し。	
21	SE104	灰釉陶器	碗			(6.9)	底部～体部一部1/4	灰白色	スノコ痕。内面に重ね焼成痕。	
22	SD108	灰釉陶器	碗			(8.8)	底部1/6	灰黄褐色	ナデやや粗い。内面に重ね焼成痕。	
23	SE101	灰釉陶器	碗			(6.9)	底部1/4	青灰色	高台外に大きく開く。	
24	E-2・9層	灰釉陶器	碗			(8.0)	底部1/3	灰色	ノタメ明瞭。内面に重ね焼成痕・降灰。	
25	2区東側排水溝	灰釉陶器	碗			(7.2)	底部1/3	褐灰色	スノコ痕。内面に降灰。	
26	SP250	灰釉陶器	碗			(7.2)	底部1/4	灰色	体部下半で屈曲。	
27	4区西側排水溝	灰釉陶器	碗			(7.2)	底部1/2	灰色	高台部に爪痕。内面に著しい自然釉。焼きぶくれ。	
28	SD205	灰釉陶器	碗			(7.2)	底部1/4	青灰色	スノコ痕。内面に吹き出し。	
29	D-2・9層	灰釉陶器	碗			(7.0)	底部2/5	灰白色	直線気味にのびる高い高台。内面に吹き出し。	
30	C-2・8層	灰釉陶器	碗			6.8	底部一部欠損	灰白色	スノコ痕。ノタメ明瞭。	
31	SD205	灰釉陶器	碗			7.0	底部3/4	浅黄橙色	内面にスス・吹き出し。	
32	SD205	灰釉陶器	碗			(7.5)	底部1/2	灰白色	スノコ痕。内面ノタメ明瞭。	
33	SD205	灰釉陶器	碗			7.0	底部完形	灰白色	スノコ痕。内外面スス付着。	
34	D-2	灰釉陶器	碗			7.2	底部完形	灰色	スノコ痕。外面ノタメ明瞭。	
35	2区西側排水溝	灰釉陶器	碗			7.4	底部2/3	灰色	外に大きく開く高台。スノコ痕。	
36	3区西側排水溝	山茶碗	碗	(17.5)	5.7	6.7	底部完形・口縁部～体部1/4	灰色	口縁部外反。スノコ痕。内面降灰。	
37	SD205	山茶碗	碗	(16.3)	4.9		口縁部～体部1/4	灰色	口縁部外反。ノタメ明瞭。内面に降灰。	
38	K-2・8層	山茶碗	碗	16.6	5.5	6.6	3/4	灰色	スノコ痕。体部緩やかな内湾。	15
39	K-1・7層	山茶碗	碗	(16.4)	5.1	(5.8)	底部1/4・体部1/8	黄灰色	モミガラ痕。内面に降灰。	
40	J-2・8層	山茶碗	碗	(16.3)	6.1	(7.4)	1/3	暗茶色	スノコ痕。体部に緩やかな内湾。ノタメ明瞭。	
41	K-2	山茶碗	碗	(15.8)	6.0	(6.6)	底部1/2・口縁部1/4	赤褐色	スノコ痕。内面に降灰。重ね焼成痕。	
42	J-2・8層	山茶碗	碗	(15.9)	6.0	(7.0)	口縁部1/16・底部1/2	灰色	スノコ痕。口端部つまみ上げる。	
43	K-2・8層	山茶碗	碗	(16.3)	4.7	(7.6)	口縁部1/8・底部1/4	黄灰色	スノコ痕。内面に降灰・重ね焼成痕。	15
44	SD110	山茶碗	碗	(16.1)	6.3	(8.2)	約1/2	灰色	口縁部わずかに外反。スノコ痕。内面にスス付着。	15
45	SD101	山茶碗	碗	(15.7)	5.9	7.2	底部完形・口縁部1/8	にぶい黄橙色	体部直線的。スノコ痕。内面にスス・炭化物付着。	
46	G-2・9層	山茶碗	碗	16.8	4.8	7.2	ほぼ完形	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。	
47	G-14・9層	山茶碗	碗			(8.2)	1/4	灰色	体部下半で屈曲。スノコ痕。内面降灰。	
48	L-1・8層	山茶碗	碗			(8.2)	底部～体部1/3	灰色	スノコ痕。	
49	4区西側排水溝	山茶碗	碗			7.8	底部完形	灰白色	スノコ痕。内面重ね焼成痕。	
50	C-2・8層	山茶碗	碗			(8.2)	底部1/2	灰色	スノコ痕。底部器壁薄い。	
51	E-2・9層	山茶碗	碗			8.0	底部完形	黄灰色	スノコ痕。	
52	SD205	山茶碗	碗			7.0	底部完形	灰色	内面重ね焼成痕。	
53	C-3・8層	山茶碗	碗			(6.8)	底部1/6	灰白色	高台厚い三角状。	
54	F-2・7層	山茶碗	碗			(6.8)	底部1/2	灰白色	高台三角状。	
55	SD205	山茶碗	碗			8.0	底部完形	灰白色	スノコ痕。内面重ね焼成痕。	
56	4区・8層	山茶碗	碗			(8.4)	底部1/6	灰色	高台端部丸く収める。内面スス付着。	
57	D-1・8層	山茶碗	碗			(6.3)	底部1/2	灰色	スノコ痕。内面降灰。	
58	K-2・8層	山茶碗	碗			7.2	底部完形	灰色	スノコ痕。内面降灰。重ね焼成痕。	
59	G-2・8層	山茶碗	碗			(7.5)	底部1/4	灰色	高台端部丸く収める。	
60	G-1・9層	山茶碗	碗			(7.4)	底部1/3	灰色	スノコ痕。内面重ね焼成痕。	
61	SD104	山茶碗	碗			7.3	底部一部欠損	灰色	スノコ痕。重ね焼成痕。	

表4　出土土器計測表(2)

番号	出土位置・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残在	色調	特徴等	図版
62	Ⅰ-2	山茶碗	碗			(7.5)	底部1/2	灰色	スノコ痕。内面重ね焼成痕。	
63	SD108	山茶碗	碗	(14.7)	4.35	(6.9)	口縁部1/10・底部1/2	灰色	口端部わずかに内側に肥厚。スノコ痕。	
64	K-1・8層	山茶碗	碗	(14.0)	4.1	6.8	口縁部1/14・底部完形	青灰色	体部内湾。スノコ痕。内面降灰。	15
65	SD108	山茶碗	碗	(14.6)	4.5	(6.4)	1/8	黄灰色	ノタメ明瞭。スノコ痕。	
66	SD106	山茶碗	碗	(14.3)	4.0	(7.5)	口縁部～底部1/4	浅黄橙色	内面スス付着。焼成軟調。	
67	K-2・8層	山茶碗	碗	(14.4)	4.2	(7.0)	口縁部～底部1/4	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。	15
68	K-2・8層	山茶碗	碗	(14.8)			口縁部～体部1/4	青灰色	体部外面に爪痕。内面降灰。	
69	K-2・8層	山茶碗	碗	(15.0)	4.6	(7.3)	口縁部～底部1/4	青灰色	体部直線的。スノコ痕。内面降灰。	15
70	3区西側排水溝	山茶碗	碗	(13.7)	3.7	5.8	底部完形・口縁部～体部1/3	青灰色	体部直線的。スノコ痕。内外面自然釉。	15
71	F-2・8層	山茶碗	碗	(12.7)	3.5	(5.0)	1/8	暗灰黄色	わずかに口縁部内傾。	
72	I-2・7層	山茶碗	碗	(13.8)			口縁部1/8	灰黄色	口縁部わずかに肥厚。	
73	J-1・2・8層	山茶碗	碗	(13.2)			口縁部1/3	灰色	内面にスス付着。	
74	G-2・8層	山茶碗	碗			6.6	底部2/3	灰色	体部大きい内湾。スノコ痕。	
75	SD302	山茶碗	碗			6.9	底部完形	灰色	底部内外面に工具による圧痕。スノコ痕。	
76	K-2・8層	山茶碗	碗			6.8	底部2/3	灰色	底部糸切り範囲よりも小さい高台。内面に降灰。	
77	SD101	山茶碗	碗			(7.6)	底部1/3	灰色	スノコ痕。	
78	1区東側排水溝	山茶碗	碗			(7.2)	底部1/2	灰色	スノコ痕。内外面にスス付着。	
79	SD302	山茶碗	碗			(6.6)	底部1/2	灰色	底部工具による圧痕。スノコ痕。	
80	SD101	山茶碗	碗			(7.8)	底部1/4	灰色	高台にぶい三角状。	
81	Ⅰ-2	山茶碗	碗			(6.8)	底部1/4	灰色	スノコ痕。	
82	SD302	山茶碗	碗			(6.6)	底部1/2	灰色	高台のはみ出し大きい。スノコ痕。	
83	J-1・6層	山茶碗	碗			(7.0)	底部1/4	黄灰色	高台小さい三角形状。	
84	J-2・8層	山茶碗	碗	13.0	3.85	5.4	一部欠損	灰色	体部緩やかな内湾。モミガラ痕。	15
85	SF101	山茶碗	碗	13.2	3.7	6.2	3/4	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。内面に降灰。	15
86	H-1・2・6層	山茶碗	碗	(12.6)	3.5	5.8	底部完形・口縁部1/9	灰色	体部緩やかな内湾。モミガラ痕。内面にスス付着。	
87	2区西側排水溝	山茶碗	碗	(12.6)	3.8	(5.5)	口縁部～体部1/6・底部1/2	灰色	スノコ痕。内面に降灰。	15
88	1区	山茶碗	碗	(12.6)	4.0	5.3	底部3/4	淡黄色	口縁部わずかに内傾。スノコ痕。	
89	H-3・8層	山茶碗	碗	(12.6)	3.5	5.3	口縁部1/8・底部3/4	灰色	スノコ痕。内面に降灰。重ね焼成痕。	
90	J-1・6層	山茶碗	碗	(12.5)			口縁部1/6	灰色	口端部わずかに外反。内面に降灰。	
91	J-1・6層	山茶碗	碗	(12.5)			口縁部1/8	オリーブ灰色	体部緩やかな内湾。	
92	Ⅰ-2	山茶碗	碗			5.2	底部1/2・体部1/8	灰色	内面に炭化物付着。重ね焼成痕。スノコ痕。	
93	SD302	山茶碗	碗			(7.0)	底部1/4	灰色	スノコ痕。内面に降灰。	
94	J-1・6層	山茶碗	碗			6.5	底部2/3	灰色	スノコ痕。底部に爪痕。	
95	H-2・7層	山茶碗	碗			5.6	底部完形	浅黄色	スノコ痕。	
96	K-2・7層	山茶碗	碗	12.2	3.1	6.2	一部欠損	灰色	体部器壁やや薄い。底部糸切り未調整。	16
97	I-1・7層	山茶碗	碗	12.3	3.05	6.4	3/4	灰色	口縁部わずかに外傾。底部糸切り未調整。	16
98	K-2・8層	灰釉陶器	小碗	9.9	3.15	4.8	3/4	灰色	口縁部外反。内面に降灰。	16
99	2区西側排水溝	灰釉陶器	小碗	(10.1)	3.1	(4.9)	1/4	灰色	口縁部外反。焼きぶくれ。スノコ痕。内面に降灰。	16
100	C-2・8層	灰釉陶器	小碗	(10.3)	3.1	(6.4)	口縁部1/10・底部1/4	灰白色	口縁部外反。スノコ痕。	
101	2区西側排水溝	灰釉陶器	小碗	9.9	2.9	5.0	3/4	灰色	口縁部小さい外反。外面に吹き出し。内面き降灰。	16
102	D-2・8層	灰釉陶器	小碗	(9.0)			口縁部約1/3	灰色	口縁部肥厚。外面に吹き出し。	
103	SD101	灰釉陶器	小碗	(8.4)			口縁部～体部1/8	灰色	口縁部外反。	
104	D-2・9層	灰釉陶器	小碗	(9.8)	2.5	(4.9)	口縁部～体部1/4	灰白色	スノコ痕。内面に降灰。	16
105	1区東側排水溝	灰釉陶器	小碗	(9.5)	2.7	(4.4)	1/2弱	灰色	焼き歪み。スノコ痕。内面降灰。	
106	E-1・9層	灰釉陶器	小碗	(9.8)	2.8	(5.2)	1/4	灰色	口縁部外反。内面に自然釉。重ね焼成痕。	16
107	4区・8層	灰釉陶器	小碗	(10.0)	3.2	(5.4)	1/4	褐灰色	高台端部剝離。内面に自然釉・重ね焼成痕。	16
108	C-2・8層	灰釉陶器	小碗	(9.5)	2.7	(4.6)	底部1/2	灰色	口縁部肥厚。	
109	E-1・8層	灰釉陶器	小碗	(11.3)	3.4	(5.4)	1/4	灰色	輪花。内面に降灰。	16
110	K-1・8層	灰釉陶器	小碗	(10.2)	2.9	(4.9)	1/3	灰色	体部の稜緩い。内面に焼きぶくれ。	16
111	E-2・9層	灰釉陶器	小碗	(9.3)	2.6	(5.0)	1/3	灰白色	体部の稜緩い。スノコ痕。内面重け焼成痕。	17
112	H-2・6層	灰釉陶器	小碗	(9.7)	2.8	(5.7)	1/5	灰白色	焼き歪み。内面に自然釉。	
113	4区表土除去中	灰釉陶器	小碗	(9.0)	3.0	(4.5)	1/3	黄灰色	高台端部剝離。内面重ね焼成痕。	17
114	2区西側排水溝	灰釉陶器	小碗	(10.6)	3.7	(5.7)	口縁部1/8・底部1/2	灰褐色	体部の稜緩い。スノコ痕。	17
115	E-2・9層	灰釉陶器	小碗	9.8	2.8	5.0	ほぼ完形	灰白色	体部の稜緩い。内面に自然釉・重ね焼成痕。	17
116	G-2・9層	灰釉陶器	小碗	9.6	2.9	5.2	完形	青灰色	五輪花。スノコ痕。	17
117	SD205	灰釉陶器	小碗	9.7	2.5	4.5	口縁部一部欠損	褐灰色	無高台小碗。口縁部外反大きい。	17
118	F-2・8層	山茶碗	小碗	(9.8)	3.3	(5.1)	1/4	灰黄色	スノコ痕。器壁厚い。	17
119	C-2・8層	山茶碗	小碗	(11.3)	3.0	(5.5)	1/3	明青灰色	体部は緩い稜。内面に自然釉。	17
120	SD105	山茶碗	小碗	9.1	3.1	4.4	口縁部～底部2/3	灰色	口縁部わずかに外反。スノコ痕。	17
121	G-1・9層	山茶碗	小碗	(8.8)	3.0	(3.8)	1/3	灰黄色	体部中位で屈曲。	
122	2区東側排水溝	山茶碗	小碗	(11.0)	2.7	(6.0)	底部～口縁部1/4	灰色	体部内湾。	

表5　出土土器計測表(3)

番号	出土位置・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残在	色調	特徴等	図版
123	2区西側排水溝	山茶碗	小碗	(10.8)	3.0	(3.6)	1/4	灰色	スノコ痕。器壁厚い。内面に自然釉。	
124	4区表土除去中	山茶碗	小碗	(8.4)	3.0	(4.2)	1/2	灰色	体部中位で屈曲。スノコ痕。内面に自然釉。	
125	SD205	山茶碗	小碗	(9.8)	2.4	(5.0)	1/3	灰白色	口縁部わずかに外反。スノコ痕。	
126	E-2・8層	山茶碗	小碗	(9.8)	2.9	(5.7)	口縁部～底部1/4	灰色	口縁部わずかに外反。スノコ痕。	
127	SD101	山茶碗	小碗	(9.6)	2.85	(4.8)	1/2	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。内面に降灰・自然釉。	
128	G-2・8層	山茶碗	小碗	(9.2)	2.7	(4.6)	1/3	青灰色	焼き歪み。スノコ痕。内面に自然釉。	
129	E-2・8層	山茶碗	小碗	(9.6)	2.7	(4.6)	1/4	灰色	体部下位に緩い後。スノコ痕。	
130	F-2・8層	山茶碗	小碗	8.8	2.5	4.9	2/3	灰色	体部中位に緩い後。外面剝離。内面に降灰。	
131	F-1・8層	山茶碗	小碗	9.1	2.3	5.1	2/3	灰色	体部中位に後。スノコ痕。内面に自然釉。重ね焼成痕。	
132	E-2・8層	山茶碗	小碗	(9.6)	2.3	(5.4)	1/3	灰色	口縁部外傾。スノコ痕。	
133	2区西側排水溝	山茶碗	小碗	(9.3)	2.3	5.2	口縁部～体部1/2・底部完形	灰色	体部直線的に開く。スノコ痕。内面に自然釉。	
134	H-1・2・9層	山茶碗	小碗	9.3	2.5	4.8	3/4	灰色	体部中位で屈曲。スノコ痕。内外面に自然釉。重ね焼成痕。	
135	SD108	山茶碗	小碗	(8.7)	2.4	(4.0)	1/2	灰白色	体部中位に緩い稜。スノコ痕。焼成やや軟調。	
136	K-2・8層	山茶碗	小碗	8.9	2.6	4.8	3/4	灰色	焼き歪み。スノコ痕。	
137	H-2・8層	山茶碗	小碗	(9.0)	2.55	(4.6)	1/4	灰白色	口縁部わずかに肥厚。内面に自然釉。	
138	K-2・3・8層	山茶碗	小碗	(7.5)	2.9	(3.0)	1/3	緑灰色	体部下位で緩やかに内湾。	
139	SD101	山茶碗	小碗	(7.8)	2.3	(4.6)	1/4	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。	
140	H-1	山茶碗	小碗	(7.9)	2.3	(4.6)	1/3	灰色	体部下位に緩やかな稜。スノコ痕。	
141	K-1・8層	山茶碗	小碗	(7.2)	2.5	(3.8)	1/4	灰褐色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。	
142	K-1・8層	山茶碗	小碗	(8.0)	2.6	(3.3)	1/4	灰色	体部緩やかな内湾。スノコ痕。	
143	E-2・8層	山茶碗	小皿	(10.0)	2.7	(5.9)	1/5	灰白色	底部大きく突出。	
144	2区西側排水溝	山茶碗	小皿	(10.1)	2.6	(5.2)	口縁部～体部1/8・底部1/2	灰白色	底部大きく突山。内面に自然釉。	
145	1区・5層	山茶碗	小皿	(9.5)	2.6	(5.3)	口縁部1/12・底部1/4	灰褐色	体部中位で緩く屈曲。	
146	H-1・7層	山茶碗	小皿	(8.2)	2.5	(4.2)	口縁部1/6・底部1/4	青灰色	体部上位で緩く屈曲。底部わずかに突出。	
147	H-2・6層	山茶碗	小皿	(7.5)	2.0	(3.8)	1/2	灰色	体部直線的に開く。底部わずかに突出。	
148	L-1・8層	山茶碗	小皿	8.0	2.2	4.7	2/3	灰色	体部直線的に開く。	
149	L-1・8層	山茶碗	小皿	(8.2)	2.4	(4.4)	1/2	にぶい赤褐色	体部緩やかに内湾。底部わずかに突出。	
150	K-2・8層	山茶碗	小皿	(7.4)	2.6	3.2	口縁部～体部1/2・底部完形	灰色	体部緩やかに内湾。底部突出。	
151	G-2・9層	山茶碗	小皿	(7.6)	2.4	(3.6)	1/2弱	灰色	口縁部わずかに内傾。内面に降灰。	
152	3区南側集水桝	山茶碗	小皿	(7.8)	2.1	4.4	口縁部～体部1/4・底部1/2	灰色	口縁部内外に自然釉。底部わずかに突出。	
153	G-2・8層	山茶碗	小皿	7.2	2.2	3.8	完形	灰色	焼き歪み。底部突出。	
154	南側トレンチ内	山茶碗	小皿	7.9	2.2	4.0	一部欠損	灰色	口縁部にわずかに内傾。内面に降灰。	
155	I-2	山茶碗	小皿	(8.9)	2.1	(5.3)	口縁部～底部1/4	灰色	体部緩やかな後。	
156	I-2・8層	山茶碗	小皿	(8.0)	2.2	(4.7)	1/4	灰色	体部下位に緩やかな内湾。内面に降灰。	
157	E-2・8層	山茶碗	小皿	(8.0)	2.0	(3.8)	1/4	灰色	体部緩やかな内湾。内面に降灰。	
158	L-1・8層	山茶碗	小皿	(9.6)	2.0	5.0	体部1/4・底部完形	灰色	口縁部わずかに肥厚。焼成やや軟調。	
159	H-2・8層	山茶碗	小皿	(8.8)	2.0	(5.5)	1/4	灰色	体部緩やかに内湾。焼き歪み。	
160	西側トレンチ内	山茶碗	小皿	(8.4)	1.9	(4.8)	1/2	褐灰色	体部緩やかに内湾。	
161	H-2・6層	山茶碗	小皿	(8.5)	2.0	(4.2)	1/3	灰色	体部緩やかに内湾。内面に降灰。	
162	2区東側排水溝	山茶碗	小皿	(8.2)	2.0	3.9	口縁部1/4・底部2/3	灰色	口縁部わずかに内湾。	
163	E-2・8層	山茶碗	小皿	7.8	2.0	4.2	一部欠損	灰色	内面に降灰。	
164	J-2・7層	山茶碗	小皿	(7.9)	2.0	(4.4)	1/2	灰色	体部下位に緩い後。内面に降灰。	
165	SD108	山茶碗	小皿	(8.0)	2.1	(4.6)	口縁部1/4・底部1/2	灰白色	体部緩やかな内湾。焼成やや較調。	
166	1区東側排水溝	山茶碗	小皿	(8.0)	1.8	(5.0)	口縁部約1/4・底部1/2	灰白色	体部下位に緩い稜。	
167	F-2	山茶碗	小皿	(8.0)	2.0	(4.5)	1/4	灰色	底部わずかに突出。内面に降灰。	
168	1区東側排水溝	山茶碗	小皿	(8.0)	1.8	(4.3)	口縁部1/2・底部完形	灰色	体部緩やかな内湾。焼成やや軟調。	
169	試掘坑№1内	山茶碗	小皿	8.1	1.7	4.4	完形	灰色	体部直線気味に開く。内面に降灰。	
170	J-2・8層	山茶碗	小皿	(7.9)	1.7	(5.2)	1/2	灰色	底部やや大きい。焼き歪み。	
171	H-1・6層	山茶碗	小皿	(7.6)	1.7	(4.2)	1/2	灰白色	体部中位に緩い稜。	
172	2区西側排水溝	山茶碗	小皿	(8.1)	1.8	(4.3)	口縁部約1/3・底部約1/2	灰色	口縁部わずかに内傾。底部に爪痕。	
173	L-1・8層	山茶碗	小皿	8.6	2.1	5.2	完形	黄灰色	体部直線気味に開く。	
174	1区東側排水溝	山茶碗	小皿	7.6	1.7	4.7	完形	灰色	体部中位に緩い稜。	
175	I-2・8層	山茶碗	小皿	(7.5)	2.0	4.0	口縁部1/3・底部2/3	灰色	口縁部わずかに内傾	
176	G-2・8層	山茶碗	小皿	(8.2)	2.0	(4.2)	1/3	灰色	体部直線気味に開く。内面に自然釉。	
177	L-1・8層	山茶碗	小皿	7.5	1.7	4.1	2/3	灰色	体部中位で屈曲。焼き歪み。	
178	H-1・9層	山茶碗	小皿	7.5	1.7	3.9	完形	灰色	体部中位で屈曲。内面に降灰。	
179	H-2・8層	山茶碗	小皿	7.3	1.9	4.3	口縁部一部欠損	灰色	焼き歪み。内面に降灰。	
180	J-1・8層	山茶碗	小皿	7.0	1.6	4.3	完形	黄灰色	口縁部わずかに内傾。	
181	I-2・6層	山茶碗	小皿	(7.0)	1.6	(4.4)	1/2	緑灰色	底部わずかに突出。内面に降灰。	
182	SD108	山茶碗	小皿	(8.8)	2.4	14.0	1/2	灰白色	口縁部わずかに外反。	
183	2区西側排水溝	山茶碗	小皿	8.0	2.3	4.4	口縁部一部欠損	青灰色	口縁部わずかに肥厚。	

表6　出土土器計測表(4)

番号	出土位置・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残在	色調	特徴等	図版
184	SD101	山茶碗	小皿	(7.8)	2.15	(4.2)	1/5	灰色	口縁部わずかに肥厚。底部わずかに突出。	
185	L-1・8層	山茶碗	小皿	7.4	1.7	4.6	完形	灰色	体部直線的に開く。内面に吹き出し。	19
186	E-2・8層	山茶碗	小皿	(7.9)	2.0	(5.4)	1/5	灰色	底部わずかに突出。体部直線的に開く。	
187	L-1・8層	山茶碗	小皿	8.1	2.0	5.0	2/3	灰白色	底部大きい。体部中位で緩やかに屈曲。	19
188	I-1・7層	山茶碗	小皿	(7.4)	1.5	4.6	底部ほぼ完形	灰白色	底部大きい。内面にスス付着。	
189	J-2・6層	山茶碗	小皿	(7.8)	1.8	(4.4)	1/4	灰色	体部中位で屈曲。口縁部わずかに肥厚。	
190	SD101	山茶碗	小皿	(7.7)	1.8	(4.2)	1/5	灰色	体部わずかに内湾。内面に降灰。	
191	K-1・8層	山茶碗	小皿	(6.9)	1.5	(4.5)	1/3	灰色	体部緩やかに内湾。内面に降灰。	
192	J-2・6層	山茶碗	小皿	8.0	1.4	4.3	口縁部2/3	灰色	焼き歪み。内面に自然釉。	
193	1区・7層	山茶碗	小皿	(7.6)	1.4	(3.7)	1/2	灰色	体部緩やかな内湾。焼き歪み。内面に降灰。	19
194	1区北側排水溝	山茶碗	小皿	(7.95)	1.5	(3.4)	1/2	にぶい橙色	底部わずかに突出。焼き歪み。	
195	H-1・6層	山茶碗	小皿	(7.4)	1.4	(4.3)	1/2	灰色	底部やや大きい。焼き歪み。内面に降灰。	19
196	I-2・7層	山茶碗	小皿	(7.4)	1.3	(3.9)	1/4	灰色	口縁部わずかに外反。	
197	K-2・8層	山茶碗	小皿	7.7	1.7	3.7	完形	灰色	体部中位でわずかに屈曲。底部モミガラ痕。	19
198	G-2	山茶碗	小皿	(7.4)	1.4	(5.1)	1/4	灰色	体部中位に緩い稜。底部わずかに突出。内面に降灰。	
199	I-2・8層	山茶碗	小皿	6.9	1.4	3.6	2/3	灰白色	体部緩やかに内湾。	
200	H-2・6層	山茶碗	小皿	(6.4)	1.3	(3.0)	1/2	灰白色	体部中位に緩い稜。底部わずかに突出。	
201	E-2・8層	山茶碗	小皿	7.0	2.0	3.3	一部欠損	灰色	体部中位に緩い稜。内面に降灰。	
202	K-2・8層	陶器	片口鉢	(15.6)	9.7	(10.2)	1/5	灰白色	体部中位から底部へラケズリ。内面炭化物付着。渥美・湖西産。	
203	K-2・8層	陶器	大平鉢			(11.6)	底部1/6	灰色	高台三角形で、端部は丸くなる。体部ナデ。	
204	J-2・8層	陶器	大平鉢			(13.8)	底部1/4	青灰色	高台三角形で、大きく外に張り出す。	
205	2区西側排水溝	灰釉陶器	長頸壺	(18.6)			口縁部1/8・頸部1/4	灰色	頸部は外反し、口縁部強く外に引き出す。	
206	I・J-1・6層	陶器	短頸壺	(5.6)			体部1/5	オリーブ灰色	肩部が強く張り出す。	
207	K-2・8層	陶器	小型壺			6.3	底部完形	灰色	底部糸切り未調整。内面に降灰。	
208	H-1・8層	陶器	小型壺			(11.2)	1/4	灰色	底部から垂直に立ち上がり、肩部は丸く張り出す。	
209	SD104	陶器	甕	(39.0)			口縁部1/8	黄灰色	大きく外反す口縁部。内面に強いナデ。渥美産。	
210	I-2	陶器	大平鉢	(30.3)			口縁部1/14	灰色	口縁端部が丸く肥厚する。常滑産。	
211	SF101	陶器	卸皿	(16.8)	4.4	(12.4)	口縁部1/4・底部1/2	灰白色	玉縁状口縁。底部へラケズリ。瀬戸産。	19
212	J-2・7層	陶器	卸皿	(15.2)			口縁部1/16	灰色	玉縁状口縁。施釉の残存は内面のみ。瀬戸産。	
213	I-1・2・7層	陶器	卸皿	(13.6)			口縁部1/10	灰白色	口端部工具による強いナデ。体部中位で内湾。瀬戸産。	
214	I・H-2・7層	陶器	瓶子			(11.2)	底部1/2	灰黄色	底部付着物多く不安定。底部外端強いナデ。瀬戸産。	
215	1区西側排水溝	陶器	四耳壺				胴部1/5	灰白色	肩部の張りやや大きい。外面の施離剝離激しい。瀬戸産。	
216	H-2・6層	陶器	瓶子				胴部1/8	灰白色	体部やや膨らむ。内面指頭圧痕。瀬戸産。	
217	試掘坑№2内	陶器	瓶子				肩部1/4	灰白色	肩部の張り大きい内面工具による強いナデ。瀬戸産。	
218	2区西側排水溝	陶器	天目茶碗	(11.8)	6.7	3.6	口縁部～体部1/2・底部完形	灰白色	高台部の削りだし粗雑。瀬戸・美濃産。	
219	3区西側排水溝	陶器	天目茶碗	(10.8)			口縁部～体部1/4	赤灰色	頸部の稜やや強い。釉の剝離激しい。志戸呂産。	
220	4区東側排水溝	陶器	天目茶碗	(11.2)			口縁部1/3・体部1/6	にぶい褐色	体部が丸味を帯び、口縁部の外反強い。志戸呂産。	
221	1区西側排水溝	陶器	天目茶碗	(11.5)			口縁部1/6	にぶい褐色	口縁部の外反やや弱い。志戸呂産。	
222	1区表土除去中	陶器	小鉢	(5.1)	5.6	5.2	口縁部～体部1/2・底部完形	赤色	胴部中位が大きく張り出し、口縁部はわずかに外傾。志戸呂産。	
223	4区東側排水溝	陶器	小皿	(11.9)	2.7	(6.9)	底部～体部1/4	灰褐色	口縁部上につまみ上げ肥厚させる。志戸呂産。	
224	1区西側排水溝	陶器	小皿	(10.8)	2.5	(5.0)	口縁部1/8・底部1/4	にぶい赤褐色	口縁部外反。施釉の剝離著しい。志戸呂産。	
225	1区表土除去中	陶器	小皿	(10.9)	2.5	5.6	口縁部1/8・底部完形	にぶい赤褐色	体部上位で強く屈曲。志戸呂産。	
226	3区西側排水溝	陶器	小皿	(11.0)	2.8	(6.0)	底部1/4・体部1/7	にぶい黄橙色	体部上位で強く屈曲し、口縁部につまみ上げる。志戸呂産。	
227	1区西側排水溝	陶器	丸碗			(3.8)	底部1/2	にぶい赤褐色	高い三角形の高台。志戸呂産。	
228	1区西側排水溝	陶器	天目茶碗			(5.0)	底部1/4弱	灰白色	高い四角高台。スノコ痕。志戸呂産。	
229	1区表土除去中	陶器	擂鉢	(28.3)			口縁部1/10	灰白色	口縁部外面肥厚。瀬戸・美濃産。	
230	1区・5層	陶器	小皿	(9.6)			口縁部1/5	灰白色	縁釉小皿。内面に工具による圧痕。	
231	2区西側排水溝	陶器	平碗			4.4	底部完形	黄灰色	体部直線的。内面にトチン痕。三ツ沢産。	
232	1区表土除去中	陶器	水注	4.6	5.9	5.8	一部欠損	灰黄褐色	把手・注口部欠損。口縁部垂直に立ち上がる。	19
233	1区西側排水溝	陶器	甕	(24.9)			口縁部1/8	明赤褐色	頸部やや内傾。縁帯部薄い。常滑産。	
234	2区東側排水溝	陶器	甕	(32.4)			口縁部1/10	明赤褐色	頸部やや内傾。外面に自然釉。常滑産。	
235	2区・7層	陶器	甕	(39.8)			口縁部1/8	灰白色	縁帯部・頸部に密着。焼成軟調。常滑産。	
236	E-1・9層	陶器	甕	(49.6)			口縁部わずか	明赤褐色	縁帯部上位を強く引き出す。常滑産。	
237	J-2・6層	陶器	甕	(36.9)			口縁部1/7	にぶい橙色	縁帯部退化。内面に工具による沈線状の強いナデ。常滑産。	
238	H-2・7層	陶器	平鉢	(37.0)			口縁部1/16	褐灰色	口端部に肥厚し、平坦に仕上げる。常滑産。	
239	G・H-2・6・8層	陶器	平鉢	(26.5)			口縁部1/4	灰褐色	口端部に強いナデ。外面に肥厚。常滑産。	
240	2区試掘坑内№3	土師器	坏	(13.2)	4.25	(6.5)	1/4	にぶい橙色	全体に摩滅著しい。口縁部内湾。	
241	SD205	土師器	碗	(15.7)			口縁部1/14	灰白色	口縁部外反。摩滅著しい。	
242	J-2・6層	土師器	皿	(13.7)	2.9	(5.1)	口縁部～底部1/3	浅黄橙色	底部糸切り未調整。口縁部直線的に開く。	
243	I-2・8層	土師器	皿	(12.6)			1/5	にぶい黄橙色	体部直線的に開く。内面のナデ丁寧。	
244	SD205	土師器	皿	(13.0)	2.2	(6.8)	口縁部～底部1/4	にぶい橙色	体部中位で屈曲。底部わずかに突出。	

表７　出土土器計測表(5)

番号	出土位置・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残在	色調	特徴等	図版
245	1区東側排水溝	土師器	小皿	(10.1)	2.3	(5.4)	1/4	浅黄橙色	体部の内湾ごくわずか。全体に摩耗。	
246	L-１・８層	土師器	小皿	8.6	2.0	5.1	2/3	にぶい黄橙色	体部緩やかに内湾。	
247	SD108	土師器	鍋	(23.0)			口縁部わずかに残存	にぶい黄橙色	口縁部上位で屈曲。外面に指頭圧痕。	
248	K-１・８層	土師器	鍋	(27.0)			口縁部1/8	にぶい黄橙色	口縁部上位で屈曲。外面にスス付着。	
249	K-２・８層	土師器	鍋	(27.0)			口縁部1/12	にぶい黄橙色	口縁部大きく外反。内面の折り返し狭い。	
250	SD110	土師器	鍋	(28.4)			口縁部わずかに残存	灰白色	口縁部大きく外反。	
251	K-１・８層	土師器	鍋	(33.2)			口縁部1/12	明褐色	口縁部大きく外反。内外面剝離顕著。外面にスス付着。	
252	SD108	瓦器	碗	(9.6)			口縁部～体部1/3	青黒色	口端部直下に押え。体部上位でわずかに屈曲。内面ミガキ。	
253	I-１・６層	青磁	碗	(11.0)			口縁部1/8	灰白色	口端部外反。型押し蓮弁文。施釉非常に厚い。	
254	F-１	青磁	碗	(18.9)			口縁部1/16	灰白色	口縁部大きく屈曲。型押し蓮弁文。	
255	G-２・８層	青磁	碗	(18.0)			口縁部1/14	灰白色	口縁部わずかに肥厚。型押し蓮弁文。	
256	1区北側排水溝	青磁	碗	(14.3)			口縁部1/6	灰白色	体部深く下位で内湾。口縁部わずかに外反。	
257	E-１・８層	青磁	皿	(11.4)			口縁部1/16	灰色	体部緩やかに内湾。内面に圏線。	
258	2区東側排水溝	青磁	碗	(11.1)			口縁部1/8	灰白色	口端部わずかに外傾。	
259	I-２・６層	青磁	碗			(4.8)	底部1/4	灰白色	四角形高台。外面を縦方向に削り出す。	
260	1区旧河道中	青磁	碗			(6.0)	底部1/3	灰白色	厚い四角形高台。	
261	I-２・７層	青磁	碗			5.3	底部1/1	灰色	厚い四角形高台。型押し蓮弁文。内面に草花文。	
262	J-１・６層	青磁	碗			(5.4)	底部1/4	灰白色	厚い四角形高台。型押し蓮弁文。内面に草花文。	
263	SD106	白磁	碗	(14.9)			口縁部～体部1/5	灰白色	玉縁状口縁。体部直線的に開き上位で屈曲。	
264	J-２・８層	白磁	碗	(14.1)			口縁部1/6	灰白色	玉縁状口縁。見込みに沈線状の段。	
265	D-２・８層	白磁	碗	(15.4)			口縁部1/8	灰白色	幅の狭い玉縁状口縁。	
266	E-２・８層	白磁	碗	(16.9)			口縁部1/10	灰白色	幅の狭い玉縁状口縁。	
267	J-２・８層	白磁	碗	(15.2)			口縁部1/16	灰白色	口縁部を強く外反させ、端部平坦。	
268	J-２・８層	白磁	碗	(13.8)			口縁部1/16	灰白色	非常緩やかな内湾。口端部直下に沈線状のナデ。	
269	I-２・７層	白磁	碗	(13.0)			口縁部1/19	灰白色	口縁部外反。口端部を釉剝ぎ（ウチハゲ）。圏線。	
270	1区東側排水溝	白磁	碗	(17.3)			口縁部1/12	灰白色	口縁部外反。圏線。	
271	SD101	白磁	碗			(7.5)	底部1/4	灰黄色	高台厚く削り出しわずか。	
272	I-２・７層	白磁	碗			(4.4)	底部1/6	灰白色	内面輪状に釉剝ぎ。	
273	I-２・７層	白磁	皿			(5.3)	底部1/2	オリーブ灰色	全面施釉。体部直線的に開く。	
274	1区	青白磁	合子	(4.8)			口縁部1/8	灰白色	蓋。内面端部釉剝ぎ。	
275	J-１・７層	山茶碗	碗			(7.4)	底部1/2	灰色	墨書土器　犬□　内面硯に転用。	20
276	G-1	山茶碗	碗			(6.8)	体部～底部1/2	にぶい橙色	墨書土器　□□	20
277	調査区外	山茶碗	碗			6.4	底部完形	灰白色	墨書土器　十	20
278	J-２・８層	山茶碗	碗			7.0	底部3/4	浅黄橙色	墨書土器　大	20
279	G-1	山茶碗	碗			(7.0)	底部1/2	黄灰色	墨書土器　□（犬ヵ）	20
280	3区南側排水溝	山茶碗	碗			(6.2)	底部1/2	灰白色	墨書土器　文字数不詳二ないし三文字	20
281	H-３・8層	山茶碗	碗			6.0	底部2/3	灰色	墨書土器　□	
282	3区西側排水溝	山茶碗	碗			6.8	底部3/4	にぶい橙色	墨書土器　□	
283	K-３・８層	山茶碗	碗			(6.2)	底部1/2	灰白色	墨書土器　□	
284	K-２・７層	山茶碗	碗			(5.8)	底部1/2	灰白色	墨書土器　□	20
285	L-１・8層	山茶碗	碗			(6.4)	底部1/2	灰色	墨書土器　□	20
286	K-２・８層	山茶碗	碗			(7.3)	底部1/4	灰白色	墨書土器　□花押の可能性。	21
287	H-２・８層	山茶碗	碗				底部1/5	灰白色	墨書土器　絵　花を表現？	21
288	L-１・８層	山茶碗	小皿	7.8	1.7	4.4	完形	灰色	墨書土器　□□	21
289	H-２・６層	山茶碗	小皿	(7.2)	1.5	(4.4)	1/4		墨書土器　□（犬ヵ）	21
290	K-２・８層	山茶碗	小皿			3.7	底部完形	灰白色	墨書土器　大□（刀ヵ）	21
291	L-１・７層	山茶碗	碗			6.2	底部完形	灰白色	線刻土器	21

表8　曲物計測表

番号	調査区	層位	出土地点・遺構	種　別	法　量(cm)				木取り	樹　種	備　考
					外径(長さ)	内径(幅)	厚さ	器高			
1	3		旧河道(I・2)	曲物	26.6	(20.0)	—	2.7	征目	ヒノキ	樺皮
2	1	7層	不明	曲物	19.9	—	—	4.1	—	ヒノキ樺皮 ケビキ	
3	3	7層	SD302	曲物	22.9	8.3	0.9	—	征目	ス　ギ	
4	3	7層	SD302	曲物	7.4	—	1.1	—	板目	ヒノキ	
5	1		I-1攪乱	曲物	9.7		0.9	—	征目	ス　ギ	

表9　挽物計測表

番号	調査区	層位	出土地点 遺構	種　別	法　量(cm)			木取り	樹　種	備　考
					口　径	底　径	器　高			
6	1	不明	K-1	漆椀	(15.0)	9.2	4.7	板目	シオジ	内外に黒漆
7	3	9層	G-2	漆椀		—	—	板目	シオジ？	内外に黒漆
8	1	9層	I-2	漆椀	—	7.0	—	板目	シオジ	内外に黒漆
9	1	9層	SF105	漆皿	8.6	5.4	1.6	板目	ケヤキ	力外に黒漆・赤漆絵
10	1	9層	SF105	漆皿	(10.0)	(8.0)	0.9	板目	ブ　ナ	内外に黒漆
11	1	9層	G-1	漆皿	—	—	2.0	板目	ケヤキ？	内外に黒漆・赤漆絵
12	3	7層	SD302	漆椀	—	—	—	板目	ケヤキ	力外に黒漆・赤漆絵
13	1	9層	SD103	漆椀	—	—	—	—	シオジ？	内外に黒漆
14	3	7層	SD302	漆椀	—	—	—	—	カツラ	内外に黒漆
15	2	9層	SF233	漆椀	—	—	—	—	シオジ	内外に黒漆
16	2	9層	SF233	漆椀	—	—	—	—	シオジ	内外に黒漆

表10　木製品計測表

番号	調査区	層位	出土地点 遺構	種　別	法　量(cm)			木取り	樹　種	備　考
					最大長	最大幅	最大厚			
17	1		南側排水溝	箸状木製品	22.9	0.8	0.9	追柾目	ヒノキ？	
18	1		南側排水溝	箸状木製品	20.0	0.9	0.3	追柾目	ヒノキ	
19	1	7層	K-1	箸状木製品	18.7	0.7	0.8	—	ス　ギ	
20	1	7層	L-1	箸状木製品	(14.5)	0.6	0.6	—	ヒノキ	
21	1		南側排水溝	箸状木製品	(10.9)	0.7	0.5	—	ス　ギ	
22	3	7層	SD302	箸状木製品	(9.0)	0.6	0.5	—	ヒノキ	
23	3	7層	SD302	用途不明品	15.4	3.3	0.9	征　目	ヒノキ	
24	3	7層	SD302	用途不明品	11.9	3.3	3.7	板　目	ヒノキ	側面に岩化
25	3	7層	SD302	用途不明品	(9.4)	3.4	0.9	追柾目	ス　ギ	曲物底板の可能性あり

表11　砥石計測表

番号	調査区	層位	出土地点・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	色調	材質	備考
1	2	7層	不明	6.1	3.6	1.0	29.6	灰色	凝灰質粘板岩	
2	1	9層	SP40	4.6	4.3	1.1	26.4	灰色	凝灰質粘板岩	汚染
3	1	6層	J-2	3.7	3.7	0.9	14.8	灰色	凝灰質粘板岩	
4	1	5層	不明	3.2	3.1	0.6	7.6	淡黄灰色	凝灰質シルト	裏面に付着物
5	1	6層	J-2	3.1	2.4	0.5	4.7	淡黄灰色	凝灰質シルト	
6	1	6層	I-2	3.5	1.9	0.5	3.3	淡黄灰白色	凝灰質シルト岩	
7	1	7層	I-2	3.2	2.0	0.8	5.9	淡灰色	凝灰質シルト岩	汚染
8	1	8層	H-2	5.2	3.3	1.9	30.1	淡灰色	凝灰岩	
9	1	6層	H-2	9.4	3.7	1.6	73.3	灰黄褐色	凝灰岩	
10	1	7層	H-2	8.2	4.1	4.1	145.4	淡黄褐色	凝灰岩	
11	1	7層	H-2	6.2	6.6	2.3	80.3	黄褐色	凝灰岩	泥による汚染
12	3	不明	西側排水溝	8.6	7.3	6.1	253.8	淡黄褐色	凝灰岩	
13	1	7層	G-2	22.6	7.1	8.3	1761.6	灰色	中粒砂岩	
14	4	9層	D-3	14.3	10.2	6.0	1076.7	帯赤灰褐色	中粒砂岩	熱を受ける

表12　銭貨計測表

番号	名称	初鋳年代		出土位置・層位	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	書体
1	開元通寶	唐　武徳4年	621	J-1・8層	24.8	6.7	1.4	3.0	隷書
2	祥符通寶	北宋　大中祥符2年	1009	I-1・6層	22.6	5.8	0.7	2.0	楷書
3	景祐元寶	北宋　景祐元年	1034	3区　南トレンチ	25.1	5.8	1.0	1.9	篆書
4	皇宋通寶	北宋　宝元2年	1039	G-1・8層	24.5	7.2	1.1	2.8	楷書
5	熙寧元寶	北宋　熙寧元年	1068	G-2	24.6	7.1	1.0	2.4	篆書
6	熙寧元寶	北宋　熙寧元年	1068	I-1・7層	24.0	6.5	1.5	3.1	篆書
7	熙寧元寶	北宋　熙寧元年	1068	G-2・9層	24.4	6.8	1.1	3.1	篆書
8	熙寧元寶	北宋　熙寧元年	1068	SD104	24.2	6.9	1.2	2.9	篆書
9	元豊通寶	北宋　元豊元年	1078	G-2・6層	23.8	5.9	1.2	2.5	篆書
10	元祐通寶	北宋　元祐元年	1086	I-1・8層	24.3	7.0	1.3	2.8	行書
11	元祐通寶	北宋　元祐元年	1086	I-1・8層	24.4	6.6	1.0	2.8	行書
12	元祐通寶	北宋　元祐元年	1086	I-1・7層	22.8	6.9	1.3	1.9	行書
13	元符通寶	北宋　元符元年	1098	2区　排土中	24.4	6.0	1.5	3.0	行書
14	嘉祐通寶	北宋　嘉祐元年	1056	I-1・6層	24.8	7.6	1.2	3.4	篆書
15	熙寧元寶	北宋　熙寧元年	1068	I-1・6層	24.1	6.4	1.2	2.8	篆書

表13　土錘・陶錘計測表

番号	調査区	層位	出土地点・遺構	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	備考
1	3	8層	3区・不明	3.89	1.70	0.69	8.42	にぶい橙色	一部欠損
2	2	不明	2区・不明	4.30	1.47	0.40	8.52	灰白色	
3	1	8層	I-2	3.75	1.33	0.41	6.62	灰黄色	
4	1	7層	H-2	3.30	1.31	0.40	9.95	灰色	
5	1	表土	1区表土除去中	3.76	1.48	0.45	6.60	浅黄橙色	

第V章　まとめ

石成遺跡の調査と出土した資料について報告を行ってきたが、これらについて再度簡単に整理することでまとめとしたい。

1　遺構の変遷について

今回の調査で確認された遺構は２面である。しかし、遺構の検出状況からはさらに時期的な変遷があったことが窺われた。以下、その変遷をたどってみるが、第III章第３節で報告した下層については省くことにする。

最も古く形成された遺構は９層で検出した遺構群であり、これをＩ期としておきたい。今回の調査では平安時代の終りから鎌倉時代にかけての集落の一部として推定できるものであった。溝状遺構・井戸状遺構・土坑のほか数多くのピットを検出している。その中で掘立柱建物跡は３棟を復元するにとどまったが、それらは同一の方向性を持つことから整然とした配列が行われていたことが窺われる。またそれらの建物群は約40mほどの間隔をもつＳＤ104とＳＤ205という２本の溝の中に収まっており、ピット群もその中に多い傾向があることから溝によって区画された屋敷地として捉えることができよう。しかし、調査区の範囲が狭い点や後世の河道の変化により、その全貌は明らかにし得なかった。建物の規模が小さいことやＳＤ104がＨ－２グリッドで方向を変え、北側にのびる状況が部分的に捉えられたことから、屋敷地の東端に近い部分が検出されたと考えることができそうである。

畔や水路などの水田遺構を検出することはできなかったが、集落廃絶後は水田として利用されたと考えられる。杭列の検出は９層であるが、９層上面の遺構が埋没した後に打たれている杭もあり、明らかに後出のものと考えられた。区画が方形になされている部分があることや、イネのプラント・オパールも８層で8.700個／ｇと非常に高い数値を示しており、水田耕作が行われていたと考えざるを得ない。これをII期とする。

その後、７層で検出状況は疎であるが土坑・集石土坑・ピット・溝状遺構が検出されている。再度生活の痕跡が窺われ、III期とした。この中で、集石土坑は墳墓の可能性も考えられるが、その性格は明らかにすることはできなかった。またＳＤ302内では多くの石が投棄されたような状況で見つかっていることから集落域の末端に近い部分ではないかと考えた。ただし、イネのプラント・オパールのカウント数が高く、その点については疑問の残るところである。

また７層では杭列が検出されており、水田の存在を窺わせるが、ＳＤ302の埋没後にも打たれていることなどから７層の遺構よりもさらに時期が下ると考えた。調査区の東側で旧河道が流路を変えて７層を浸食している部分があり、杭列８のようにその護岸用と考えられる杭列があることから、旧流路よりも西側に水田が形成されていたと考えた。イネのプラント・オパール分析の結果も６層の下層から７層にかけて6.600 ～7.800 個／ｇという結果が出ている。IV期とする。また３・４区で検出した旧河道中の集石土坑なども当該期のものかもしれない。

今回は２面の調査となったが、遺跡の変遷としては大きく４時期あったと考えたい。遺物の出土状況は極めて悪く、包含層からの出土が大半であり、造成や水田の耕作などにより、遺物は大きく動いており、層位的にもうまく押さえられなかった点もある。さらに遺構出土の土器についても小片が多く、時期の決定が難しい状況であった。そのため、明確な時期を与えることができないが、出土した土器の年代観から一応想定しておきたい。Ｉ期は遺構から出土している灰釉陶器・山茶碗及び包含層である８層出土の土器から11世紀末から13世紀前半としておきたい。またIII期についてはＳＦ101出土している山茶

碗が13世紀後葉と考えられることからその時期が与えられるだろう。II期についてはⅠ期とII期の間とするほかはないため、一応13世紀中葉としておくが時間的に短く、疑問は多い。IV期については、調査対象外とした5層までの土層中から16世紀代末以降の志戸呂産などの陶器類が出土していることからかなり年代幅をとらざるを得ないが、一応14世紀から16世紀の間としておきたい。

2　石成遺跡の屋敷地ついて

Ⅰ期とした遺構について考えてみたい。先述したように石成遺跡は溝で区画された屋敷地として考えた。建物は1間×2間と規模が小さいことから納屋や作業小屋といった内容を想定し、屋敷の端部として考えた。石成遺跡と時期的に類似する平安時代末から鎌倉時代の集落遺跡の中で、区画溝を持つ屋敷地の調査例が遠江地方を中心に増加している。主なものとして、浜松市山の神遺跡（浜松市教育委員会 1989)、磐田市玉越遺跡（磐田市教育委員会　1986)、袋井市土橋遺跡（袋井市教育委員会　1985)、浅羽町新堀遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993）などをあげることができる。遠江地方の中世集落については松井一明氏によってモデル化が試みられ、4つのモデルに分類されている(松井　1990)。これによれば、溝によって方形に区画された屋敷地を持つ集落はモデル1・モデル2の2つが当てはまる。モデル1は区画された屋敷地が連続的に配置される集落、モデル2は溝により区画された屋敷地とそれに付随して明確な区画を持たない建物群が伴う集落である。前者には山の神遺跡、新堀遺跡、後者には土橋遺跡、玉越遺跡が該当するであろう。これらの遺跡はいずれも方形を基礎としたものであり、当時の集落が方形を基礎とした地割に基づいて区画されていたことをを窺わせるものである。石成遺跡においてはＳＤ104とＳＤ205による方形の区画を想定したが、南辺と北辺とが平行にならないことから、台形状の区画が想定できるかもしれない。先のモデルに当てはめれば、モデル2に該当する集落と考えられるが、集落内部の階層については現在断言することはできない。周辺の調査例が進み、同一地域内での遺跡の空間的な関係の把握が可能となった時に再度検討すべき課題である。

3　石成遺跡と大津御厨

石成遺跡の所在する大津谷川流域は伊勢神宮の荘園である大津御厨に比定される地域である。大津御厨については史料に乏しく、その実態は不明瞭である。建久3年（1192）の「伊勢大神宮領注文」（鎌倉遺文614号）には嘉承3年（1108）7月29日に提出された神宮領注進状に駿河国の御厨として方上御厨、大沼鮎沢御厨と共に記載されている。またこれらの御厨は永久3年（1115）6月17日宣旨により神領として安堵され、「往古神領」として伊勢神宮の領有が認められている。この「往古神領」については延久元年（1069）ないしは寛徳2年（1045）の荘園整理令以前に成立したとされている（静岡県　1994)。14世紀に成立した『神鳳抄』によれば大津御厨の範囲は「百八十町」とあり、大津谷川流域の狭隘な谷地形を考えれば、現在の島田市街地まで、その範囲は広がっていたと考えられる。

先に述べたように大津御厨は11世紀中葉には成立したと考えられるが、これとの関係で、注目されるのは石成遺跡から約500mほど下流に位置する居倉遺跡である。大津谷川の右岸に位置する城山の山裾に形成されたこの遺跡は多量の灰釉陶器、墨書土器のほか、木簡、題籤など一般的な集落に比して、質・量共に豊富な遺物が出土している。旗指古窯を背景とした物資の供給のための津的な性格が考えられている（島田市教育委員会　1987)。さらに「□大津」や「源□佃領代米五」といった木簡の出土は居倉遺跡が大津の地にあり、水田管理機能をも有していたことを窺わせる。居倉遺跡は10世紀第Ⅰ四半期には成立していたとされるが、その盛期は11世紀後半までである。この時期は大津御厨の成立期にも重複しており、大津郷さらには初期大津御厨の中心的な位置に存在していたことは間違いないであろう。このように大津御厨は、成立当初から陶器生産をその主要な産業としていたことが考えられるのである。

居倉遺跡は一時衰退し、平安時代末から鎌倉時代にかけて再度集落が営まれている。当該期の遺物については量的には少ないと報告されているだけであるが、遺物の量からは明らかに前段階と性格が異なったもののように思われる。調査面積が少なく、遺構として柱穴3基が確認されているだけなので、判断し難いが、大津御厨の中心的施設が他に移動した可能性は考えられないであろうか。大津御厨は先述したように永久3年に安堵され、久寿元年（1154　仁平4年？）の官宣旨により、駿河国内の伊勢神宮領7箇所が停止された際にも、小杉御厨とともに「依旧立不致停止也」と記載されていることなどから12世紀以降も存続したのは確実である。

石成遺跡においては年代の比定にやや困難をきたしており、時期も11世紀の終りから13世紀と幅を持って考えざるを得ない。出土遺物は東遠系の山茶碗が大半を占めるが、瀬戸・常滑・湖西・渥美といった陶器産地からの遺物も出土している。碗・皿といった日常雑器以外の陶器類は広い範囲で流通する製品によって賄われている。その他に南伊勢地方からの伊勢型鍋、西日本の瓦器椀、西北九州で生産されたと考えられる滑石製鍋、また青磁・白磁などの輸入陶磁器など全国的な流通を示す遺物が少数ながら出土している。これらは一般的な集落よりもある一面では豊かな内容を持っていると言えるのではないだろうか。これらの遺物のうち、伊勢型鍋については、神領ないし神明社に想定される地域の遺跡から出土していることから、単なる商品流通として捉えるのではなく、平安末期の神宮領の拡大の背景となった権禰宜の活動との関わりや、神宮に関わるある種の祭祀に伴ったものとする見解がある（伊藤　1992）。この見解に従うならば石成遺跡出土の伊勢型鍋はまさに御厨を背景とした存在として捉えることができるであろう。

平安時代末以降東日本においては寄進地系荘園としての伊勢神宮領が増加している。これについては武士階級と伊勢信仰との関わりや権禰宜の活動などがその要因として指摘されている（河合　1973）。大津谷川の上流の千葉山には天台宗系の山岳寺院である智満寺があり、鎌倉時代には源頼朝の庇護を受け再興されるとともに、智満寺そのものも伊勢神宮との関係を有していた（第II章参照）。澁谷氏は居倉遺跡の第II期を智満寺の再興と旗指古窯における智満寺の瓦窯の造営とに関連付け、居倉遺跡を智満寺への物資供給のための津的な性格とし、その背景として鎌倉幕府の成立を想定されている（澁谷　1987）。平成4年に調査された上反方遺跡などからも津的な性格が窺え（島田市教育委員会澁谷・嶋野両氏の御教示による）、大津谷川流域に位置する遺跡からは水運を利用した津という性格は抜き難い。しかし、その捉え方は智満寺といった一つの寺院との関係としてだけではなく、神宮領としての大津御厨という性格をも考えていかなければならないのである。

石成遺跡が大津御厨の中心的施設であったとは言えないかもしれない。しかし、溝による方形区画といった中世的な屋敷地の在り方や出土遺物などから判断すれば、大津御厨に関連する集落であったことは十分に考えられるであろう。静岡県内における御厨推定地は河川流域にあるものが多く、石成遺跡も立地から大津谷川を利用した水運に関連した集落としての性格を見出だすことができる。さらに広域流通を示す遺物が出土していることは、それらを単なる商品流通として捉えるだけではなく、年貢の運搬といった物理的な側面と、神宮信仰といった精神的な側面をも含めた大津御厨と伊勢地域との密接な関係からもたらされたものとして想定することも、あながち間違いではないと考える。

4　おわりに

今回の調査では堤防工事との兼ね合いで変則的な調査となり、遺跡全体を十分に把握することができなかった。鎌倉期を中心とする区画溝を持つ屋敷地としての性格を考えることはできたが、掘立柱建物跡を3棟復元できただけで、調査における不手際を痛感しているところである。

大津谷川流域はすでに述べたように古くから開発が進んだ場所であり、島田市域における先進地で

あったことは想像に難くない。それは大津谷川・大井川といった河川を利用した水上交通による物資の交易が盛んに行われたことがその背景にあったのであろう。特に平安期における居倉遺跡、鎌倉期における石成遺跡・上反方遺跡などはその実像に迫るものであろう。今回は時間的な制約もあり、条里型地割については検討することができなかったが、畿内においては10世紀後葉以降、条里型地割と建物群の方位が揃ってくることが明らかにされている(広瀬　1986)。石成遺跡で認められた区画溝や建物の方位と大津地域における条里型地割の方位の関係についても、さらに検討していかなければならないであろう。今後も大津谷川流域においては発掘調査が行われるようであり、資料が蓄積されていくことに期待したい。

現地調査ならびに本書の作成にあたっては、多くの方々の御指導、御協力をいただいた。末尾ながらこの場をかりて深く感謝申し上げたい。

引用・参考文献

秋山高志他編　1991　『図録　農民生活史辞典（普及版）』　柏書房

足立順司　1990　「中世遠江における埋蔵銭」　『研究紀要』III　静岡県埋蔵文化財調査研究所

飯塚武司　1991　「鉄鏃－その時代性と地域性－」　『研究論集』X　東京都埋蔵文化財センター

伊藤裕偉　1992　「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」　『研究紀要』第１号　三重県埋蔵文化財センター

入田整三　1930　「発掘銭に就ての考察」　『考古学雑誌』20－12　日本考古学会

磐田市教育委員会　1986　『玉腰遺跡』

大友義助　1985　「小国川のかま漁法」　『日本民俗文化体系13　技術と民俗（上）』　小学館

木戸雅寿　1993　「石鍋の生産と流通について」　『中世土器の基礎研究』IX　中世土器研究会

静岡県　1994　『静岡県史　通史編１』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993　『新堀遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993　『御殿川流域遺跡群Ⅰ』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『瀬名遺跡III（遺物編Ⅰ）』

島田市教育委員会　1983　『旗指古窯跡』

島田市教育委員会　1987　『居倉遺跡』

澁谷昌彦　1987　「第７章　まとめ」　『居倉遺跡』　島田市教育委員会

日本常民文化研究所　1957　『日本水産史』　角川書店

奈良国立文化財研究所　1984　『木器集成図録　近畿古代篇』

新田　洋　1985　「平安時代～中世における煮炊用具－伊勢型鍋－に関する若干の覚書き」　『三重考古学研究』１　三重考古学談話会

函館博物館　1970　『函館志海苔古銭』

浜松市教育委員会　1989　『山の神遺跡』

富士川町教育委員会　1991　『浅間林』

日比野丈夫　1975　「古銭」　『新版考古学講座　9　特論（中）』　雄山閣出版

広瀬和雄　1986　「中世への胎動」　『日本考古学』６　岩波書店

袋井市教育委員会　1985　『土橋遺跡　－基礎資料編－』

松井一明　1990　「第３章　考察」　『大門遺跡Ⅴ』　袋井市教育委員会

松井一明　1994　「遠江における山茶碗生産について」　『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会

横田賢次郎・森田　勉　1978　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」　『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館

付　編１

石成遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

１．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、石成遺跡における稲作跡の探査を試みたものである。

２．試料

調査地点は、試掘坑№２と試掘坑№３の２地点である。試料は、試掘坑№２では13層、14層、15層、16層、17層、試掘坑№３では３・４・５対応層、6a層、6b層、７層の上下、８層、19層、21層、22・23対応層の上下、24層の上下、25層の上下において採取された。図１に、土層断面図と分析資料の採取箇所を示す。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105 ℃・24時間）

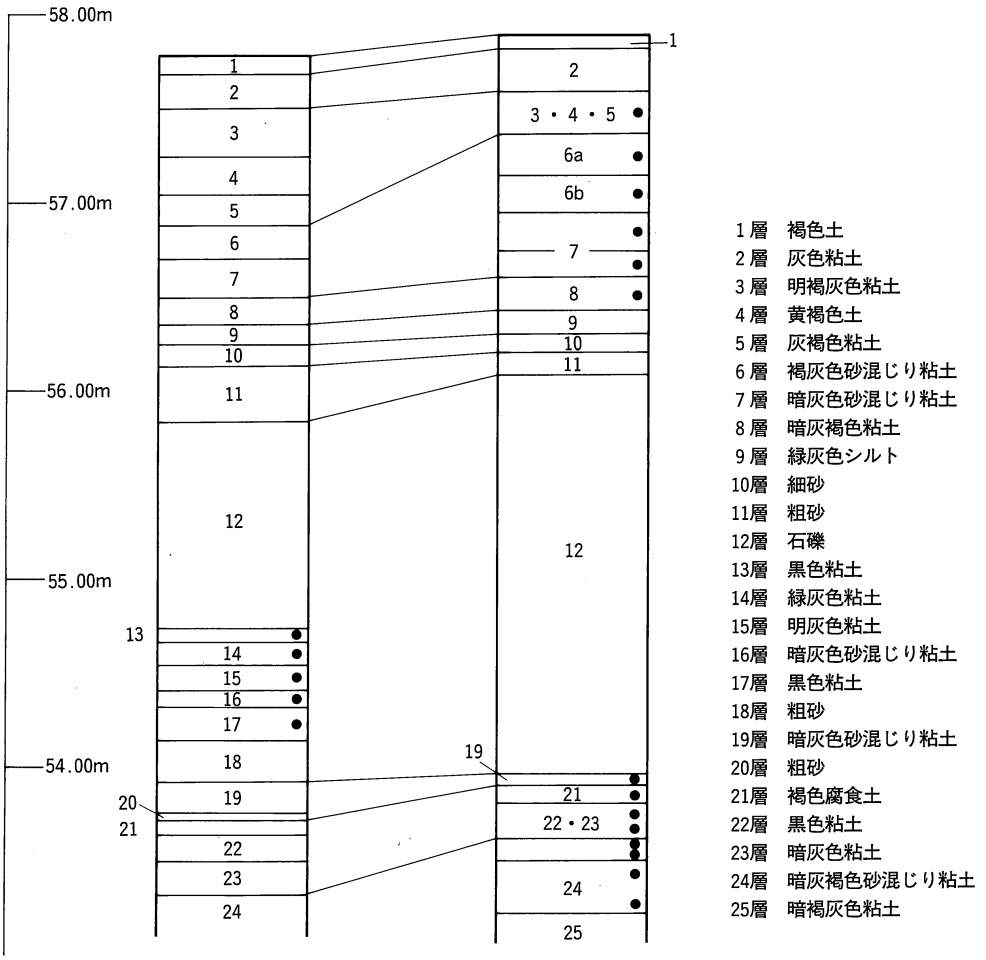


図１　土層断面図と分析試料の採取箇所

2）試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm，約0.02ｇ）
　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量
3）電気炉灰化法による脱有機物処理
4）超音波による分散（300 W・42KHz ・10分間）
5）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
6）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡で行った。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な５分類群に限定した。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を資料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10-5ｇを乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算計数は、イネ

表１　プラント・オパール分析結果

島田市、石成遺跡

試掘坑No.２地点

試料名	仮比重	イネ 個／g	（橙総量） t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
13	1.0	4,000	3.30	3,000	3,000	0	0
14	1.00	9,200	14.28	800	4,200	0	0
15	1.00	9,400	14.57	0	6,000	0	0
16	1.00	0	0.00	800	800	0	0
17	1.00	0	0.00	900	900	0	0

試掘坑No.３地点

試料名	仮比重	イネ 個／g	（橙総量） t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
(3・4・5)	1.00	2,500	4.28	0	1,700	800	0
6a—1	1.00	2,400	4.02	0	5,600	800	0
6b—2	1.00	6,600	13.70	0	4,900	800	0
(7)-１	1.00	6,600	13.70	0	4,900	800	0
(7)-２	1.00	7,800	9.67	1,700	6,900	1,700	0
8	1.00	8,700	16.20	0	7,800	800	0
19	1.00	0	0.00	0	2,800	0	0
21	1.00	0	0.00	0	0	0	0
(22・23)-1	1.00	0	0.00	0	0	0	0
(22・23)-2	1.00	0	0.00	2,600	800	0	0
24—1	1.00	0	0.00	0	800	0	0
24—２	1.00	0	0.00	0	900	0	0
25—１	1.00	0	0.00	800	1,600	0	0
25—２	1.00	0	0.00	0	1,900	0	0

は赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原，1987）。

4．分析結果

試料１ｇ中に含まれる各植物のプラント・オパール個数ならびに面積10ａあたりに換算した稲籾生産総量を表１に示す。なお、イネに関してはダイアグラムにして図２に示した。また、各植物の推定生産量と変遷について図３に示した。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示した。

（１）試掘坑№２地点

採取された試料すべてについて分析を行った。その結果、イネは13層、14層、15層の３層において検出された。このうち、14層と15層では高い密度である。ヨシ属は15層を除く各層で検出されたが、密度はいずれも低い値である。タケ亜科はすべての試料から検出された。このうち15層では比較的高い密度である。ウシクサ族とキビ族はいずれの試料からも検出されなかった。

（２）試掘坑№３地点

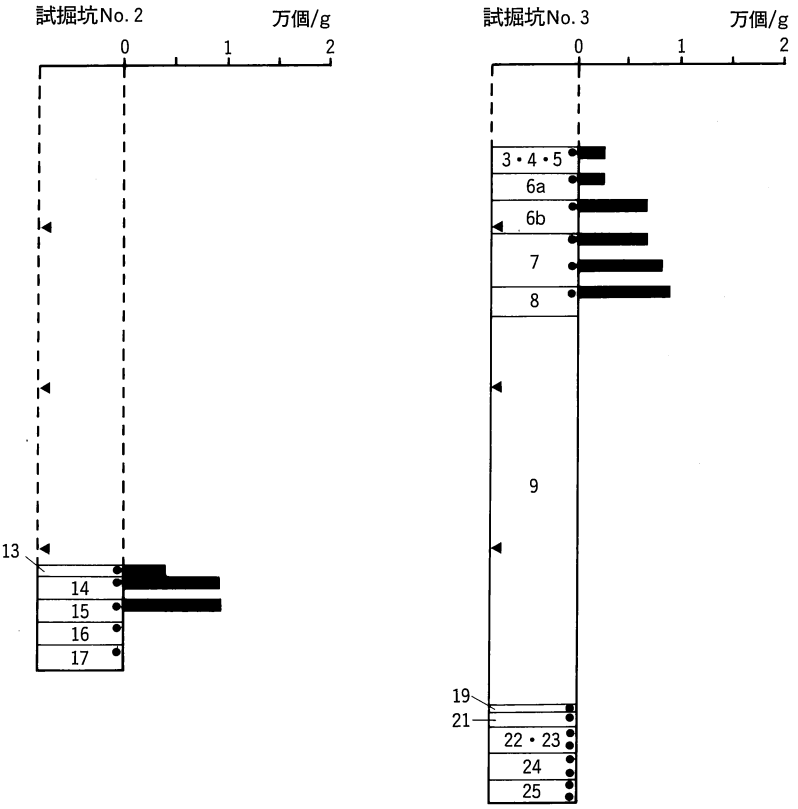
採取された試料すべてについて分析を行った。その結果、イネは３・４・５層対応、6a層、6b層、７層、８層において検出された。このうち、6a層、6b層、７層、８層では高い密度である。ヨシ属は、6a層、７層、22・23対応層下部、25層上部において検出されたがいずれも低密度である。タケ亜科は22・23対応層上部を除く各試料から検出された。密度は７層と８層でやや高いものの、他は低い値である。ウシクサ族は３・４・５対応層、6b層、７層、８層において検出されたが密度はいずれも低い値である。キビ族は検出されなかった。

5．考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものになる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

（１）試掘坑№２地点

本地点では、13層、14層、15層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの土層で稲作が行われていた



（注）◀印は100cmごとのスケール　●印は分析試料の採取箇所

図２　イネのプラント・オパールの検出状況

可能性が考えられる。このうち、14層と15層ではプラント・オパール密度が10,000個／g弱と非常に高い値である。したがって、これらの層において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、13層では密度は4,000個／gとやや低いものの、直上を砂礫で覆われていることから、上層から後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。したがって、同層でも稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

（2）試掘坑№3地点

本地点では、3・4・5対応層、6a層、6b層、7層、8層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、6a層、6b層、7層、8層の各層ではプラント・オパール密度が5,000個／g以上と高い値であり、それぞれピークが認められた。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

6．まとめ

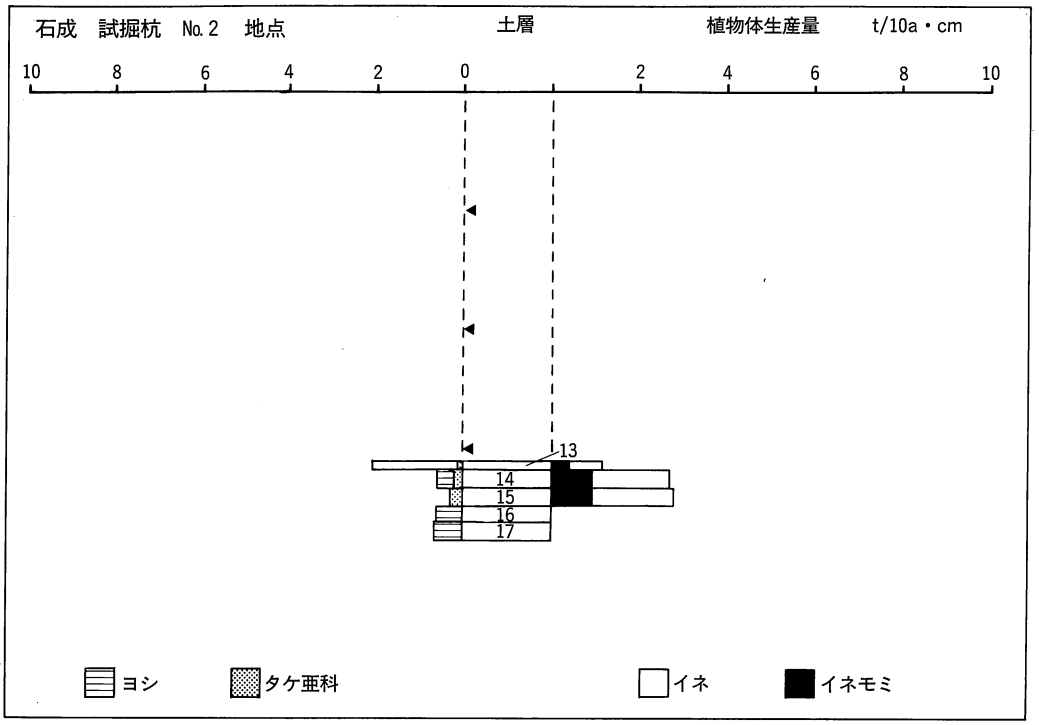
石成遺跡の試掘坑№1、№2地点においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、試掘坑№2の14層、15層と試掘坑№3の6a層、6b層、7層、8層においてはイネのプラント・オパールが多量に検出されたことにより、これらの層で稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、試掘坑№2の13層でも稲作が行われていた可能性が推定された。

【参考文献】

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告，10：281-298.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17：73-85.



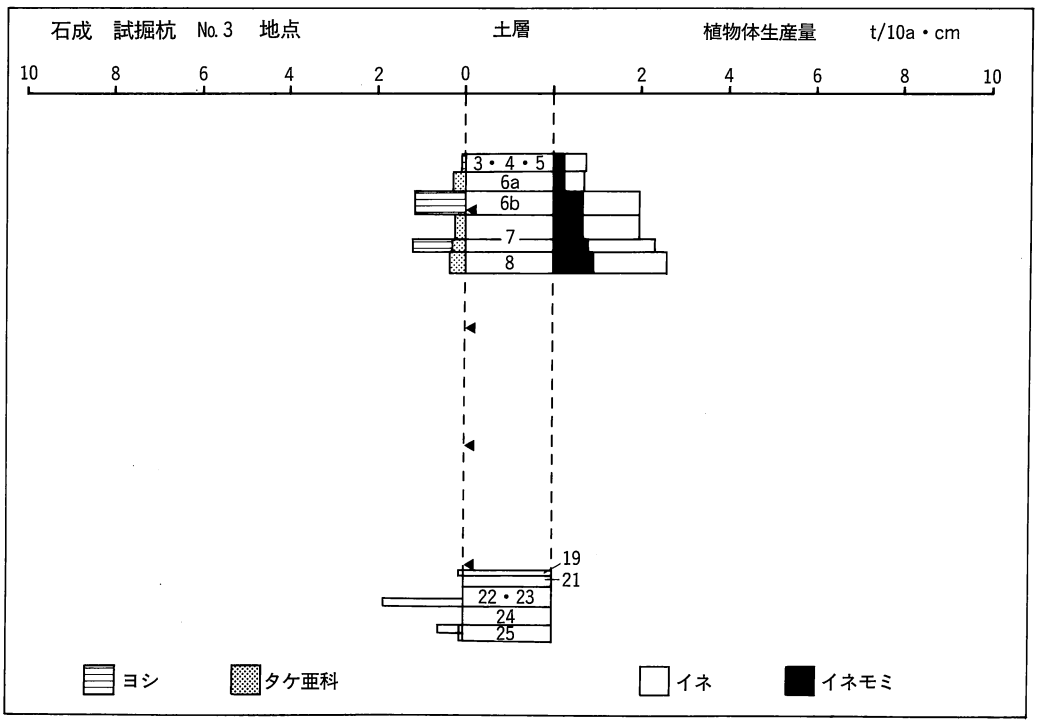
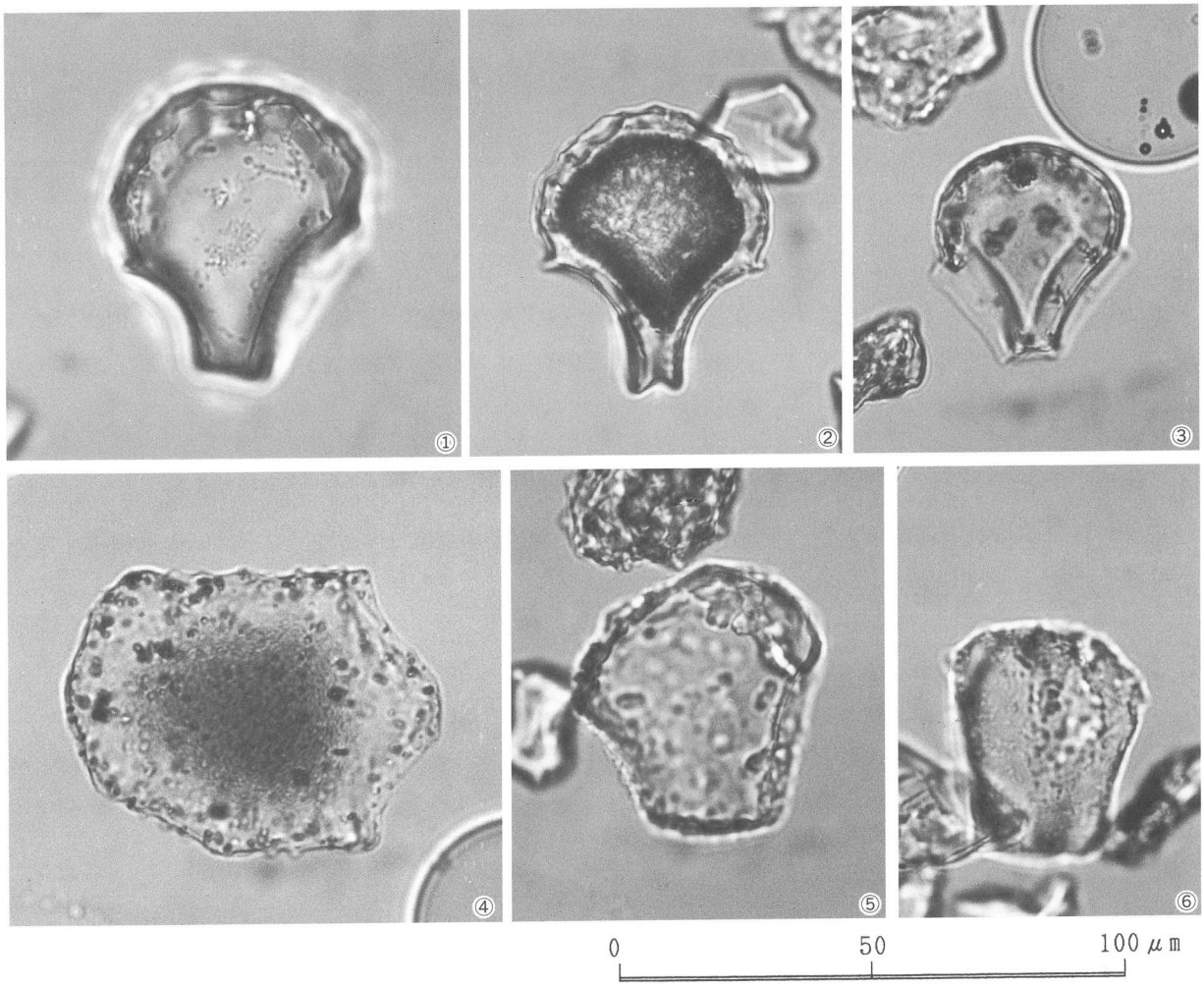


図3　おもな植物の推定生産量と変遷



植物珪酸（プラント・オパール）の顕微鏡写真

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真
（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	No. 3	(7)-1
2	イネ	No. 3	8
3	イネ	No. 2	15
4	ヨシ属	No. 2	13
5	タケ亜科	No. 3	(7)-2
6	タケ亜科	No. 2	14

付　編2

石成遺跡出土木製品の樹種同定

古環境研究所

1．試料と方法

試料は、木製品などから作成された木材切片のプレパラート（横断、接線、放射の各断面）42点であった。これらの試料を生物顕微鏡によって60～600倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって同定を行った。

2．結果

42点の試料から以下に挙げた12の樹種が同定された。同定結果を表１に示し、以下に同定の根拠となった特徴を示す。

1．スギ　*Cryptomeria japonica* D. Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列で、10細胞高以下のものが多い。

以上の形質によりスギに同定される。スギは本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径２mに達する。材は軽軟であるが強靱で、建築・家具・桶樽・土木・船舶・下駄・彫刻など広く用いられる。

2．ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞がみられる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質からヒノキと同定される。ヒノキは福島県以南の本州・四国・九州・屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽・耐湿性も高い。建築・家具・器具・漆器・土木・彫刻など広く用いられる。

なお、横断面・放射断面・接線断面共にヒノキの特徴を示し、放射断面の早材部において分野壁孔の型、数共に不明瞭なものをヒノキ？と示した。

3．ブナ　*Fagus crenata* Blume　ブナ科

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは２～３個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、２～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質からブナに同定される。ブナは北海道南部・本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密、靱性あり、保存性低い。家具・器具・土木・船舶・合板などに用いられる。

4．**クリ**　*Castanea crenata* Sieb.　et Zucc.　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からクリに同定される。クリは北海道の西南部・本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cm程度であるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、建築・家具・器具・土木・船舶・彫刻・薪炭・椎茸ほだ木になど広く用いられる。

5．**ツブラジイ**　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織からなる。

以上の形質からツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州・四国・九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽・保存性低く、建築・家具・器具・船舶・薪炭などに用いられる。

6．**スダジイ**　*Castanopsis sieboldii* Hatusima　ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からスダジイに同定される。なおスダジイとツブラジイは集合放射組織の有無で同定できるが、広範囲の観察ができなかった試料はツブラジイの可能性もある。スダジイは関東以南の本州・四国・九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽・保存性やや低く、建築・器具・船舶・下駄・薪炭などに用いられる。

7．**ケヤキ**　*Zelkova serrata* Makino　ニレ科

横断面：年輪のはじめに中型の道管が１～２列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下端のみ方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下端の細胞はしばしば大きくふくらんでいる。幅は１

～7細胞幅である。

以上の形質からケヤキに同定される。ケヤキは本州・四国・九州に分布する。落葉の高木で、高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築・家具・器具・船・土木などに用いられる。

なお、横断面・放射断面共にケヤキの特徴を示すが、接線断面のサンプルが無いので、ケヤキに同定するに至らなかったものはケヤキ？と示した。

8. **クスノキ**　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、平等に分布する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。この中に油を含んだ特に大型の柔細胞が見られる。これは油細胞と呼ばれる異形細胞である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下端のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下端の直立細胞のなかには、まれに大きく膨れ上がった油細胞がみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは関東以西の本州・四国・九州に分布する。常緑高木で通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mをこえる巨大なものもある。堅硬で耐朽性が強い材で、保存性も高く芳香があり、建築・器具・楽器・船・彫刻・ろくろ細工などに用いられる。

9. **タブノキ**　*Machilus Thunbergii* Sieb.　et Zucc.　クスノキ科

横断面：小型から中型で厚壁の道管が、単独あるいは2個放射方向に複合して、まばらに散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織は上下端のみ直立細胞で、それ以外は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、上下端の1～2細胞が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは本州（暖地）・四国・九州・琉球に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽・保存性中庸で、建築・家具・器具・土木・船舶・彫刻・薪炭などに用いられる。

10. **サカキ**　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して均等に分布する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く、50を越える。放射組織は平伏細胞・方形細胞・直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州・四国・九州・琉球に分布する。常緑の高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靱、堅硬で、建築・器具・船舶・ろくろ細工・薪炭などに用いられる。

11. **カツラ**　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb.　et Zucc.　カツラ科

横断面：小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材で

ある。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性である。道管内にチロースが多数存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、２細胞幅である。

以上の形質よりカツラに同定される。カツラは北海道・本州・四国・九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径２mに達する。材は軽軟で靱性であり加工しやすく、建築・器具・家具・船舶・ろくろ細工などに用いられる。

12．**シオジ**　*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.　モクセイ科

横断面：年輪のはじめに、大型の道管が、１～２列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型で丸い厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、１～３細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定され、トネリコ属にはシオジ・ヤチダモ・アオダモ・トネリコなどがあるが、本試料は道管径の大きさからシオジかヤチダモである。ヤチダモは分布域が北海道・中部以北の本州の温帯・亜寒帯であり、シオジは関東以西の本州・四国・熊本県以北の温帯に分布するため、シオジとした。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmである。材は建築・合板・家具・器具・運動具・楽器・薪炭などに用いられる。

なお、シオジと同定するに至らなかったものはシオジ？として示した。

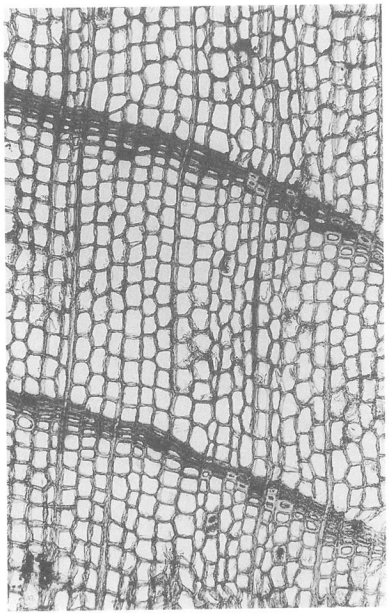
参考文献

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織．地球社，p.20-100

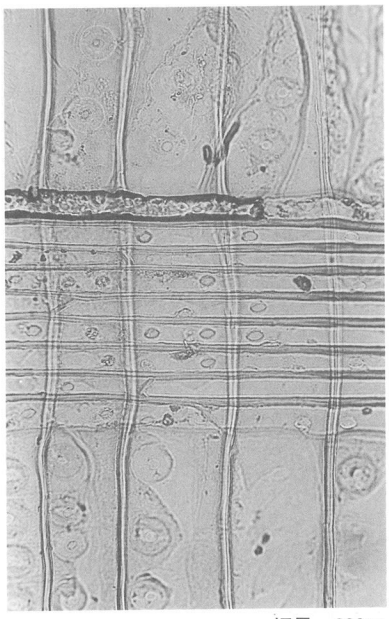
表１　樹種同定結果

遺物No.	標本No.	遺物名	登録No.	樹	種（和名／学名）
1	3477	側板（折）	W-240	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
1	3478	折　敷	W-244	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
2	3489	曲物側板	W-230	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
3	3479	底　板	W-245	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
4	3469	曲物底蓋板	W-247	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
5	3467	曲物底蓋板	W-229	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
6	3473	漆　椀	W-221	シオジ	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.
7	3490	漆　椀	W-250	シオジ？	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.?
8	3480	漆　椀	W-238	シオジ	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.
9	3471	漆　椀	W-232	ケヤキ	*Zelkova serrata* Makino
10	3470	漆　皿	W-231	ブナ	*Fagus crenata* Blume
11	3472	漆　椀	W-228	ケヤキ？	*Zelkova serrata* Makino?
12	3474	漆　椀	W-243	ケヤキ	*Zelkova serrata* Makino
13	3482	漆　椀	W-224	シオジ？	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.?
14	3486	漆　片	W-235	カツラ	*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.
15	3484	漆　片	W-233	シオジ	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.
16	3485	漆　片	W-234	シオジ	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.
17	3488	箸状木製品	W-225	ヒノキ？	*Chamaecyparis obtusa* Endl.?
18	3475	箸状木製品	W-226	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
19	3476	箸状木製品	W-222	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
20	3481	箸状木製品	W-227	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
21	3483	箸状木製品	W-119	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
22	3487	箸状木製品	W-237	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
23	3466	用途不明品	W-249	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
24	3465	用途不明品	W-246	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endl.
25	3468	用途不明品	W-248	スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don
26	3129	柱　根	W-209	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
27	3135	柱　根	W-215	タブノキ	*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.
28	3130	柱　根	W-210	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
29	3138	柱　根	W-219	クスノキ	*Cinnamomum camphora* Presl
30	3143	柱　根	W-2004	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
31	3134	柱　根	W-214	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
32	3132	柱　根	W-212	シオジ	*Fraxinus spaethiana* Lingelsh.
33	3147	柱　根	W-2023	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
34	3735	柱　根	W-2024	カツラ	*Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.
35	3736	柱　根	W-3005	サカキ	*Cleyera japonica* Thunb.
36	3737	柱　根	W-253	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
37	3738	柱　根	W-3004	クリ	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
38	3739	柱　根	W-251	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
39	3145	柱　根	W-2009	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* Schottky
40	3124	柱　根	W-144	スダジイ	*Castanopsis sieboldii* Hatusima
41	3148	柱　根	W-2025	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa* Endlu

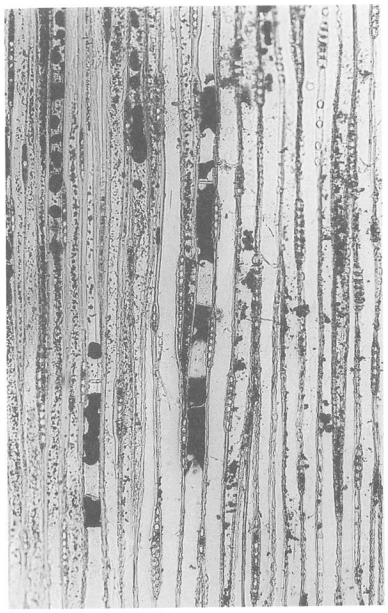
石成遺跡　出土木材の顕微鏡写真 1



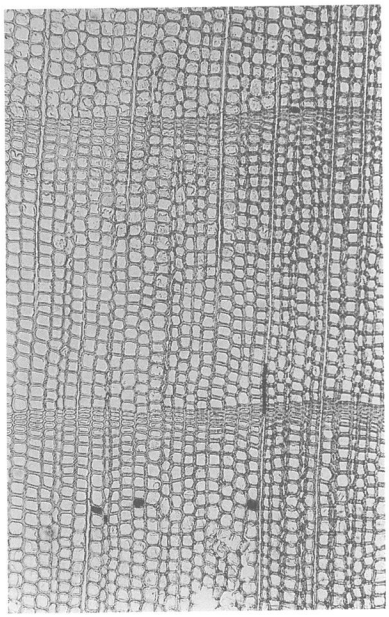
標本　No.3467スギ　　木口　50×



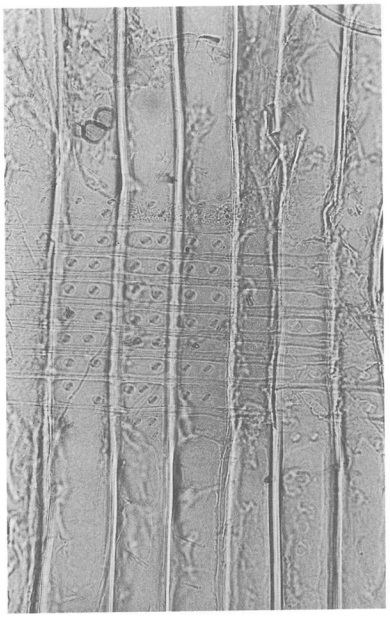
柾目　200×



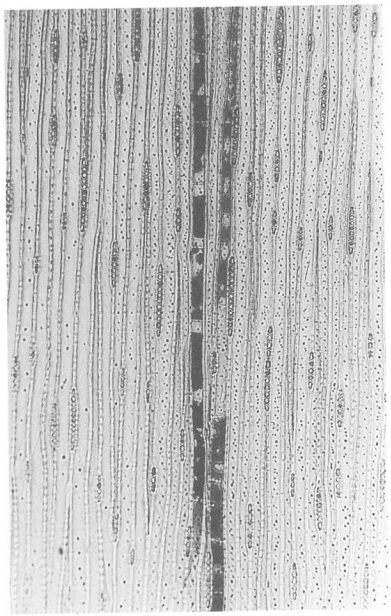
板目　50×



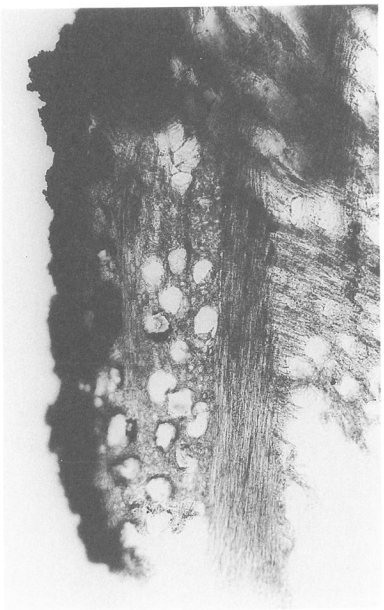
標本　No.3148ヒノキ　　木口　50×



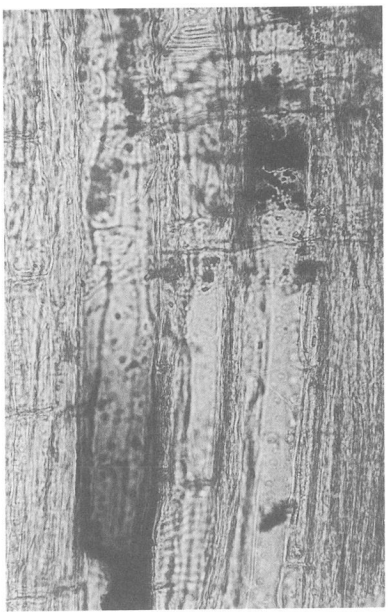
柾目　200×



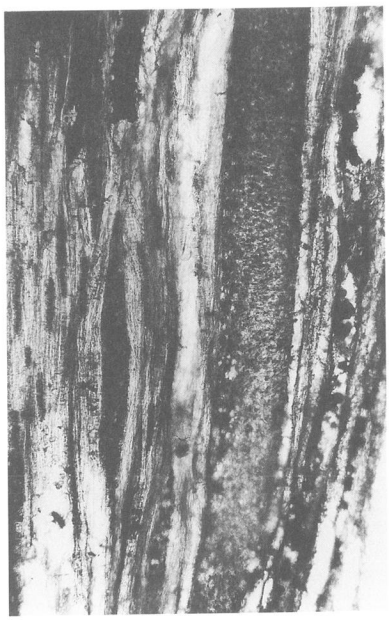
板目　50×



標本　No.3470ブナ　　木口　50×

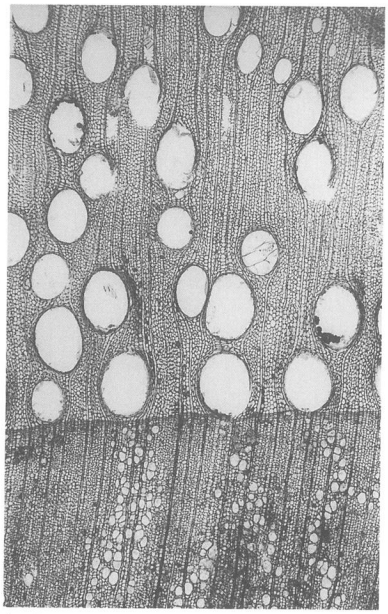


柾目　200×

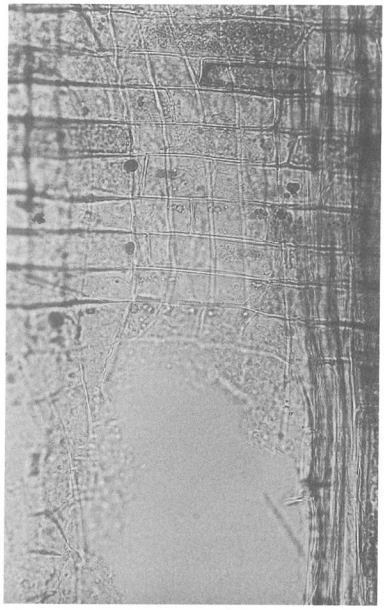


板目　50×

石成遺跡　出土木材の顕微鏡写真 2

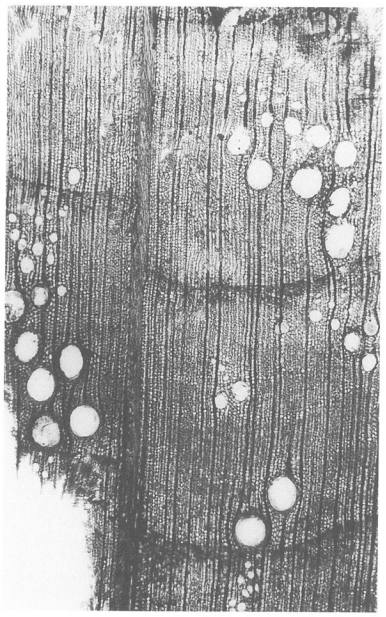


標本No.3130クリ　木目　20×

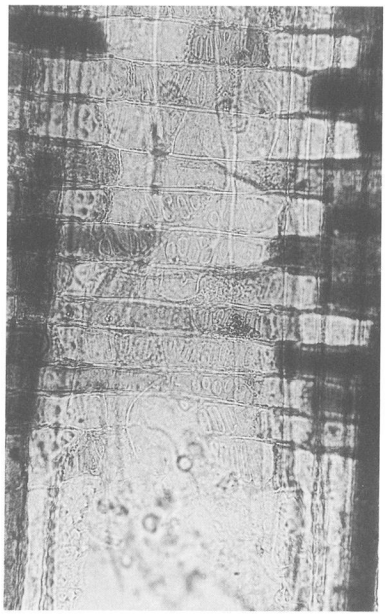


柾目　200×

板目　50×

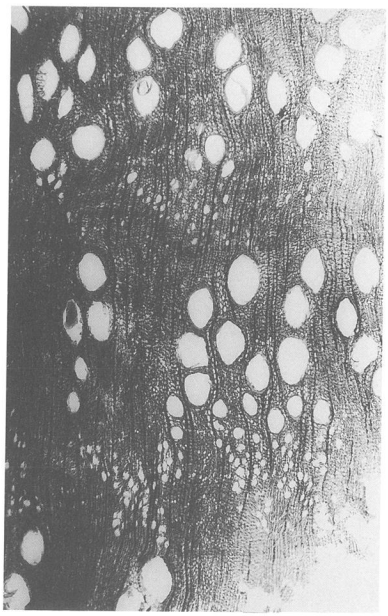


標本No.3145ツブラジイ　木目　20×

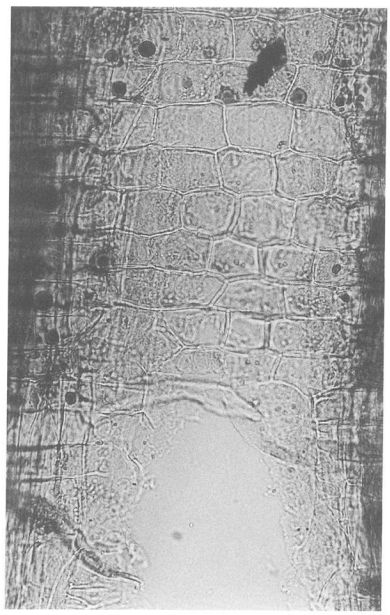


柾目　200×

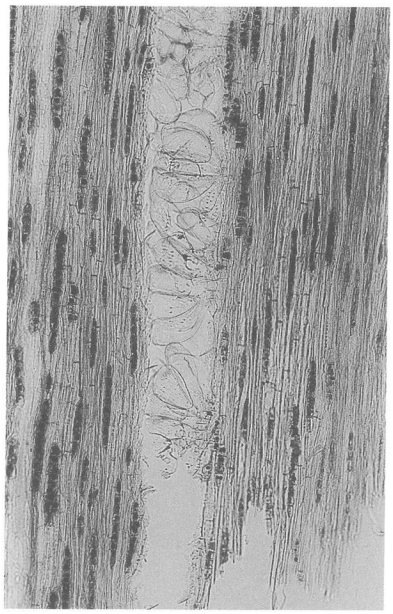
板目　50×



標本No.3124スダジイ　木目　20×

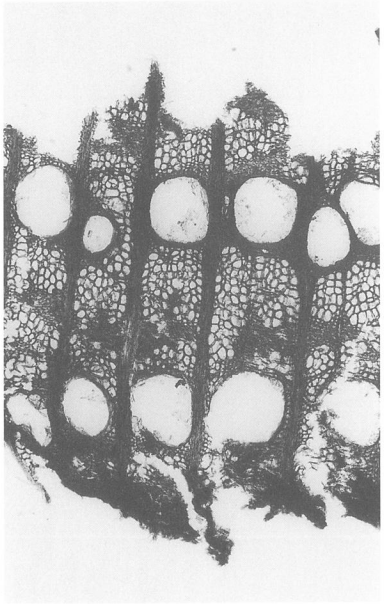


柾目　200×

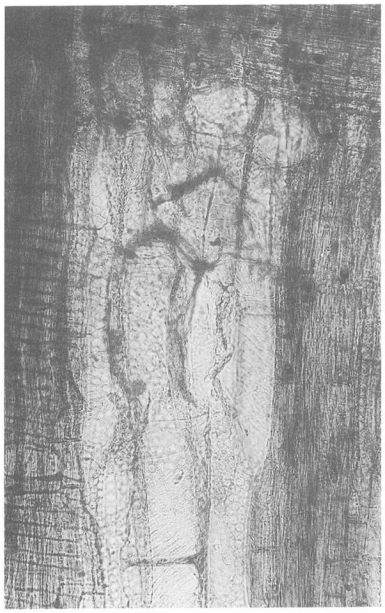


板目　50×

石成遺跡　出土木材の顕微鏡写真 3

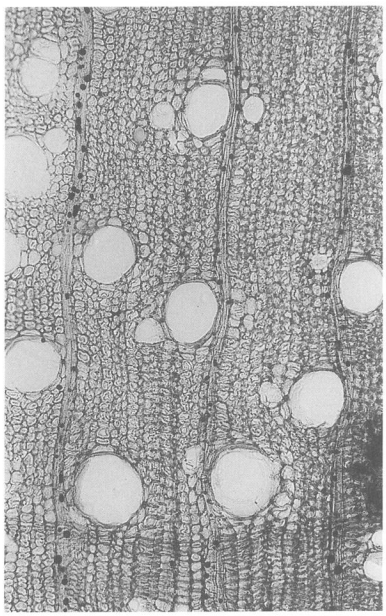


標本No.3474ケヤキ　木口　20×

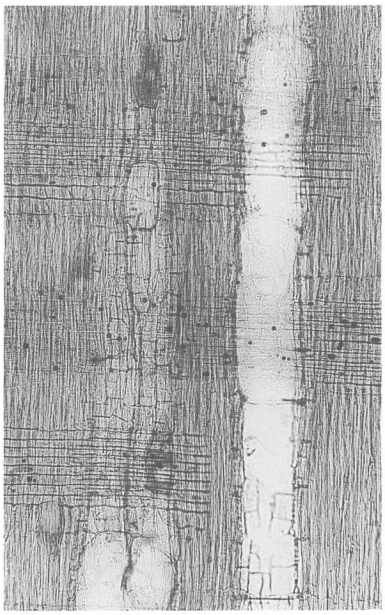


柾目　200×

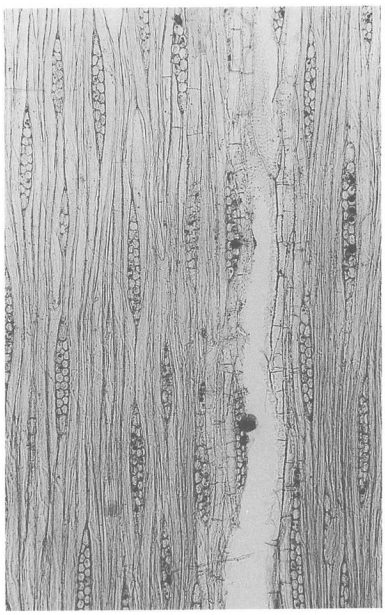
板目　50×



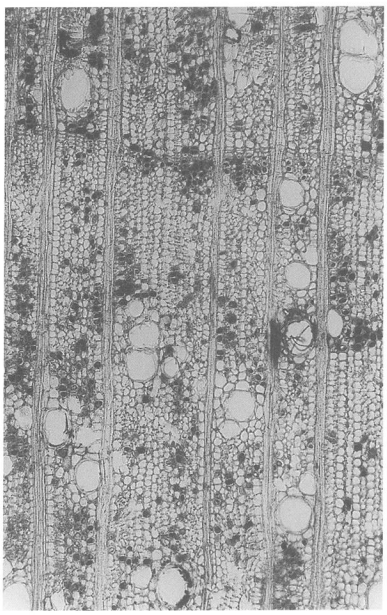
標本No.3138クスノキ　木口　50×



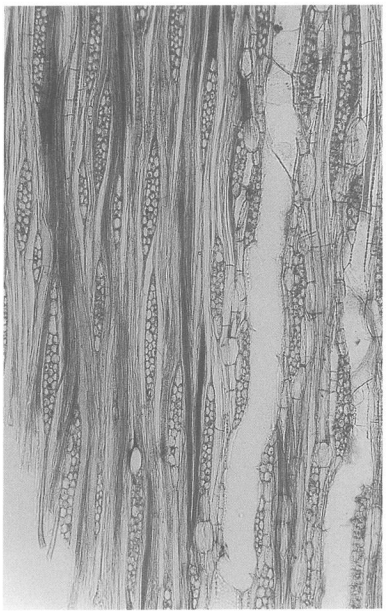
柾目　50×



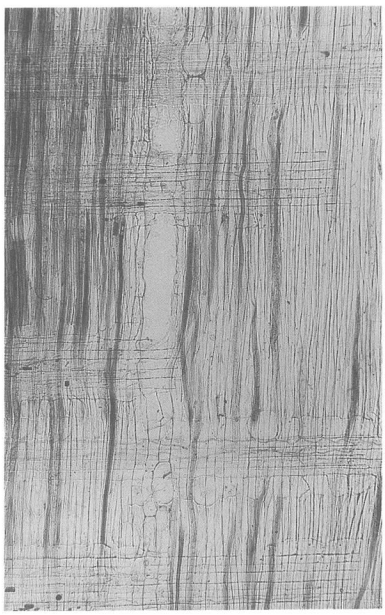
板目50×



標本No.3135タブノキ　木口　50×

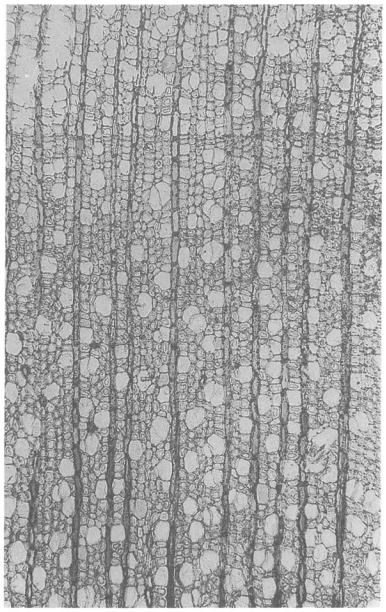


柾目　50×

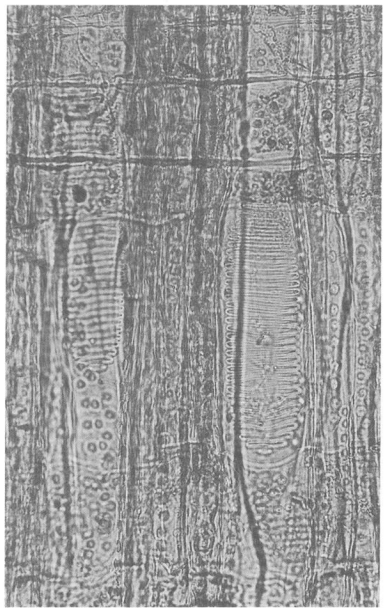


板目　50×

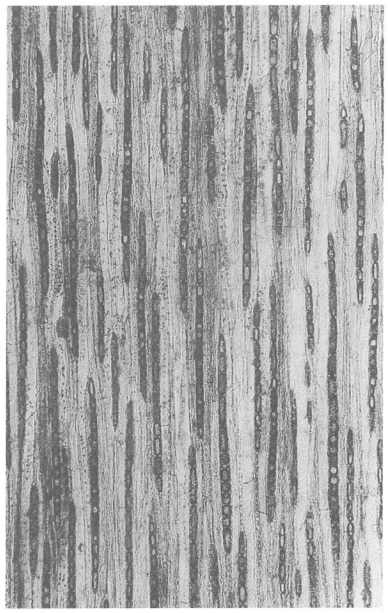
石成遺跡　出土木材の顕微鏡写真 4



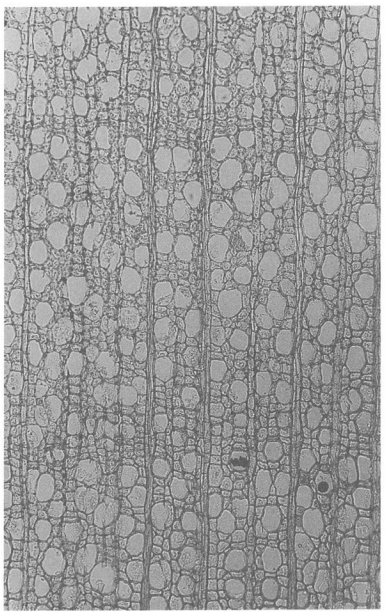
標本No.3736リカキ　木口　50×



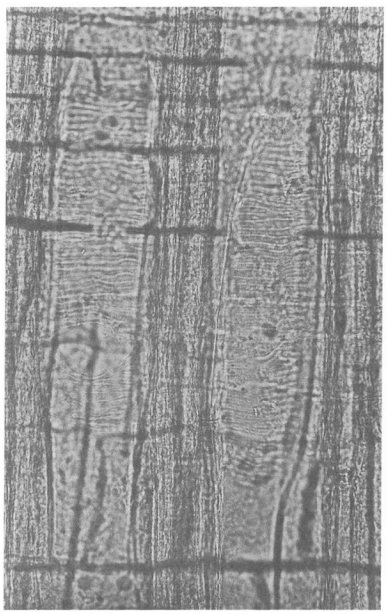
柾目　200×



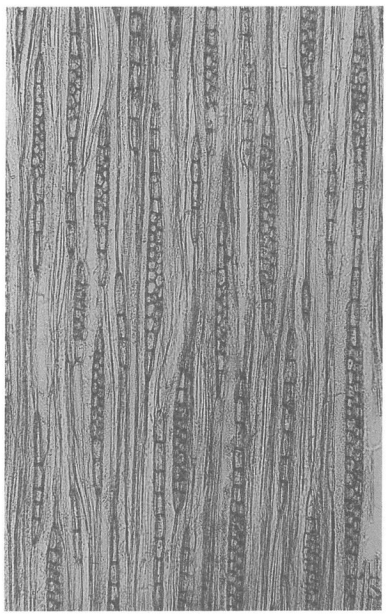
板目　50×



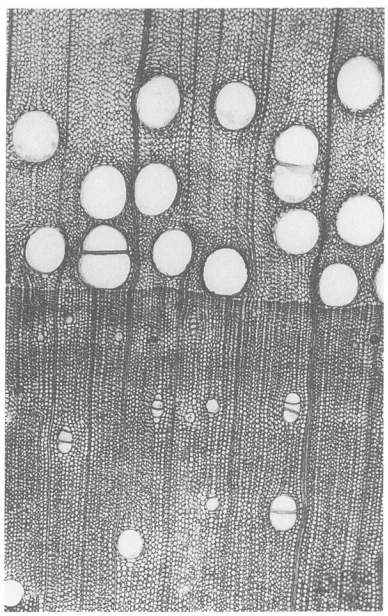
標本No.3735カツラ　木口　50×



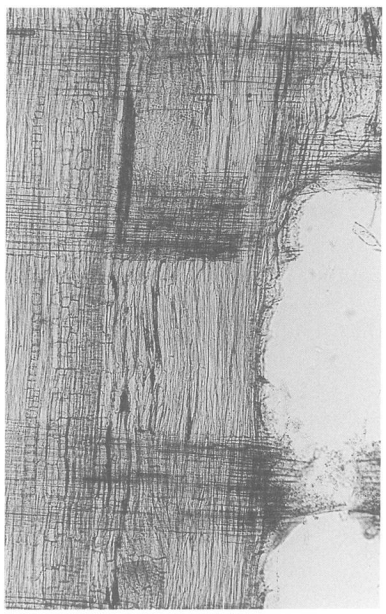
柾目　200×



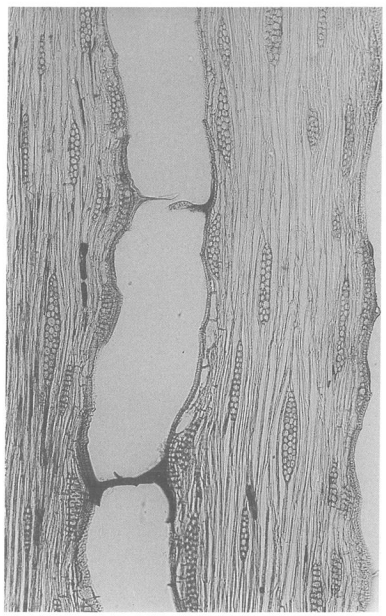
板目　50×



標本No.3132　シオジ　木口　20×



柾目　50×



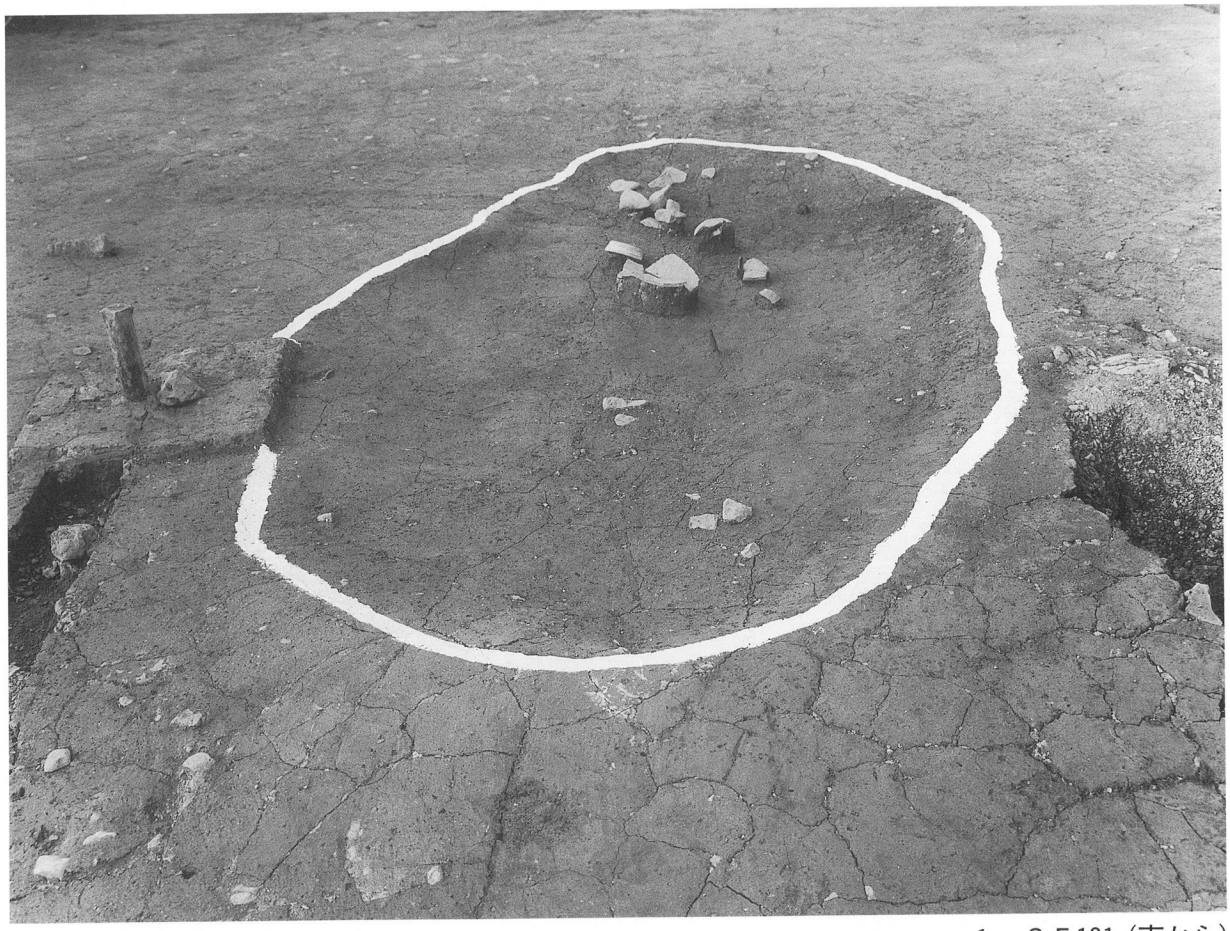
板目　50×

図　　版

遺跡周辺環境（空中写真）

1　遺跡遠景（西から）

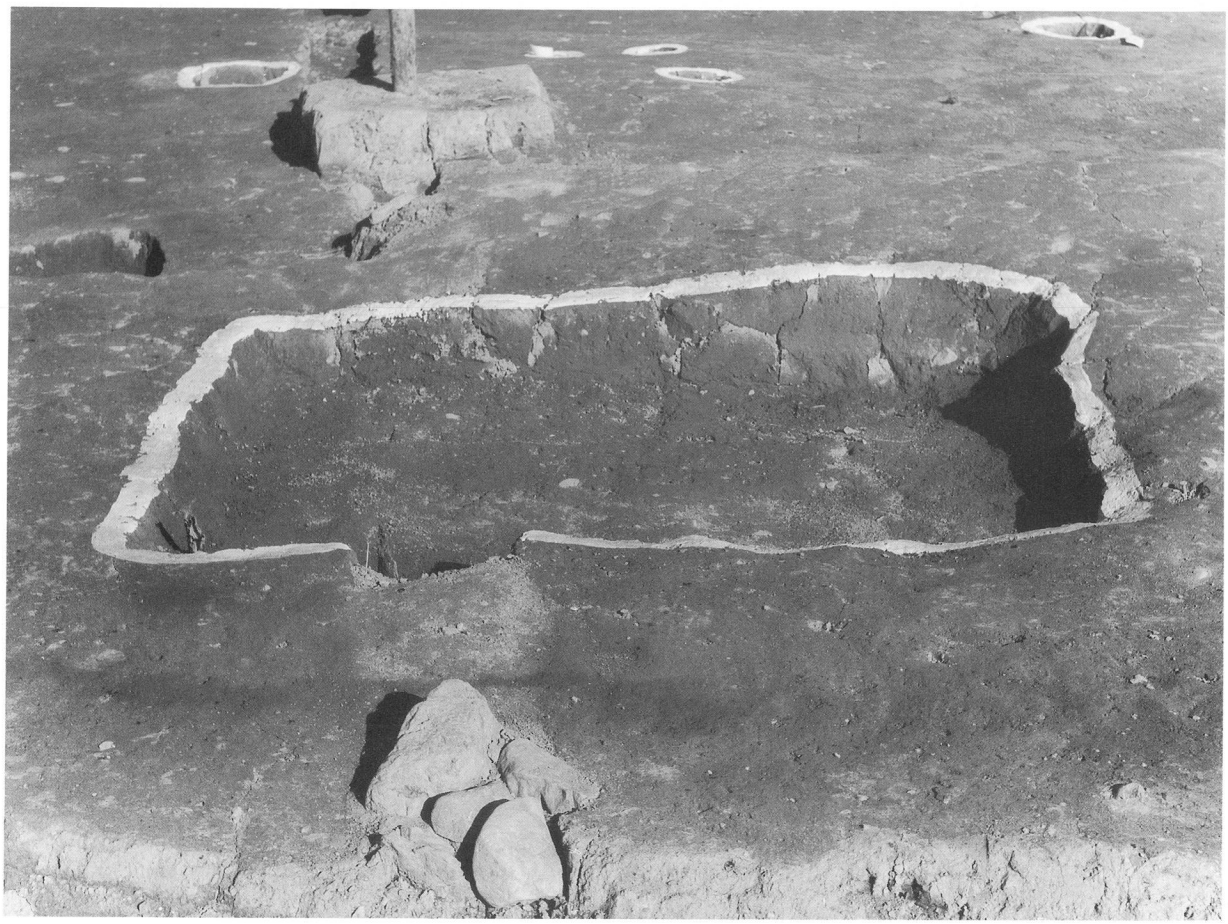
2　調査前状況（南から）



1　ＳＦ101（南から）

2　ＳＦ101内遺物出土状況（西から）

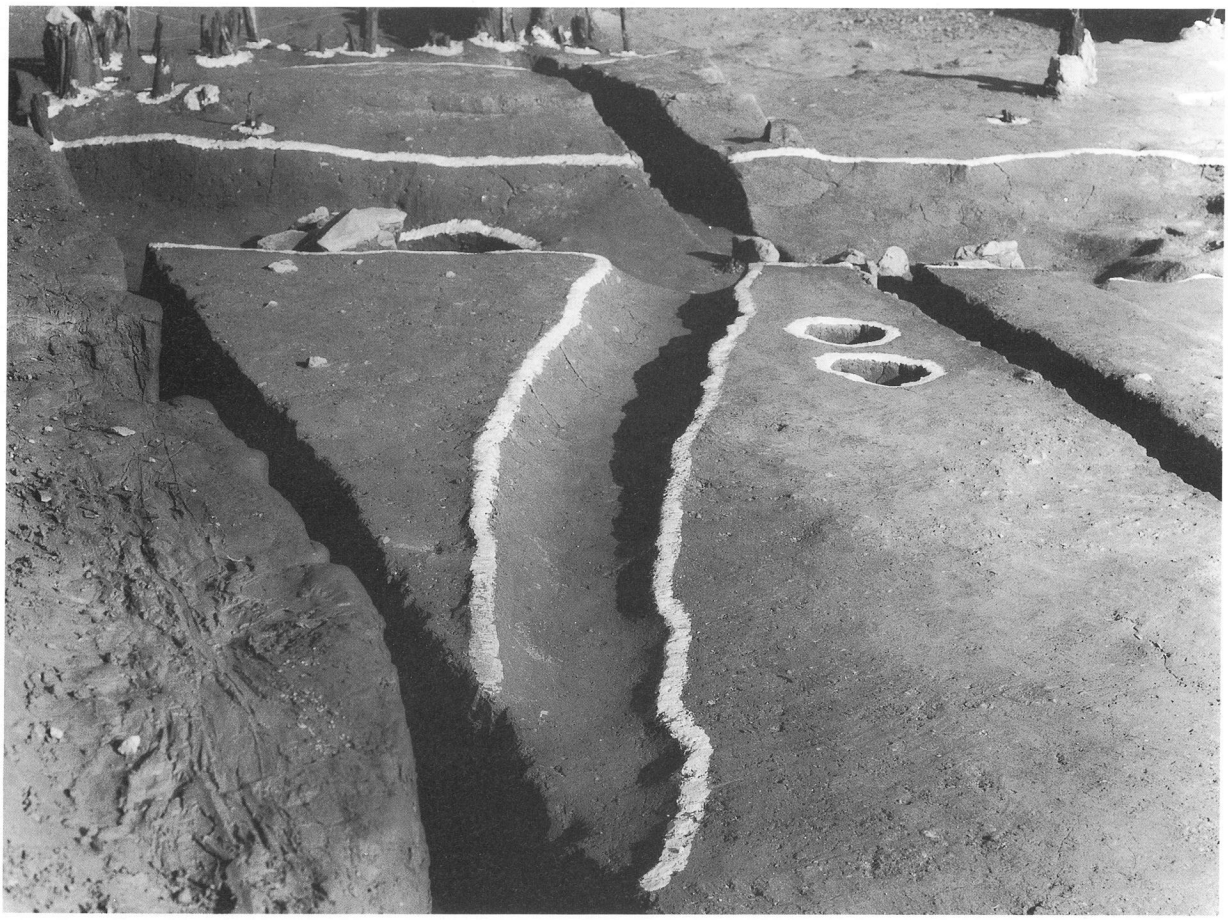
1　ＳＸ102（南から）



2　ＳＸ102完掘状況（南から）

1　1区遺構全景（南から）

2　ＳＤ104（西から）

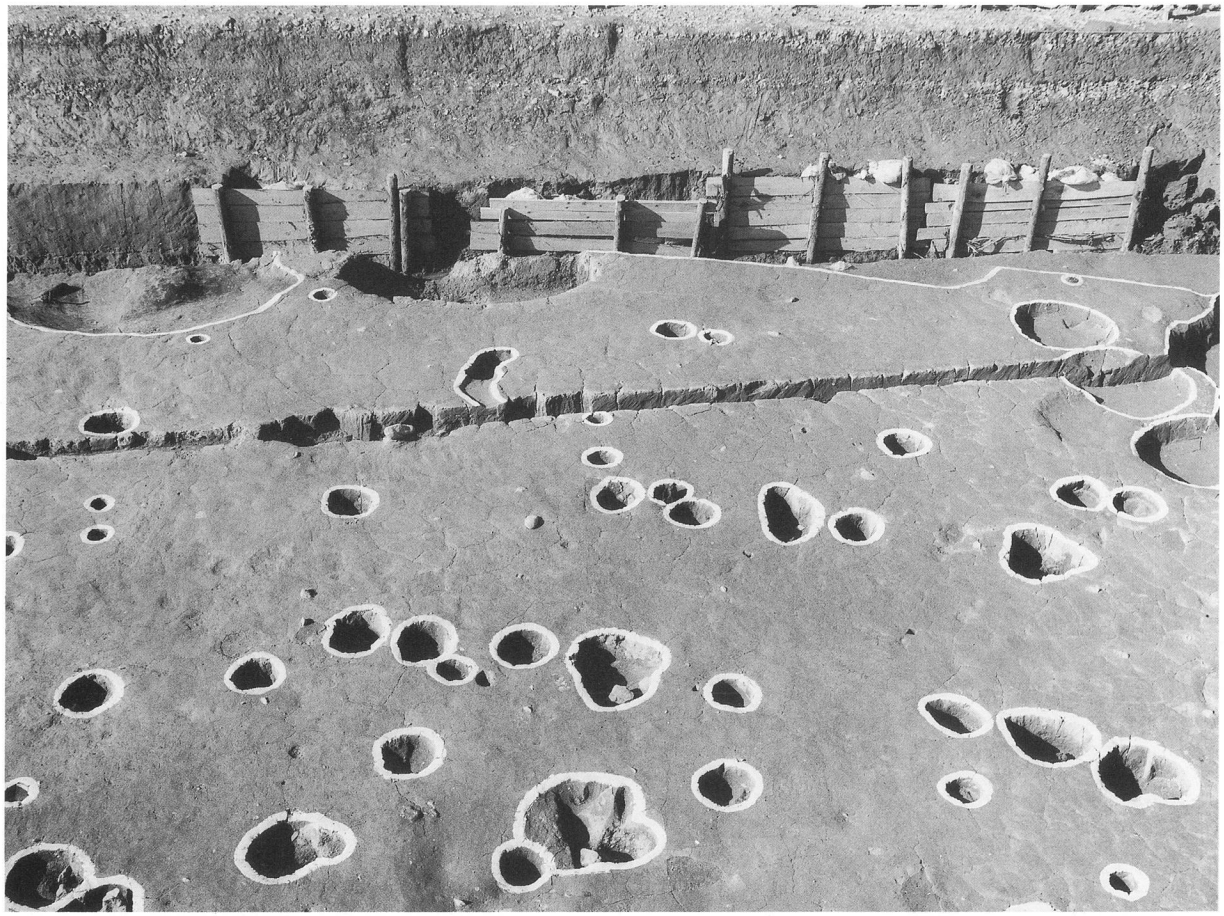


1　ＳＤ105（南から）

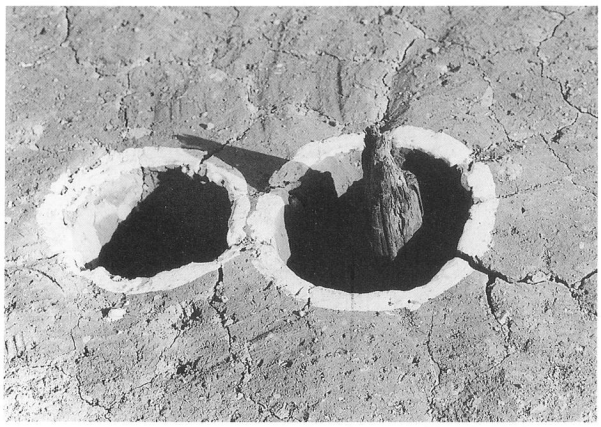
2　ＳＥ101（南から）

1　ＳＥ102（西から）

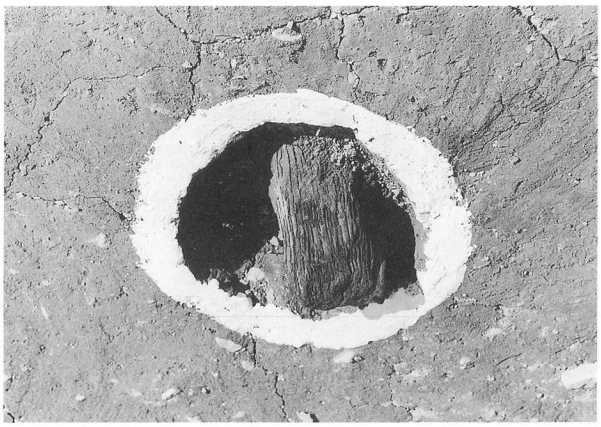
2　ＳＦ105遺物出土状況



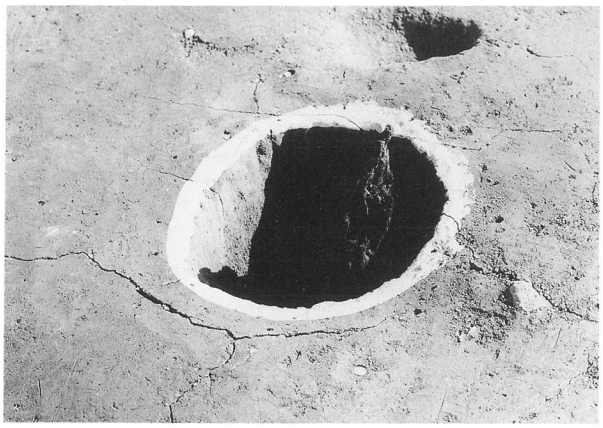
1　1区柱穴群（西から）



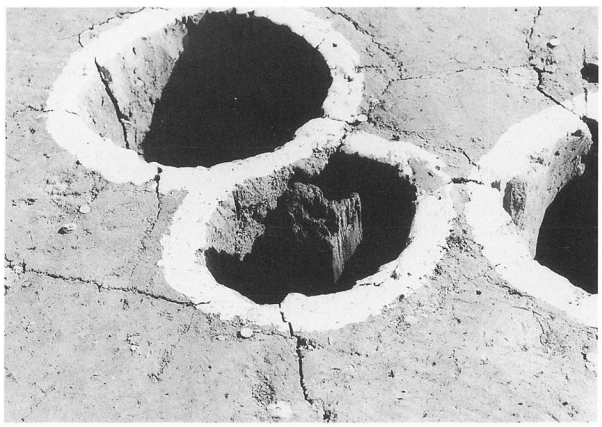
2　1区ＳＰ06



3　1区ＳＰ03



4　1区ＳＰ55



5　1区ＳＰ42

1　2区遺構全景（南から）

2　2区杭列全景（北から）

1　2区杭列（南西から）

2　ＳＤ205（東から）

1　ＳＨ201・202（南東から）

2　ＳＨ203（西から）

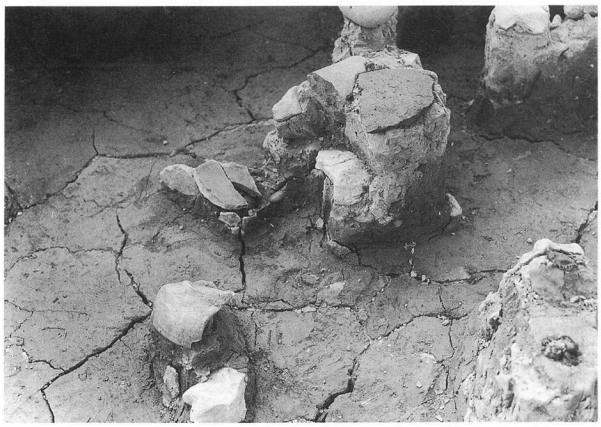
1　3・4区遺構全景（南から）

2　4区遺構全景（南から）

1　ＳＸ402・403（南から）

2　ＳＸ402完掘状況（西から）

1　ＳＤ302（西から）



2　ＳＤ302内土器出土状況

3　ＳＤ302内曲物出土状況

4　ＳＤ302内木製品出土状況

5　旧河道内折敷出土状況

1

3

4

38

44

45

46

64

67

69

出土土器(1)

70

84

85

87

96

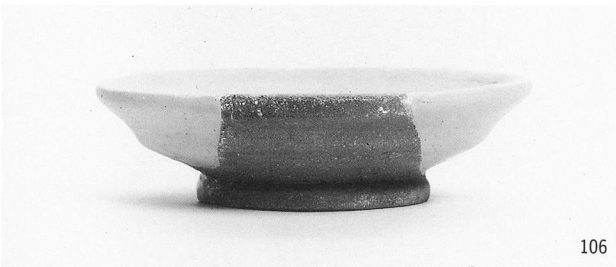
97

98

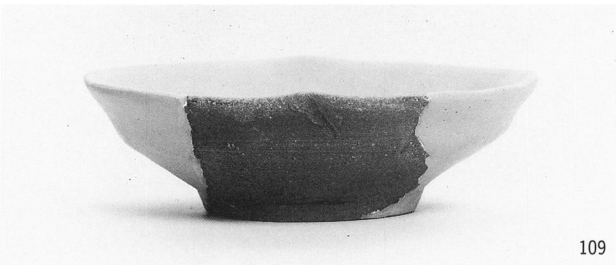
99

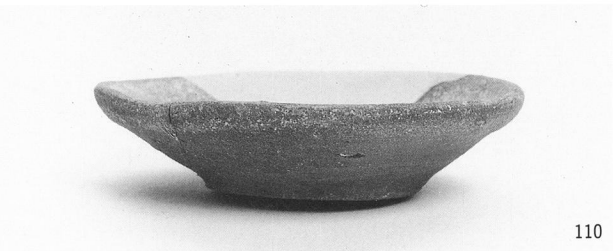
101

104


106

107


109


110

出土土器(2)

111

113

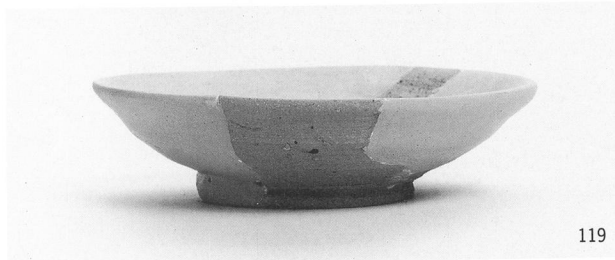
114

115

116

117

118


119

120

123

125

124

127

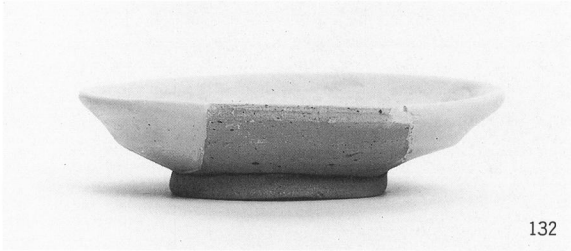
128

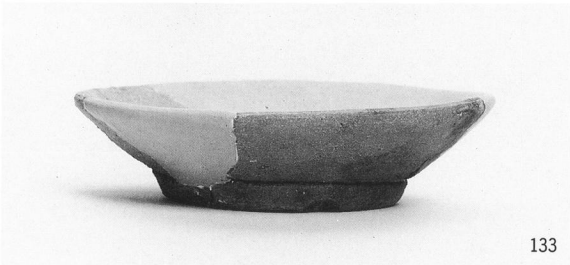
出土土器(3)

129

130

131


132

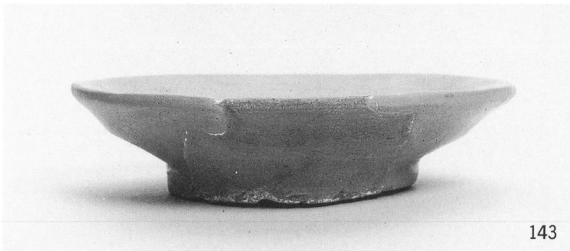

133

135

136

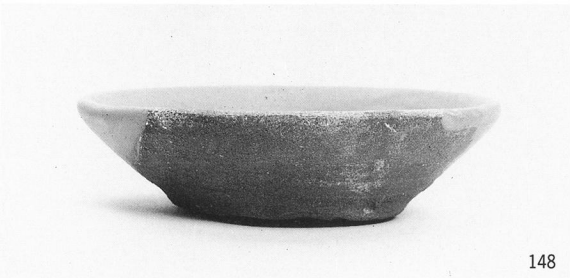
138

141


143

144

147


148

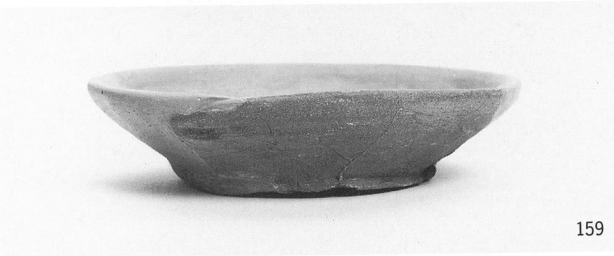
149

出土土器(4)

150

154

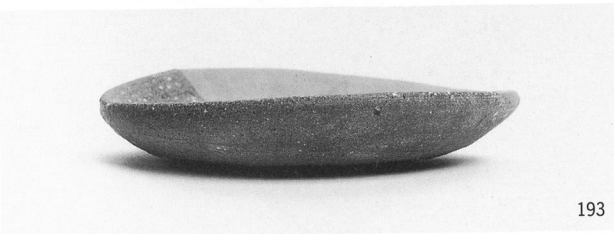
157


159

161

185

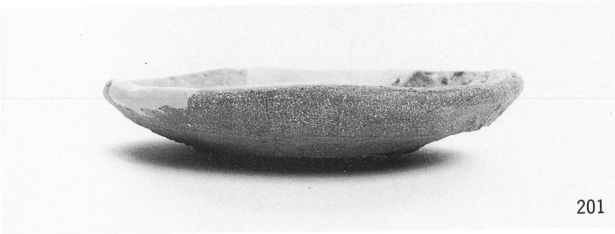
187


193

195

197

211


201

232

出土土器(5)

275

276

277

278

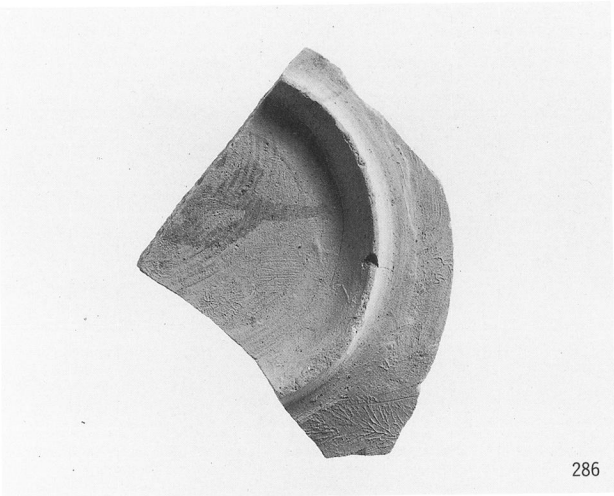
279

280

284

285

出土土器(6)


286

287

289

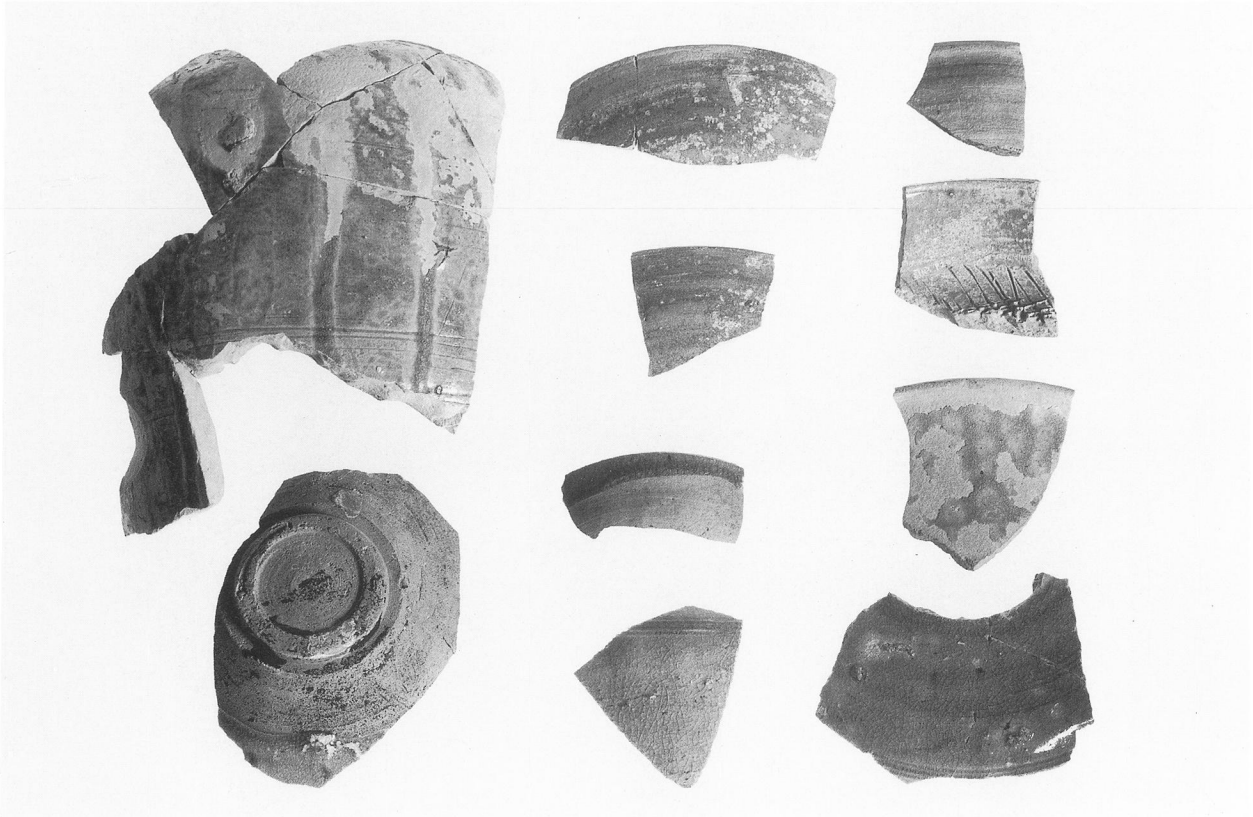
288

291

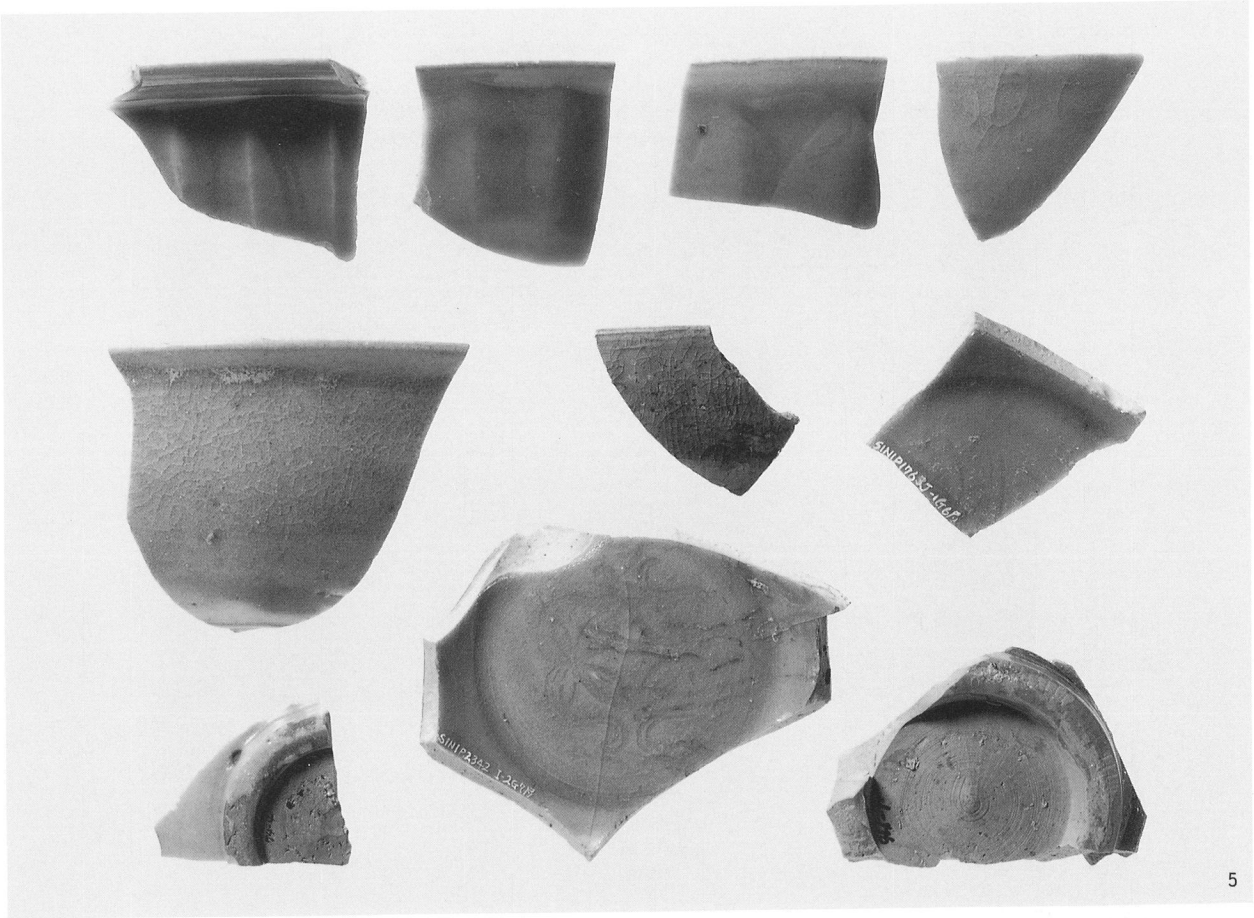
288

290

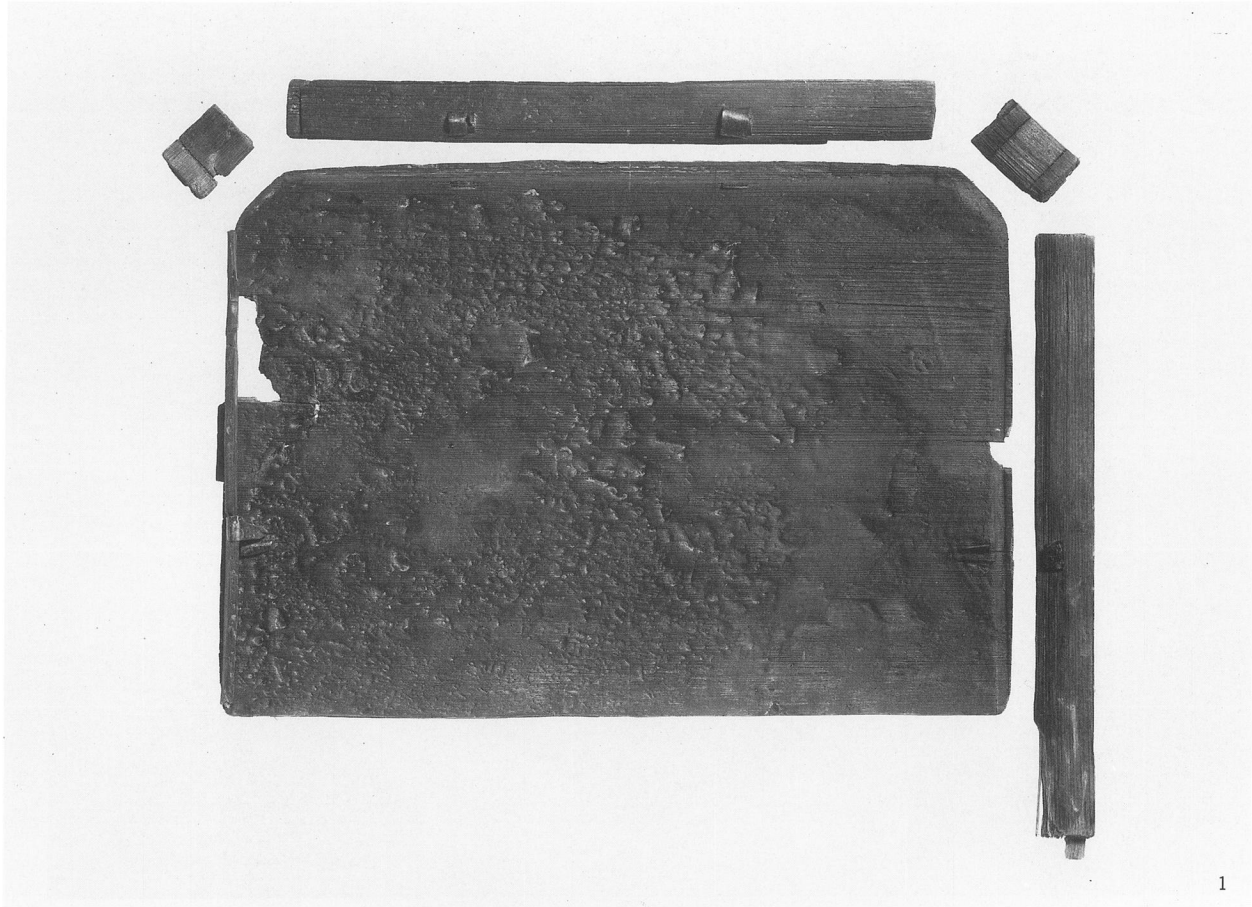
出土土器(7)

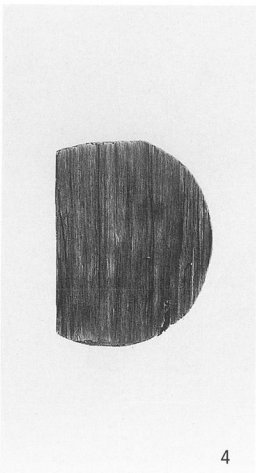


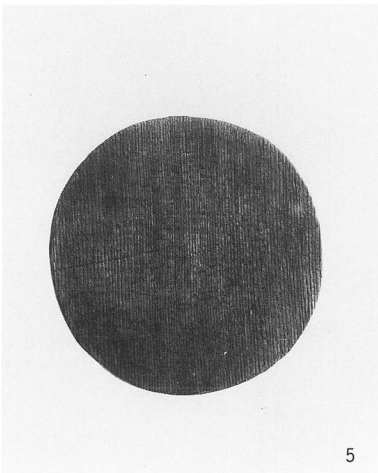
出土土器(8)



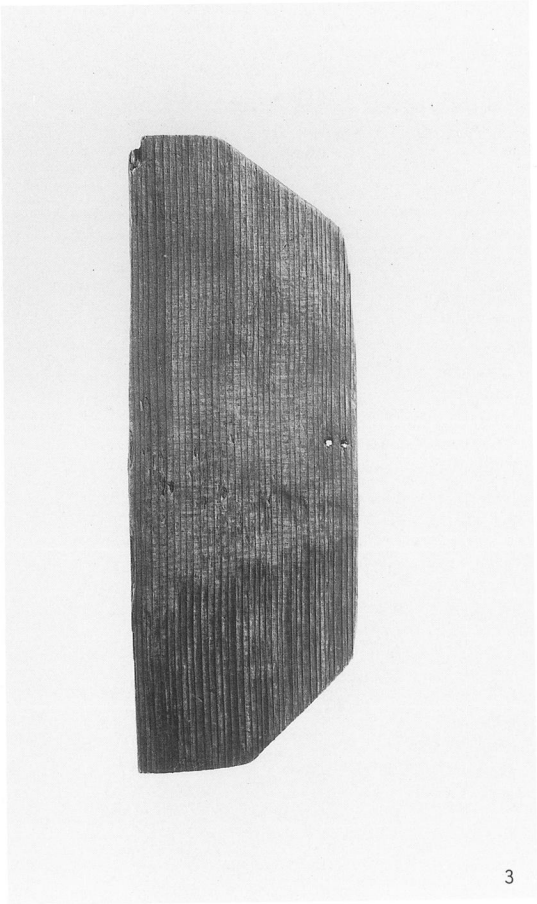
出土土器(9)







出土木製品(1)


3

6

7

8

13

9

10

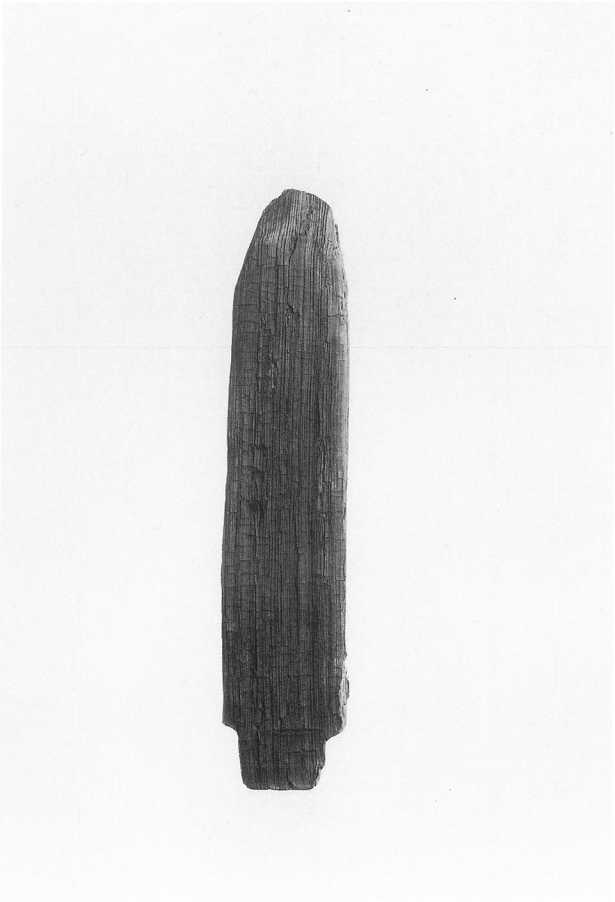
出土木製品(2)

11

17 18 19 20 21 22

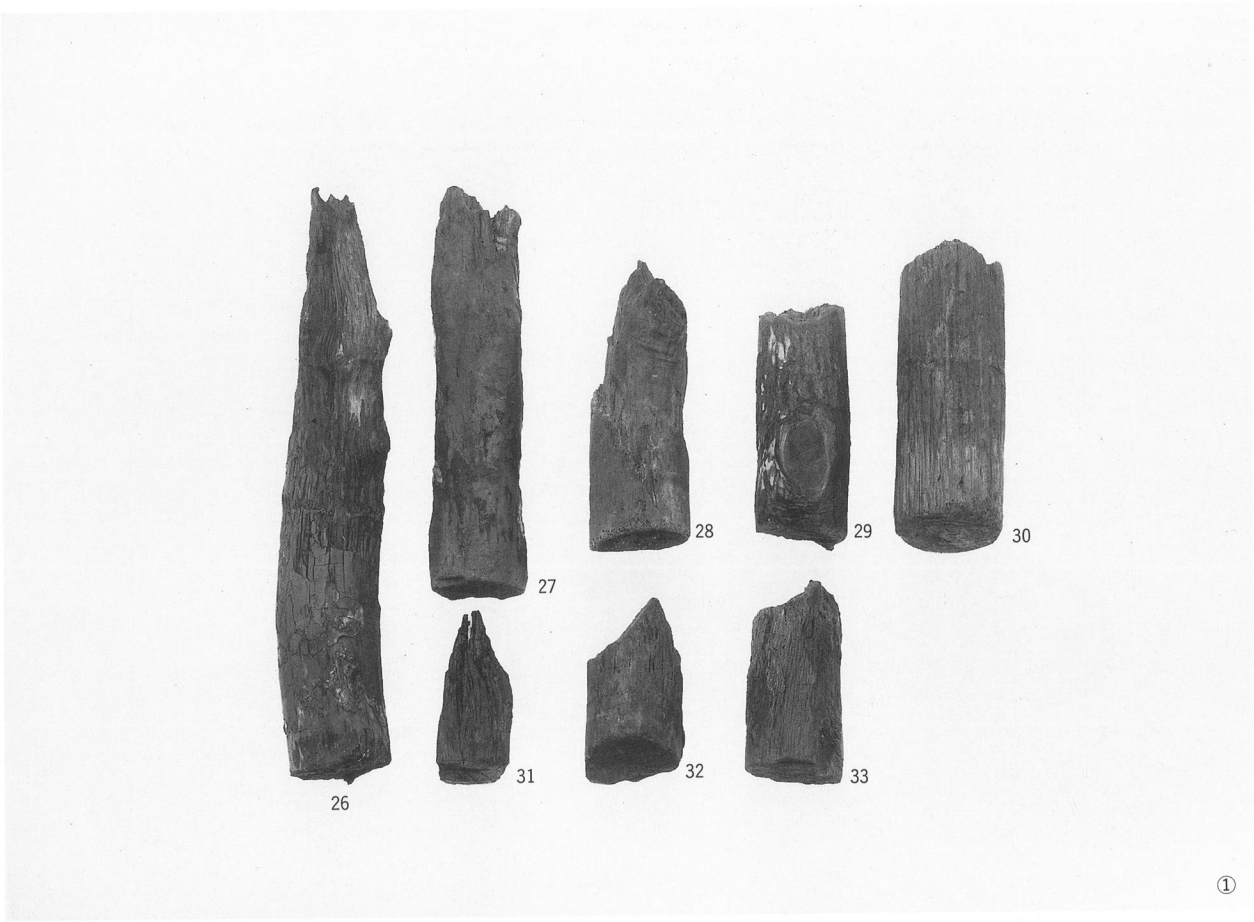
24

25



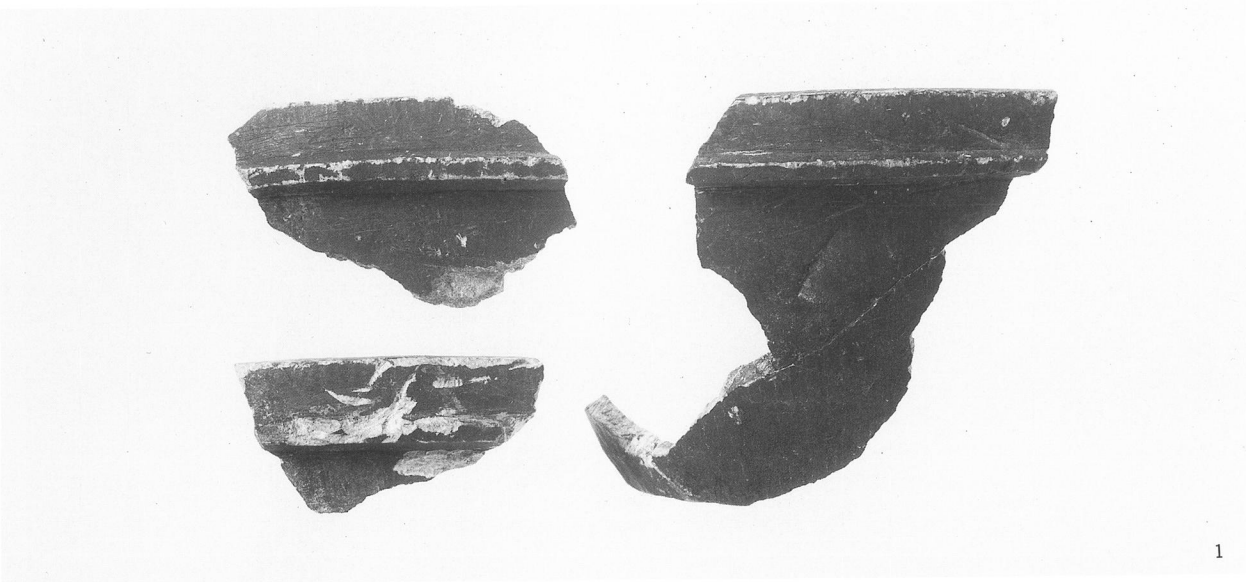
23

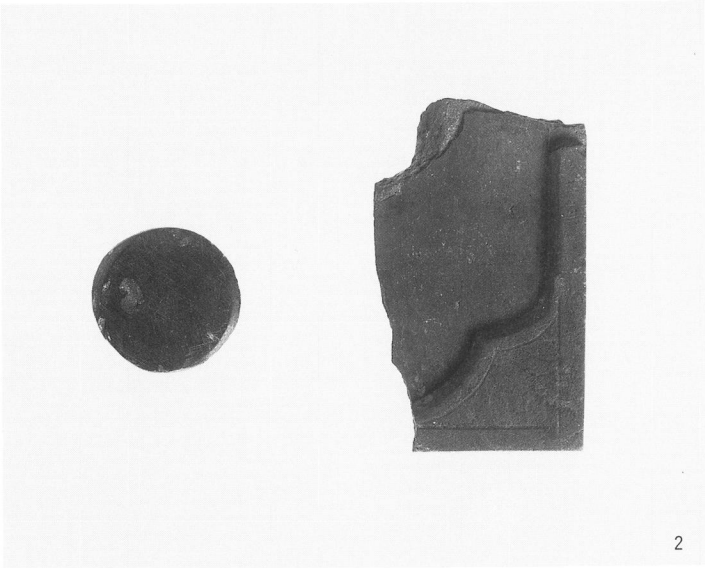
出土木製品(3)

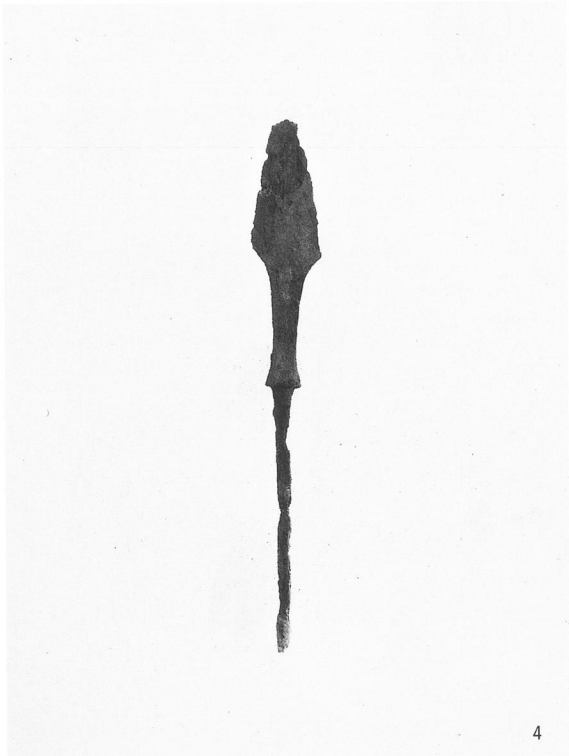


出土木製品(4)

出土石製品(1)







出土石製品(2) 鉄鏃・陶錘・土錘

報　告　書　抄　録

ふりがな	いしなりいせき
書名	石成遺跡
副書名	平成５年度大津谷川河川改修工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第66集
編集者名	中鉢賢治　川本忍　山本真央
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18-5　TEL 0543-67-1171(代)
発行年月日	1995年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしなりいせき 石成遺跡	しずおかけんしまだし 静岡県島田市 おちあい 落合	22209		34° 51′ 05″	138° 11′ 00″	19930617 ～ 19940331	延1,670	河川の 改良工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石成遺跡	集落跡	平安時代 末～鎌倉 時代	掘立柱建物３棟 溝19条 土坑８基 集石土坑４基 杭列 ピット群	山茶碗　灰釉陶器 輸入磁器　石製品 木製容器　柱根	区画溝を伴う屋敷地 跡

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告　第66集

石　成　遺　跡

平成５年度大津谷川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1995年３月31日

発行所　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目４番25号
ＴＥＬ（054)286－0236㈹